

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 昭和41年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/0000001194">https://doi.org/10.15084/0000001194</a>

昭和 41 年度

国立国語研究所年報

— 18 —

国立国語研究所

1967

## はじめに

本書は、昭和41年度における研究および事業について述べたものである。41年度は、電子計算機による新聞語いの調査が確実な一步を踏みだしたと、日本言語地図が引き続き進行していることなどがおもなことである。

41年度に刊行したものは次の通りである。

- |              |           |
|--------------|-----------|
| 日本言語地図(2)    | (報告 30—2) |
| ことばの研究 第3集   | (論集 3)    |
| 国語年鑑(昭和41年版) |           |

昭和42年10月

国立国語研究所長

岩淵悦太郎

# 目 次

刊行のことば

昭和 41 年度の調査研究のあらまし .....	1
現代語の文法の調査研究 .....	5
動詞・形容詞等の意味・用法の記述的研究 .....	10
日本言語地図の編集と刊行 .....	14
全国方言文法の対比研究 .....	15
中学生の言語習得に関する研究 .....	36
I 中学生の漢字習得に関する研究 .....	36
II 中学校の漢字学習指導の実態に関する調査 .....	69
幼児の言語発達に関する準備的研究 .....	82
言語の表現機能と伝達効果の研究 .....	106
I 言語表現における場面の効果の研究 .....	106
II 文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究 .....	119
明治時代語の調査研究 .....	121
新聞の語彙調査 .....	126
電子計算機による話しことば資料の分析・処理の研究 .....	131
社会構造と言語の関係についての基礎的研究 .....	133
現代語の表記法に関する調査研究 .....	142
国語関係文献の調査 .....	156
図書の収集と整理 .....	163
庶務報告 .....	164

## 昭和41年度の調査研究のあらまし

本年度の研究項目および分担は次の通りである。

- |                                   |          |
|-----------------------------------|----------|
| (1) 現代語の方法の調査研究                   | 話しことば研究室 |
| (2) 動詞・形容詞等の意味・用法の記述的研究           | 書きことば研究室 |
| (3) 日本言語地図の編集と刊行                  | 地方言語研究室  |
| (4) 全国方言文法の対比研究                   | 〃        |
| (5) 中学生の言語習得に関する研究                | 国語教育研究室  |
| (6) 幼児の言語発達に関する準備的研究              | 〃        |
| (7) 言語の表現機能と伝達効果の研究               | 言語効果研究室  |
| (8) 明治時代語の調査研究                    | 近代語研究室   |
| (9) 新聞の語彙調査                       | 第1資料研究室  |
| (10) 電子計算機による話しことば資料の分析・<br>処理の研究 | 言語計量調査室  |
| (11) 社会構造と言語の関係についての基礎的研<br>究     | 第2資料研究室  |
| (12) 現代語の表記法に関する調査研究              | 第3資料研究室  |
| (13) 国語関係文献の調査                    |          |
- (1) 「現代語の文法の調査研究」は、前年度に引き続き「語順等の研究」「句関係の研究」「イントネーションの研究」を進め、さらに「文における表現の類型に関する研究」をも実施した。
- (2) 「動詞・形容詞等の意味・用法の記述的研究」は、過去2年間に作成した用例カードの整理を行ない、これを資料とした一語一語の記述のほか、意味上同じグループをなす語の体系的な分析記述に着手した。
- (3) 「日本言語地図の編集と刊行」は、「日本言語地図」第2集「動詞その他」を完成した。
- (4) 「全国方言文法の対比研究」は、今年度新しく開始したものである。この

研究は、地方研究員の協力を得て、沖縄をふくむ全国 60 地域の方言について、その文法を、相互に、また、標準語と比較できる形で、統一的方法によって調査研究しようとするもので、3 年継続の予定である。本年度は、方言の動詞・形容詞・名詞が文(主文および従属文)の述語として用いられる場合のさまざまな形式と、特定の生活場面で使われることばについて調査した。このうち、後者は今年度限りのもの、前者は今年度に準備調査を行ない、来年度に本調査を行なう予定である。

- (5) 「中学生の言語習得に関する研究」は、前年度に引き続き、実験学校における 8 人の事例生徒の漢字習得の内容と習得経路とを調査し、数校において習得要因調査を実施し、学校における漢字学習指導の実態についてアンケート調査を行なった。
- (6) 「幼児の言語発達に関する準備的研究」は、前年度に開始したもので、今年度は、前年度に集めた言語発達文献についてその一覧表と展望を作成し、実験・協力園を委嘱して、語音知覚の発達、文字の読み書き能力の発達、および助数詞の発達を調べた。
- (7) 「言語の表現機能と伝達効果の研究」は、「言語表現における場面の効果の研究」と「文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究」に分かれ、前者は、今年度は「主語の有無と場面との関係」への基礎として「文における主語の役割り」を調べるための文カードの追加と、主述関係の分析とを主とした。後者は第 2 年目で、前年度採集した幼稚園児の談話資料について、その構文の分析に着手しながら、資料を補充するための調査をも続けた。
- (8) 「明治時代語の調査研究」は、前年度に引き続き、「安愚楽鍋」の助詞・助動詞の索引作成、「花柳春話」のふりがなつき漢字語の調査、近代語資料の調査の探訪を実施した。
- (9) 「新聞の語彙調査」は、電子計算機を用いて大量に語彙調査をしようとするもので、41 年 1 月 1 日から 12 月 31 日までの朝日、毎日、読売の朝夕刊全紙面に含まれる語(推定 8,500 万文節)を母集団とし、1 / 60 の比率で

サンプルを抽出した。サンプル数は、14,220 ブロック、1 ブロック平均 100 文節である。抽出された文節には層別注記を行ない、漢テレによる入力データとしては 1 紙朝刊半年分(約 14 万語)のサンプルを処理した。

- 10) 「電子計算機による話しことば資料の分析・処理の研究」は、昭和 38 年度に松江市で録音したある市民の家庭内での一日中の発話を文字化したものをテキストとして、これを電子計算機に入力して処理を行なって研究法を開拓しようとするもので、その処理プログラムの主要部分の完成にまで進んだ。
- 11) 「社会構造と言語の関係についての基礎的研究」は、前年度に福島県保原地区および茂庭地区について調査を開始したが、今年度はこれらの地区の音韻体系と文法体系について面接調査と採集調査とを行なった。また、親族語彙の用法について調査して、親族組織との関係をみようとした。
- 12) 「現代語の表記法に関する調査研究」のうち、「文字使用の実態調査」については、前調査として大学生 182 名、本調査の最初の着手分として中学生 746 名を被験者とし、送りがな、および漢字とかなの使い分けの問題点について調査し、別に、「戦後の表記法の変遷に関する準備的調査」を開始した。
- 13) 「国語関係文献の調査」は、例年の通り新聞・雑誌・単行本について調査を行ない、『国語年鑑』の資料として整理した。

本年度の研究組織は次の通りである。

◇第 1 研究部 部長 大石初太郎

話しことば研究室 宮地 裕(室長) 鈴木 重幸

書きことば研究室 西尾 寅弥(室長) 宮島 達夫

地方言語研究室 上村 幸雄(室長) 野元 菊雄 徳川 宗賢

加藤 正信 高田 誠

◇第 2 研究部 部長 興水 実

国語教育研究室 芦沢 節(室長) 村石 昭三 根本今朝男

天野 清

言語効果研究室	高橋 太郎(室長)	大久保 愛	
◇第3 研究部	部長 山田 巖		
近代語研究室	見坊 豪紀(室長)	飛田 良文	
◇第4 研究部	部長 林 大		
第1 資料研究室	林 四郎(室長)	石綿 敏雄	南 不二男
	田中 章夫	松本 昭	
第2 資料研究室	飯豊 毅一(室長)	渡辺 友左	高田 正治
第3 資料研究室	斎賀 秀夫(室長)	土屋 信一	
言語計量調査室	林 四郎(室長併任)	斎藤 秀紀	木村 繁



# 現代語の文法の調査研究

## A 目的・意義

現代日本語の文法を、その個別的な問題の調査分析にもとづいて、文や句や文節の構成など、文法の各分野ごとに組織的に記述することを目指す。

従来、この研究室で扱ってきた話しことば資料（日常談話等および映画シナリオ）による文法研究の継続のものを含むとともに、書きことば資料に関しても調査研究を行ない、また、一部については各地方言の文法との対比的調査研究をも行なう。これらによって、現代東京語（ないしは共通語）を中心とする現代日本語の文法を、重要な個別的問題の調査のうえに、体系的に研究し記述しようとするものであって、いままでの文法研究の手うすな分野を開拓し、国語教育や国語改善などの実践上の問題に対しても寄与するところがあることを期する。

## B 担当者

本年度のしごとの項目としごとに当たった者は、次のとおりである。

- 1 語順等の研究(第4年度)-----鈴木重幸
- 2 句関係の研究(第2年度)-----宮地裕
- 3 文における表現の類型に関する研究(第1年度)---同上
- 4 イントネーションの研究(第4年度)-----同上

衛藤蓉子がこれらの研究作業を助けた。

## C 本年度の作業

### 1 語順等の研究

この研究の第4年度として、映画シナリオの会話文による語順およびそれに関連するシンタクス上の問題の分析をひきつづき行なった。本年度のおも

な作業は、

- (1) 目的語・補語を含む文の語順の分析(前年度からの継続)
- (2) 主語を含む文の語順の分析
- (3) いわゆる複合述語とそれに準じるものの構成部分の語順の分析

である。この調査の成果のまとめは次年度に行なり予定である。

## 2 句関係の研究

本年度は、下記文学作品の会話文のうち、接続助詞およびそれに準じるもの(一部の形式名詞、中止的に使われた連用形など)を含む文(約1,300例)をとりあげ、これらに注目して、一次的な分類・整理を行なった。その過程で『現代語の助詞・助動詞』(国研報告3)の記述と対照した。この結果は、必要な注記を加えて、『接続助詞用例集』として少部数謄写印刷した。これについては宮地の指示によって衛藤が作業を行ない宮地が総括した。

成立年代	作者名	作品名
1923	里見 淳	多情仏心(前篇)
1931	永井 荷風	つゆのあとさき
1935 ~ 1937	川端 康成	雪 国
1936 ~ 1938	堀 辰雄	風立ちぬ
1939	太 宰 治	富嶽百景

## 3 文における表現の類型に関する研究

文を表現意図によって、大きく詠嘆表現、判断叙述表現、要求表現、応答表現の4類に分け(『話しことばの文型1・2』(国研報告18・23)参照)、下記文学作品の会話文について、4類のうちでこまかい分化のある判断叙述表現、要求表現の類をとりあげ(用例約7,000文)、さきに宮地の行なった「文における表現の類型」(NHK『文研月報』'62年12月号)にもとづいて、そこに現われた表現の類型的な形式によって分類した。この結果は、必要な注記を加えて、「小説会話文における表現類型形式用例集」として少部数謄写印刷した。これについては岡崎奉子(臨時補助者)が作業を助けた。

成立年代	作 者 名	作 品 名
1923	正 宗 白 鳥	生まざりしならば
1926	宮 沢 賢 治	銀河鉄道の夜
1926	宮 本 百 合 子	伸 子
1928	山 本 有 三	波

#### 4 イントネーションの研究

共通語との対比資料として採録した尾高一型アクセント都城方言の録音資料によるイントネーションの研究をまとめるため、同資料の細部の検討と、問題点の考究・整理を行ない、報告の一部を記述した。同資料は音韻表記で、アクセント・イントネーション記号・共通語訳つきであるが、その一部の意味内容の再検討等に、都城市五十市中学校教諭鈴木久雄氏の協力を受け、資料全般の校閲を鹿児島大学教授上村孝二氏に願った。この調査の成果の報告は次年度に行なう予定である。

なお、本年度、下記の文庫本(2,014ページ)から、文法分析のための資料用カード約120,000枚(異なり4,000枚)を作製した。これは、40年度に書きことば研究室がカード化のための途中の段階まで進めたものを、当研究室と言語効果研究室が共同でカード化したものである。その作品の選びかたは、書きことば研究室が40年度にカード化したばあいと同じである(年報17, 26ページ(1), (2)参照)。

作品年代	作 家 名	作品名(いずれも新潮文庫)	ページ数
1923	宇 野 浩 二	子を貸し屋	77
1925	水 上 瀧 太 郎	大阪の宿	245
1927	滝 井 孝 作	無限抱擁	216
1928	徳 永 直	太陽のない街	280
1933	尾 崎 一 雄	暢気眼鏡	27
1935~ 6	高 見 順	故旧忘れ得べき	202
1937	島 木 健 作	生活の探究(第一部)	266
1938	火 野 葦 平	妻と兵隊	121

作品年代	作家名	作品名(いずれも新潮文庫)	ページ数
1938	舟橋聖一	木石	39
1940	織田作之助	夫婦善哉	45
1949	伊藤整	火の鳥	234
1949~56	円地文子	女坂	199
1955	石原慎太郎	太陽の季節	63

(以上計 2,014 ページ)

(宮地)

<付> 話しことは研究室 録音資料 [東京語(共通語)の部]一覽 (追加)

(前年度までの一覽は昭和40年度の年報に所載)

リール番号	略	称	速度 cm/秒	時間 分秒	媒体	話し手		文字化	録音 年月	分類	備	考
						数	性別					
282	テレビ	本島則夫モーニング・ショウ	9.5	60—	テレビ	複	男女	有	'65-12	ニュース		
283	国語	問題を語る	≒	50—	≒	≒	≒	≒	'66-6	論		
284	競輪場	内アノウンス	19.0	15—	生	≒	≒	≒	'66-4	報		
285	テレビ	C M 集	≒	120—	テレビ	≒	≒	≒	'66-6	コメンタル 演		[後楽園競輪場]
286	外国人	日本語弁論大会	≒	30—	生	≒	男女	≒	'65-5	説		[第6回]—1
287	≒	≒	≒	25—	≒	≒	男女	≒	≒	≒		≒ —2
288	≒	≒	≒	25—	≒	≒	≒	≒	≒	≒		≒ —3
289	≒	≒	≒	25—	≒	≒	男	≒	≒	≒		≒ —4
290	外国人	日本語弁論大会	9.5	50—	≒	≒	男女	≒	'66-5	≒		[第7回]—1
291	≒	≒	≒	40—	≒	≒	男	≒	≒	≒		≒ —2
292	≒	≒	≒	30—	≒	≒	男女	≒	≒	≒		≒ —3

# 動詞・形容詞等の意味・用法の記述的研究

## A 目的・意義

目的 現代語の動詞・形容詞等の意味・用法を、言語作品のなかで実際につかわれた用例によって分析・記述すること。

意義 大量の用例をつかうことによって、主観的、一面的な記述に陥ることなく、従来よりもはるかにくわしく、客観的な記述ができる。これは、将来の辞書編集における語釈方法の基礎資料となるとともに、語の意味・用法の分析・記述の方法論にも寄与するものである。

## B 担当者

動詞は宮島達夫、形容詞等は西尾寅弥が担当し、高木翠が作業を助けた。

## C 本年度の作業

過去2年間に作成した用例カードの整理を行ない、それを主な資料として、動詞・形容詞等の意味・用法の分析・記述を行なった。

### I 用例カードの整理

39・40年度に採集した用例カード76万枚のうち、直接、早急に必要な動詞・形容詞・形容動詞のカード約33万枚の五十音順排列を行ない、完了した。

なお、2年間に採集した全52作品を年代順に排列すると次表のようになる。作品の選択方法については、39年度・40年度の年報を参照されたい。

	作家名	作品名	年代
✓ 1	国木田独歩	武蔵野	1898
✓ 2	泉鏡花	高野聖	1900
③	徳富健次郎	岩 思出の記(上) 13, 10 (35) 150	1901

作家名	作品名	年代
4 伊藤左千夫	志 野菊の墓 26.10. 100	1906
5 島崎藤村	志 破戒 32.1. 150	1906
✓ 6 田山花袋	蒲団 ✓	1907
✓ 7 二葉亭四迷	平凡 ✓	1907
8 長塚節	志 土(上) 24.7. 100	1910
✓ 9 森鷗外	阿部一族 ✓	1913
✓ 10 有島武郎	志 或る女(前) 25.5. 100	1913
✓ 11 鈴木三重吉	桑の実 ✓	1913
12 夏目漱石	志 ころろ 3.7. 150	1914
✓ 13 徳田秋声	あらくれ ✓	1915
✓ 14 芥川竜之介	羅生門 ✓	1915
15 倉田百三	志 出家とその弟子 23.7. 100	1916
✓ 16 佐藤春夫	田園の憂鬱 ✓	1917
17 久保田万太郎	志 末枯 23.6. 130	1917
✓ 18 菊池寛	恩讐の彼方に ✓	1919
✓ 19 武者公路実篤	友情 ✓	1919
✓ 20 志賀直哉	暗夜行路(前) ✓	1921
21 長与善郎	志 青銅の基督 2.12. 50	1922
22 正宗白鳥	志 生まざりしならば 26.12. 100	1923
✓ 23 里見弴	多情仏心(前) ✓	1923
✓ 24 宮沢賢治	銀河鉄道の夜 ✓	1926?
✓ 25 宮本百合子	伸子(上) ✓	1926
26 山本有三	志 波 5.10. 200	1928
✓ 27 小林多喜二	蟹工船 ✓	1929
28 林芙美子	志 放浪記 22.9. 130	1930
29 横光利一	志 機械 30.12. 100	1930
30 野上弥生子	志 真知子(前) 27.12. 100	1930
✓ 31 永井荷風	つゆのあとさき ✓	1931

	作家名	作品名	年代
✓	32 谷崎潤一郎	春琴抄 ✓	1933
○	33 室生犀星	（ん）あにいうと <sup>(37)</sup> 30.3.90	1934
○	34 佐多稲子	（ん）くれない <sup>(38)</sup> 27.5.60	1936
○	35 阿部知二	※. 冬の宿 <sup>(38)</sup> 31.3.100	1936
✓	36 川端康成	雪国 ✓ <sup>(39)</sup>	1937
○	37 中山義秀	（ん）厚物咲 23.6.90	1938
✓	38 堀辰雄	風立ちぬ ✓	1938
○	39 岡本かの子	（ん）河明り <sup>(37)</sup> 23.9.120	1939
✓	40 太宰治	富嶽百景 ✓	1939
○	41 中島敦	（ん）李陵 <sup>(39)</sup> 26.10.110	1943
○	42 丹羽文雄	（ん）厭がらせの年齢 <sup>(37)</sup> 23.7.110	1947
○	43 大仏次郎	（ん）帰郷 <sup>(44)</sup> 27.10.140	1948
○	44 田宮虎彦	（ん）落城 <sup>(38)</sup> 28.9.100	1949
○	45 井上靖	（ん）鬪牛 <sup>(39)</sup> 25.11.80	1949
○	46 獅子文六	（ん）自由学校 <sup>(37)</sup> 28.6.130	1950
○	47 井伏鱒二	（ん）本日休診 <sup>(40)</sup> 30.6.90	1950
○	48 大岡昇平	（ん）野火 <sup>(37)</sup> 29.4.80	1951
○	49 野間宏	※. 真空地帯(上) <sup>(37)</sup> 31.1.100	1952
○	50 三島由紀夫	（ん）潮騒 <sup>(39)</sup> 30.12.80	1954
○	51 中野重治	（ん）むらぎも <sup>(37)</sup> 25.9.140	1954
○	52 石川達三	（ん）人間の壁(上) <sup>(37)</sup> 36.3.130	1959

なお、現在書きことば研究室にある、語のカード(用例つき)は、下のとおりである。

総合雑誌(1953~54年)の分 自立語 約23万(うち、動詞・形容詞  
約6万)

現代雑誌九十種(1956年)の分 自立語 約44万(うち、動詞・形容詞  
約11万)

付属語 約9万



文学作品の分	動詞・形容詞・形容動詞	約33万
	その他の自立語など	約33万(整理中)
	注目すべき用例	約10万(整理中)

ただし、文学作品からは、つぎのように形式化したものの用例は採集してない。

～ている(ある, ない, しまう, おく, よい…………)

～について(よって, 対して, とって…………)

～なければいけない(ならない)

～ことがある(ない)

～という～

～にすぎない

## II 意味・用法の分析・記述

39・40年度に作成したカードの整理ができて使える状態になったので、それを主な資料とし、さらに上記の現代雑誌九十種・総合雑誌のカードも利用して、動詞・形容詞の意味・用法の分析・記述を進めた。一語一語の記述のほかに、意味上グループをなす語の体系的な記述を目ざす総論の執筆またはその準備を行なった。

- |     |                                   |
|-----|-----------------------------------|
| 動詞  | 1. 「開ける」「延びる」「飲む」「食う」「はかる」「読む」の記述 |
|     | 2. 移動を表わす動詞の総論のつづき                |
| 形容詞 | 1. 「かたい」「あかるい」の記述                 |
|     | 2. 形容詞・形容動詞の総論のための準備              |

## D 今後の予定

一語一語の意味・用法のくわしい分析・記述は今年度で一応打ち切りとし、42年度から2～3年の計画で、動詞および形容詞・形容動詞のそれぞれについて、意味の体系的な記述を目ざす総論(仮称)をまとめる予定である。

(西尾)

## 日本言語地図の編集と刊行

地方言語研究室では、昭和40年度以降、6か年計画で日本言語地図の編集と刊行とを行なう。毎年50面ずつ、6か年で計300面の地図を刊行する計画である。

第1集 音声・形容詞その他

第2集 動詞その他

第3集 人に関する名詞など

第4集 人の生活に関する名詞など

第5集 自然(動・植物など)に関する名詞など

第6集 自然(天然現象など)に関する名詞など

昭和41年3月には、「日本言語地図」第1集が刊行された。A1版地図50面、参考地図(調査地点一覧)1面、別冊解説書(調査の方法および各図の説明)2部よりなっている。A4版のバインダー装である。(なお、昭和42年4月に、大蔵省印刷局からその売品が発刊された。)

昭和41年度には、動詞に関する項目について完成した。編集と刊行に関する業務は、上村幸雄、野元菊雄、徳川宗賢、加藤正信、高田誠が分担し、白沢宏枝、芥川豊子が協力した。さらに非常勤職員W・A・グロータースほか多くの人々の援助を受けた。氏名は、地図第2集の付録「各図の説明」のまえがきに示してある。

(徳川)

# 全国方言文法の対比研究

## A 目的・意義，および研究計画の概要

日本語の方言の文法を，相互に，また，標準語と比較できるかたちで，研究する。そのために，国立国語研究所地方研究員の協力をえて，沖縄をふくむ全国約60の方言について，統一的な方法による調査をおこなう。[研究期間は3年とする。

なお，この研究では，研究の重点を，方言の文法現象のうち，文の述語としてもちいられる各種形式の形態論的構造の記述におく。

この研究の目的は，方言の文法について，統一的な方法による全国的規模の調査をおこなうことによって，今後の，方言および標準語の文法の各種の研究に必要な基礎的資料をえることである。また，えられる資料は，方言地帯における標準語教育を改善するためにやくだつはずである。

なお，この研究は，地方言語研究室が昭和38年からおこなってきた「各地方言の共通語との対照的研究」をひきつぐものである。

## B 担 当 者

調査Ⅰに関する計画の立案，調査票等の作成は地方言語研究室の上村幸雄が担当した。調査Ⅱに関する計画の立案，調査票等の作成は話しことば研究室の宮地裕が担当した。

41年度の調査は，つぎにしるす昭和41年度国立国語研究所地方研究員47名と，国立国語研究所員7名，合計54名がおこなった。

昭和41年度国立国語研究所地方研究員

担当地域	氏 名	所 属 機 関	住 所
北海道Ⅰ	石垣 福雄	市立東栄中学校 <校長>	札幌市手稲町西野79—9

*北海道Ⅱ	佐藤 誠	北海道教育大学函館分校<教授>	函館市湯川町2の29の18
青森	此島 正年	弘前大学教育学部<教授>	弘前市西ヶ丘町6の1
岩手Ⅰ	小松代 融一	岩手医科大学教養部<教授>	盛岡市山岸町1丁目1の2
*岩手Ⅱ	本堂 寛	国立一関工業高等専門学校<助教>	一関市山目字立沢立沢住宅84号
*宮城	川本 栄一郎	東北大学大学院<学生>	仙台市北六番丁301の11
秋田	北条 忠雄	秋田大学学芸学部<教授>	秋田市手形住吉町7番33号
山形	佐藤 亮一	聖和学園短期大学<助教>	仙台市福室字松堂市営住宅L B32の135
*福島	渡辺 義夫	福島大学教育学部<講師>	福島市浜田町1の5 逢田方
*茨城	城野 林正路	千葉大学留学生部<助手>	東京都新宿区中落合2の4の7 山田方
栃木	多々良 鎮男	宇都宮大学<助教>	宇都宮市北一の沢町15の2
*群馬 △東 神奈	馬玉 外山 映次 京Ⅰ 後藤 和彦	埼玉大学教育学部<助教>	浦和市常盤8の2の12
*東	京Ⅱ 大島 一郎	フェリス女学院大学<講師>	横浜市港北区大曾根町460
新	潟 剣持 隼一郎	東京都立大学人文学部<助教>	東京都杉並区善福寺1の2の22
富山	岩井 隆盛	県立柏崎高等学校<教諭>	柏崎市桜木町2番7号
石	山川 岩井 隆盛	金沢大学法文学部<教授>	石川県河北郡津幡町字清水ホ313
福	井 佐藤 茂	福井大学<教授>	福井市乾徳4丁目3番26号
山	梨 清水 茂夫	山梨大学<教授>	山梨県中巨摩郡白根町百々3062
△長	野 馬 瀬 良雄	信州大学人文学部<助教>	松本市北深志1の8の17
岐	阜 谷 開 石雄	岐阜県教育委員会<充指導主事>	岐阜市旦の島402
△静	岡 日 野 資純	静岡大学人文学部<助教>	静岡市北安東694の6

愛知	山田達也	名古屋市立大学教養部 <助教授>	名古屋市中村区大秋町3の26
三重	慶谷寿信	名古屋大学文学部 <助手>	名古屋市千種区北千種町愛宕前150の2千種東住宅7-44
滋賀	奥村三雄	岐阜大学教育学部 <助教授>	岐阜市長良福光柿木前1897
京都	遠藤邦基	京都大学大学院 <学生>	京都市左京区岩倉花園町403大久保方
*大阪	土部弘	大阪学芸大学 <助教授>	大阪市天王寺区空清町8の10
兵庫Ⅰ	和田実	神戸大学教養部 <助教授>	神戸市垂水区神田町3の6
奈良	西宮一民	皇学館大学 <教授>	伊勢市中村町30の14
和歌山	村内英一	和歌山大学教育学部 <助教授>	和歌山市片岡町1の1
*鳥取	鏡味明克	岡山大学教育学部 <講師>	岡山市津島岡山大学教育学部内
鳥根	広戸惇	鳥根大学文学部 <教授>	出雲市今市町元宮町
岡山	虫明吉治郎	県立岡山操山高等学校 <教諭>	岡山市津島2413の15
*広島	近藤四郎	県立呉宮原高等学校 <教諭>	広島県安芸郡坂町小屋浦9289
山口	阿波陽	県立豊浦高等学校 <教諭>	下関市稗田畑126 県教職員住宅205号
香徳兵 川島庫Ⅱ	加藤信昭	徳島大学教育学部 <助教授>	徳島市北島田町1の111の8 県営住宅矢三団地28号
愛媛	杉山正世	新田高等学校 <教諭>	今治市河南町2の267
高知	土居重俊	高知大学 <教授>	高知市弥生町3番16号
*福岡	岡野信子	県立若松高等学校 <教諭>	北九州市小倉区緑ヶ丘2丁目7の2
*佐長	賀崎神部宏泰	熊本女子大学 <講師>	熊本市出水町国府2124
熊本	秋山正次	熊本大学教育学部 <助教授>	熊本市清水町亀井530
大分	糸井寛一	大分大学教育学部 <助教授>	臼杵市海添190

宮崎岩本実	宮崎大学教育学部 <教授>	宮崎市下水流町 190 の 1
鹿児島Ⅰ 上村孝二	鹿児島大学法文学部 <教授>	鹿児島市武町 965
* 鹿児島Ⅱ 寺師忠夫		名瀬市金久町 13 の 8
沖縄Ⅰ 仲宗根政善	琉球大学<教授>	那覇市字大道 262
沖縄Ⅱ 外間守善	琉球大学<助教>	東京都杉並区上荻窪 1 の 57
* 沖縄Ⅲ 大城健	琉球大学文理学部 <助教>	那覇市首里汀良町 2 の 11

(\* 印は新任、△印は担当地域の変更を示す。所属機関、住所は 1966 年 5 月現在)

### 国立国語研究所員

上村幸雄 野元菊雄 徳川宗賢 加藤正信 高田誠(以上、地方言語研究室)、宮島達夫(書きことば研究室)、飯豊毅一(第 2 資料研究室)

また、白沢宏枝が、計画実施にともなう補助的作業と、地方研究員への連絡事務とを担当して、上村をたすけた。

## C 方法、および本年度の経過

本年度におこなった調査は、調査Ⅰと調査Ⅱとからなる。

調査Ⅰは、方言の動詞・形容詞・名詞が文(主文および従属文)の述語としてもちいられたばあいのさまざまな形式を全国統一的な方法でしらべることがを目的とする。調査には 2 年をかけることとし、1 年目である本年度におこなったのは予備的な調査で、来年度には同一地点で本調査をおこなう。

調査Ⅰをおこなうために、調査票(B4版48ページ、孔版印刷)と整理票(B4版6ページ、謄写印刷)をつくり、各調査者に送付した。調査票は、60の調査項目からなるもので、60のうちの37が動詞関係の項目、20が形容詞および名詞についての項目、のこりの3が終助詞その他の項目である。

調査Ⅱは、本年度のみで終了する調査で、特定の生活場面でつかわれることばをすることを目的とする。そのようなことばの例として、「ある人の在・不在をたずねるときのことば、およびそれに対する肯定・否定の答えをするときのことば」をえらんだ。

調査Ⅱのためには、調査票(B4版6ページ、孔版印刷)と、記入票(B4版17ページ、謄写印刷)とをつくり、各調査者に送付した。

また、調査Ⅰ、Ⅱの実施に必要な注意事項等をしるした調査票解説(B4版9ページ、孔版印刷)、およびその別紙「方言の表記について」(B5版4ページ、謄写印刷)をつくって、おなじく送付した。

各調査者は、調査票にしたがって調査をおこない、調査結果を整理票(調査Ⅰ)、記入票(調査Ⅱ)に記入し、これを方言言語研究室に報告した。

なお、方法の詳細については、上記の調査票解説の全文を末尾にそのまま付したので、それを見られたい。

## D 調査地点

本年度、各調査者が調査した地点は、つぎの56地点である。

石垣 福雄	北海道積丹郡積丹町字入舸
佐藤 誠	北海道亀田郡尻岸内町
此島 正年	青森県弘前市
小松代 融一	岩手県盛岡市
本堂 寛	岩手県一関市赤茨
川本 栄一郎	宮城県仙台市北六番町3の1の10
北条 忠雄	秋田県由利郡岩城町亀田
佐藤 亮一	山形県山形市長谷堂
渡辺 義夫	福島県伊達郡保原町
野村 正路	茨城県茨城郡岩間町
〃	千葉県長生郡本納町新治
多々良 鎮男	栃木県那須郡烏山町
外山 映次	埼玉県秩父郡大滝村浜平
後藤 和彦	神奈川県高座郡海老名町
大島 一郎	東京都大島町元町
剣持 隼一郎	新潟県刈羽郡刈羽村大字刈羽
岩井 隆盛	石川県羽咋郡押水町(旧北荘村)字河原

佐藤茂	福井県福井市(中心部)
清水茂夫	山梨県中巨摩郡白根町百々
馬瀬良雄	長野県松本市小宮
谷開石雄	岐阜県吉城郡古川町杉崎
日野資純	静岡県島田市
山田達也	愛知県名古屋市中村区
慶谷寿信	三重県伊勢市市内
奥村三雄	滋賀県東浅井郡虎姫町字中野
遠藤邦基	京都市左京区岩倉花園町
土部弘	大阪府泉大津市我孫子町
和田実	兵庫県神戸市垂水区
西宮一民	奈良県桜井市多武峯
村内英一	和歌山県那賀郡岩出町根来
鏡味明克	鳥取県八頭郡那家町
広戸惇	島根県出雲市今市町元宮町
虫明吉次郎	岡山県岡山市
近藤四郎	広島県安芸郡坂町坂
阿波陽	山口県熊毛郡平生町佐賀
加藤信昭	徳島県鳴門市大麻町字高畑
杉山正世	愛媛県越智郡朝倉村大字朝倉上
土居重俊	高知県高知市一宮
岡野信子	福岡県北九州市若松区(旧島郷地区)
神部宏泰	佐賀県佐賀郡富士町北山
秋山正次	熊本県熊本市田迎町
糸井寛一	大分県大分郡挾間町
岩本実	宮崎県宮崎市大字上小松
上村孝二	鹿児島県鹿児島市武町
寺師忠夫	鹿児島県名瀬市(旧名瀬市内)
仲宗根政善	沖縄・国頭郡今帰仁村字与那嶺
外間守善	沖縄・那覇市



大 城 健 沖縄・島尻郡糸満町字糸満

(以上, 地方研究員)

上 村 幸 雄 鹿児島県大島郡喜界町

〃 沖縄那覇市首里

野 元 菊 雄 愛媛県南宇和郡一本松町

徳 川 宗 賢 青森県北津軽郡金木町

加 藤 正 信 熊本県天草郡天草町小田床

高 田 誠 東京都八丈町中之郷

宮 島 達 夫 茨城県水海道市中妻町

飯 豊 毅 一 福島県岩瀬郡天栄村白子

(以上, 研究所員)

## E 今後の予定

42年度には, 調査Ⅰの本調査を, 41年度と同一の地点でおこなう。また, その調査地点を若干追加する。また, 調査Ⅱについては, 結果の整理をおこない, 概略の報告をおこなう。

43年度には, 調査Ⅰの結果を整理して, 報告書を作成する。

(上 村)

## F 「全国方言文法の対比的研究 調査票解説(1966)」

### 目 次

#### 調査Ⅰについて

- 1 調査のねらい
- 2 調査票の形式
- 3 調査票の性格と調査方法
- 4 調査地点の選定について(調査Ⅱにもほぼ共通)
- 5 調査すべき方言形と被調査者について(調査Ⅱにもほぼ共通)
- 6 調査票の構成について
- 7 各項目の記入欄とその記入方法について
- 8 方言の表記について
- 9 この調査票による調査の限界

## 調査Ⅱについて

- 1 あらまし
- 2 調査のねらいと調査票の構成
- 3 調査地点・被調査者
- 4 調査の対象とする言語
- 5 記録のしかた
- 6 表記について
- 7 参 考

## 調査Ⅰについて

### 1. 調査のねらい

この調査票は文の述語に用いられたばあいの方言の動詞・形容詞・名詞のさまざまな形(およびその意味・用法)をしらべるためのものである。文の述語に用いられたばあいの動詞・形容詞・名詞の形とは、標準語(共通語)のばあい、たとえばつぎのようなものをさす。

本を読んだ。 本を読んでいる。 もっと読め。 読んでもわからない。  
わたしが読んだ本。 ねだんが高かった。 海は静かではありませんでした。  
あれは海だ。 たぶん海だっただろう。

すなわち、調査する形のなかにはつぎのものも含まれる。

- ① 種々の「助動詞」「接続助詞」がついた形(「読ませる」「読めば」など)
- ② 主文の述語として用いる形だけでなく、従属文の述語として用いる形(「読めば」「読むけれども」など)
- ③ 補助動詞(「ある」「いる」「する」など)、補助形容詞(「ない」「いい」など)、形式名詞(「こと」「はず」など)などがついて全体で「2文節」またはそれ以上となるが、「1文節」のものと同様の資格で述語として用いられるもの(「読んでいる」「読みはする」「高くない」「読めばいい」「よむことができる」「よむはずだ」など)
- ④ 終助詞のついた形(「読むか」「読むさ」「読むとも」など)ただし、終助詞(終助詞としてはっきりきりはなすことができるもの)は、きりはなして独立にしらべる。

この調査票は、方言におけるこれらの形をできるだけ多くさがしだし、それを標準語やほかの地方の方言の形と対比できる形式にまとめることをめざしている。

### 2. 調査票の形式

この調査票は、「読む(jomu)」の方言形を動詞の例として、「高い(takai)」および「静かだ(sizukada)」の方言形を形容詞(それぞれイ型とダ型)の例として、「海(umi)」の方言形を名詞の例としてとりあげ、これらの単語を中軸としながら調査を進めるとい形式になっている。(方言でこれらに対応する単語がないときには、他の適当な単語ととりかえてよい。)

この調査票は全部で60項目からなっている。そのうち1から37までは動詞に関する項目である。つぎの38から57までは形容詞と名詞を並行的にしらべるための項目、58から60までは終助詞その他の項目となっている。

### 3. 調査票の性格と調査の方法

この調査票は質問紙(questionnaire)ではないから、この調査票の字句をそのまま使って被調査者に質問することはできない。したがって調査項目を調査者がどのような方法で調査するかは調査者にまかされている。この点でこの調査票は研究所がこれまでに地方研究員に調査を依頼してきたいろいろな質問紙式の調査票とは性格がちがう。調査者はその場その場に適した質問法・調査法を各自くふうして調査をおこなってもらいたい。そして確実にその方言に存在することを調査者が確認した形を調査票に記入してほしい。確認の方法には、

- (1) 信頼できる被調査者に使うか使わないか、使うとすればたとえぼどんなふう  
に使うかをたずね、反省してもらい、
- (2) 調査者が予期する方言形を被調査者に使わせるような場面、context、questionnaire などを用意する、
- (3) 実際に使われている方言を記録する、
- (4) 信頼できる方言の録音資料または文字化資料から拾い出す、
- (5) 調査者自身が以前におこなった信頼できる調査資料・研究資料を利用する、  
などいろいろありうる。調査者は適宜これらのうちの一つ以上の方法を用いて調査をおこなってほしい。ただし、通信調査法や、被調査者に語形や作用の有無を記入させる方法は結果の信頼度がらすいからさけてもらいたい。同様に、他人に調査を依頼したり、調査者自身が確認しないまま、他人の研究資料にある形を記入することもさけてほしい。また、被調査者の確認をえない、調査者の主観的な推測にもとづく語形を記入することもさしひかえてほしい。いっぽう、調査者がその方言の native speaker であるばあいには、調査者自身がみずから被調査者のひ

とりとなることはさしつかえないし、むしろのぞましい。(ただしそのばあい、調査者以外の人についても調査し、確認することがのぞましい。)要するにこの調査票には、その方言で使われていること(もしくはしばらくまえまでは使われていたこと)が確実な方言形だけを記入してもらいたい。(ただし以上は第2年度(来年度)に提出していただく調査票についてである。本年度については整理票の表紙を参照。)

#### 4. 調査地点の選定について(調査Ⅱにもほぼ共通)

調査をおこなうためにおそらくもっとも重要なことは、ある程度長い期間にわたって協力してくれる、協力的で信頼できる、言語感覚のするどい被調査者を見つけることである。そのような被調査者なしには、この調査は困難なものとなる。そこで、よい被調査者がえられるかどうか調査地点を決定するうえでの重要な条件となってくる。調査者が担当地域内のどこかの地点の方言の native speaker であるばあい、そこを調査地点とするのはのぞましいし、また調査者が分担地域内でこれまでにすでに研究を進めてきた地点を調査地点にえらぶことものぞましい。もちろん調査者自身の興味や都合によってその他の地点をえらんでもかまわない。

ただし、以上の条件のほかに、調査地点はなるべくつぎの条件のうちのどれか一つ(どれでも可)をみたしていることがのぞましい。

- ① 方言区画的にみて、担当地域内の有力で代表的な方言の使われる地点(たとえば中心的な都市)、または担当地域内の典型的な方言の使われる地点(すなわち中心的な都市での調査が困難なばあい、その都市の方言に近い方言が使われている近郊農村など)。
- ② 担当地域が方言区画上、はっきりと二つまたはそれ以上にわかれるときには、そのうちのどれかの区画の代表的なまたは典型的な方言の使われる地点。
- ③ 担当地域内に、全国的な観点からみて記述する価値の非常に高いと思われる方言があるばあい、その地点。このばあい、調査地点が僻地や離島になることはさしつかえない。

また、つぎのような地点はさけることがのぞましい。

- ① 標準語化がいちじるしく、在来の方がほとんど聞かれないような地点。
- ② 移住者の多い新開地。
- ③ 隣接の地方研究員の分担地域に近接していて、しかも自分の分担地域の方言の特色よりも、隣接する地方研究員の分担地域の方言の特色をよけいにもっている

とみられるような地点。

#### 5. 調査すべき方言形と被調査者について(調査Ⅱにもほぼ共通)

調査する方言形は、以上のような条件で調査者が選んだ特定の地点の方言のものである。したがって方言形を記入する欄には、ほかの地点の方言形を記入しないでほしい。ただし注記の欄にほかの地点の方言形についての情報を書き入れることはさしつかえないし、のぞましい。しかしこの調査ではかならずしもそれを要求していない。方言形の地理的分布をこまかく知るためには、別の機会にあらたにそのための調査を計画する必要がある。

この調査票は特定の被調査者個人の方言を知るためのものではなく、特定の被調査者の調査を通じて、その地点で一般的に使われている方言の体系を知るためのものである。したがって、被調査者の選定についてのきびしい規準をもうけることはしないし、何人の被調査者についてしらべるかも調査者の自由である。しかし、もちろんその地点で一般的でない外来者の方言や、標準語(共通語)を調べるわけではないから、被調査者の選択はおのずと限られてくる。この調査ではその地点における古くからの方言形をもっとも重視するが、その地点であらたに生じた変化(標準語や他方言の影響によって使われだした新しい方言形、またその方言自身の変化によって生じた新しい方言形など)にもできるだけ注意してほしい。また、まったく標準語とみなされる語形は記入する必要はないが、その地点の古くからの方言形が標準語形と同じであるばあいには記入する必要がある。また、その地域の人が標準語形だと思っけていても、標準語形と相違しているものはもちろん記入する必要がある。

被調査者をえらぶばあいには以上のことを考慮して適切な人を選んでほしい。方言を忘れてしまった人や、学齢以後移住してきた人などはこの意味で被調査者として不適当であり、また被調査者が若い層にだけかたよるのも不適当である。地点によって一様ではないであろうが、古い方言を保存しているような、ある程度の年齢の人を少くとも1、2名は選び、それを主な被調査者としながら、新しい変化を知るために若い人も被調査者にして補足的な調査をおこなうなどがのぞましいだろう。ま夫婦を被調査者として選び、一方をおもな被調査者、他方を副次的な被調査者として男女のちがいをチェックするなどのくふうもよいだろう。

#### 6. 調査票の構成について

この調査票の構成は2に簡単にのべたが、調査するにあたっては調査票の順序に

したがう必要は全然ない。通覧したうえで調査しやすい項目からとりかかっていた  
だきたい。調査票の構成をややくわしく述べると、つぎのとおりとなる。

① 動詞について(1～37)(調査票のVは動詞の略号)

1から22まで は動詞(調査語 jomu) が文末の述語として言い切って使わ  
れるばあいのいろいろな形をしらべる。したがって、標準語のばあいでいえば、  
調査する形は8が「命令形」となるほかは、すべていわゆる何らかの「終止形」であ  
る(たとえば jomu, jonda, jonde iru, jomeba ii など)。ただしかりむ  
すびなどを用いる方言でいわゆる「終止形」以外の活用形が文末に使われるばあ  
いには、それも調査の対象に入ってくる。

1から22までのうち、1から4までは jomu の断定と推量、現在(未来)と過  
去、肯定と否定、常体とていねい体の「終止形」をしらべる項目である。つぎの5  
と6は1のV1(標準語形 jomu)の関連項目、7は3のV9(標準語形  
jomudaro:)の関連項目である。この5, 6, 7では断定と推量に類する種々の  
雑多な方言形を集めるわけだが、この項目は調査がやさしくはないからあとまわ  
しにするのがよいだろう。

8と9では命令と意志(および、さそいかけ)をあらわす形をしらべる。10, 11,  
12は8, 9の関連項目である。

13, 14, 15, 16は動作のいろいろなようす、ありかたをあらわす形をしらべ  
る。そのうち14はせまい意味でのアスペクト(相)をあらわすいろいろな形(標準  
語 jonde iru, jonde aru など)をしらべる。

17, 18, 19, 20ではそれぞれ、使役、受身、尊敬とへりくだり、可能をあらわ  
す形をしらべる。

21と22ではその他の複合動詞(標準語形 jomihazimeru など)と複合形容詞  
(標準語形 jomijasui など)をしらべる。

23から31まで は同じく jomu を調査語として、主として種々の従属文の  
述語として、文の途中に用いられたばあいの動詞の形をしらべるための項目であ  
る。したがってここでは、中止的に用いられた連用形(jomi)や、いわゆる接続  
助詞のついたいろいろな方言形(標準語形 jonde, jomeba, jomukara など)  
が調査のおもな対象である。

32と33 では、連体修飾語として用いられるときの動詞（調査語 jomu)の形(すなわちいわゆる連体形)と、動詞が体言的に用いられるときの形(標準語形 jomuno など)をしらべる。

34と35 では、いわゆる「係助詞」によって強調をうけた「とりたての形」(標準語形 jomiwa suru など)をしらべる。

36 は jomu 以外の種々の動詞についてその活用の型をしらべるための項目であり、統一された調査語によって全国方言の動詞活用表をつくることをめざしている。

37 では特殊な敬語動詞(標準語のばあい iraqsjaru, oqsjaru など)をしらべる。

- ② 形容詞・名詞について (38~57)(調査票のAはI型形容詞, A'はD型形容詞, Nは名詞の略号)

38 から 57 まで は形容詞(語例は takai と sizukada の2語)と名詞(語例 umi)について動詞についての項目と同じことを同じ形式でしらべるための項目である。形容詞(I型とD型)と名詞の方言形は同じ項目のなかで記入するようになっている。たとえば 38 には takai, sizukada, umida などに相当する方言形を記入する欄が並んでいる。このように形容詞と名詞とを同じ項目にまとめたのは、形・用法の種類に類似点があって、並べてみた方が便利だと考えられるからである。(もちろん、調査のときに同時に調査をする必要はない。)

形容詞と名詞が述語につかわれるときの形の種類は動詞に比べて少ないから、項目の数も20項目で動詞(37項目)より少ない。また、動詞の項目に比べて、内容もやや簡単になっている。38から45までは文のおわりに述語として言い切って用いるいろいろな形をしらべるための項目である。46から50までは、主として従属文の述語として、文の途中に用いられるいろいろな形をしらべるための項目である。51と52ではそれぞれ「連体形」と体言相当の形をしらべる。53では係助詞によって強調をうけた「とりたての形」(標準語形 takakuwa aru など)をしらべる。また54では takasa に相当する形、55では sizuka に相当する形、56では umi に相当する形(名詞そのままの形)をしらべる。57では形容詞と名詞(+「だ」)の活用の種類をしらべて、活用表をつくる。

- ③ そ の 他 (58~60)

58 と 59 ではいわゆる「終助詞」をしらべる。ここでとりあげる終助詞はこれまでにあつかった文の終わりの述語のいろいろな形につくことのできる終助詞である。(したがってたとえば「太郎や」の ja のように単に体言について呼びかけを表わすものなどはとりあげなくてよい。)

58 では調査地点の方言における おもな 終助詞について、その形・意味をあげて、それぞれの助詞についての例文を(かならず)記入する。59 ではこれらの終助詞がどの形に付いて用いられるかをしらべる。

方言のばあい、ある形を終助詞とみなしてきりはなすべきか、それとも語形の一部とみなすべきかまよはばあいが少なくないと思われる。そのようなばあいには、問題の形(終助詞らしい形)の分離性・相対的独立性の強さ、活用の有無、他のいろいろな形との関係、独立性についての話し手の意識、学校文法での扱い方などを考慮して各調査者の判断によって「終助詞」とみるかどうかを決定してほしい。そのばあい、その区別がやや便宜的なものになりうることはいたしかたないだろう。分離性・相対的独立性が強いとは、たとえば問題の形がいろいろな種類の形につくことができ(たとえば違った品詞の同種の形につくとか、現在形にも過去形にも、あるいは断定にも推量にも、あるいは肯定にも否定にも、あるいは常体にもていねい体にもつくなど)、かつ、それを除いたのこりの形をそれだけで文末に述語として用いることができるなどといったことである。

1 から 57 まで の調査項目では、原則として、終助詞を除いた、しかもそれだけで言い切った文末の述語として用いることのできる方言形を記入することを求めている。したがって調査者がある形を終助詞とみるかみないかによって、1 から 57 までの記入のしかたが変わりうる。

60 は 1 から 59 までについての補足の項目である。

#### 7. 各項目の記入欄とその記入方法について

各項目ごとの記入欄の体裁は項目によって多少のちがいがあがるが、動詞の項目に例をとると、つぎのようになっている。

	標準語形	方言形	形・意味・用法 についての注記	例	文
V 1	jomu よむ				



- ① 一番左の欄の V 1 のような略号は 記入すべき方言形の略号であって、ローマ字は品詞の略号(V は動詞, A はイ型形容詞, A' はダ型形容詞, N は名詞をあらわす), 数字は語形の略号である。品詞がちがっても語形の文法的性質が同じならば同じ番号があたえてある。

たとえば, V 1, A 1, A' 1, N 1 はそれぞれ, 標準語形 jomu, takai, sizukada, umida に相当する方言形の略号である。また, たとえば V 5, A 5, A' 5, N 5 はそれぞれ 標準語形 jonDa, takakaqta, sizukadaqta, umidaqta に相当する方言形の略号, V 49, A 49, A' 49, N 49 はそれぞれ標準語形 jonDari, takakaqtari, sizukadaqtari, umidaqtari に相当する方言形の略号である。

② 標準語形の欄

ここには標準語形が所定の表記とふつうの漢字かなまじりの表記の両方で示されている。一つの欄のなかに二つ以上の標準語形が記入されていることがあるが, それは標準語に, 意味・用法がいろいろの程度に異なる二通り以上の語形があるばあいである。(もちろん, だからといって方言形にも二通り以上の語形があるとは限らない。)

③ 方言形を記入する欄

ここには調査した方言形を記入する。調査地点で, 相当する方言形が二通り以上あるときは, なるべく, それらを全部記入する。また[稀][古][俗][女][幼]などの略号を必要に応じて方言形の直後に jomume : [俗]などのようにする。相当する方言形がないときには「なし」と記入し, 空欄にはしない。また相当する方言形があるかどうか調査しても不明だったばあいには「?」と記入する。方言形が標準語形と同じばあいにもかならずその方言形を記入する。(「同上」「同じ」などと書かない。)

④ 形・意味・用法についての注記をする欄

つぎのようなばあいにはなるべく記入した方言形についての注記をおこなう。

イ. 方言形の形のくみたてを説明したほうがわかりやすいばあい。たとえば,

(方言形)

(注記)

joNmja 標準語 jomumai に対応

tegægu takai にあたる形に ku<sup>1</sup>がついたもの。すなわち takaiku に対応

ロ. 方言形が標準語形とくにちがった意味・用法をあわせもつばあい。またその逆のはあい。たとえば、

(方言形)	(注 記)
joman	「よむな」の意味でももちいる。
jonde	「よみなさい」「よんでくれ」の意味ではつかわない。

ハ. 一つの標準語形に対して二つ以上の方言形があり、意味・用法をわけもっているようなばあい。たとえば、

(標準語形)	(方言形)	(注 記)
jonde iru よんでいる	jomijoru	進行をあらわす。「よみつつある」の意。
	jo:doru	完了したあとの状態をあらわす。「すでによんでいる」の意。

ニ. その他標準語との間に形・意味・用法のうえでいちじるしいずれのあるばあい。

#### ⑤ 例文の欄

方言形が標準語とちがった独特な形・意味・用法をもつばあいには、なるべく短かい例文をあげる。そのばあい、例文は全体を所定の方言表記法でしるし、かならずあとへ標準語訳をつける。たとえば、

(方言形)	(例 文)
jomijoru	ara honba jomijoru かれは本をよんでいる。(たとえば「彼は本を jomijoru」などと書かない)

#### 8. 方言の表記について

方言の表記は別紙に定めたとおり全国共通の方式によりおこなってほしい。表記を共通にするのは、比較と分析を容易にするためと、成果を刊行したばあいに多くの研究者に利用しやすくするためである。

#### 9. この調査票による調査の限界

この調査票は、構文論をふくめて、全国的な方言文法の研究を多くの研究者がおしすすめていくために必要な第一段階の資料を、共通の方法によって得るためのものである。したがって、この調査票だけによってある調査地点の方言における、述語に使われる動詞・形容詞・名詞のさまざまな方言形の体系全体を全面的にあきらかにすることはできない。この調査票の第一のねらいは、さまざまな方言形を標準語形

と対比させるかたちでできるだけ多く集めるということである。この調査票では一つ一つの方言形のもつ意味・用法を完全に記述したり、ひとつの方言形がほかの方言形に対してもつ関係を完全に記述したりすることはむずかしい。標準語に例をとれば、たとえば jomu(V 1), joNde(V 48)などの意味や用法はひじょうに複雑多岐であり、また jomukara と jomunode のちがいが、jomu と jomunoda のちがいが、jomeba と joNdara, jomunara, jomuto などとのちがいなどは、いずれもそれ自身長期の期間を要する独立の研究テーマとなりうる。方言のばあいにも事情は同様であろう。この調査票のめざすところは、全国的にそのような研究を可能にするための基盤をつくることにある。したがってこの調査票の注記や例文の記入は、各調査者がすでに明らかにしていることや、この調査を進める途中であきらまらなくなったことの範囲で記入すればよい。また、一つの語形が多義であったり、ある方言の文法構造と標準語の文法構造とのあいだにずれがあったりするのことは当然のことであるから、ある方言形をどの項目のどの欄に記入するかさだめにくいばあひも生じうる。そのばあいはとくに断っていないかぎり、各調査者が便宜的にさだめて記入をしてほしい。

## 調査Ⅱについて

### 1. あらまし

調査Ⅱは、地域社会の特定場面で使われることばの調査である。ここで「特定場面」というのは、現実の場面——現実の郵便局の窓口とか、現実のデパートのエレベーターの中とか——ではなく、つぎのように設定され、想定された場面であり、そこでかわされる問答の概要は、「ある人の在・不在をたずねること、それに對する肯定・否定の答えをすること」である。具体的に言えば、つぎのとおり。

高校生A子が、同級生B子の家をたずねる。そして、玄関に出てきたB子の母親に対して、B子がいるかないかをたずねる。B子の母親が返事をする。問いも答えも、存在の意味をあらわす動詞「いる・おる・いらっしゃる」の類の方言を使うこととする。また、答える母親の返事には、はじめに「はい・いいえ」の類の応答詞の方言を使うこととする。

要するに、調査するのは、このばあいのA子の問いのことばと、B子の母親の答え

のことばとの、二つであり、標準語では、たとえば、

A 子「(B子さん,)いらっしゃいますか?」

B子の母親「ええ、おりますよ。」(「いいえ、おりませんわ。」)

のような回答がなされるだろう。これを、調査票のように、4つのばあいについて調査する。調査段階は2つにわかれ、まず、研究員各位において、予想される形を列挙記述し、つぎに、被調査者について質問調査して、発話された形を記述するとともに、前段階で予想された形についての確認をおこなうこととする。

## 2. 調査のねらいと調査票の構成

調査Ⅱの調査票は4項目(1~4)からなり、それぞれの項目は、つぎのことを知ることを直接のねらいとする。

項目1 (A子の問い)……………肯定の形でたずねるばあいの言いかた(標準語なら「いらっしゃいますか?」「おいでになりますか?」など)

(B子の母親の答え)……肯定の形の問いに対する応答詞(「はい」「いいえ」など)の使いわけ

項目2 (A子の問い)……………否定の形でたずねるばあいの言いかた(標準語なら「いらっしゃいませんか?」「おいでになりませんか?」など)

(B子の母親の答え)……否定の形の問いに対する応答詞の使いわけ

項目3 (A子の問い)……………念を押すつもりで、否定の形でたずねるばあいの言いかた(標準語なら「いらっしゃいませんね?」「おいでになりませんか?」など)

(B子の母親の答え)……念押しの否定の形の問いに対する応答詞の使いわけ

項目4 (A子の問い)……………二重否定の形でたずねるばあいの言いかた(標準語なら「いらっしゃらないのではありませんか?」「おいでにならないんじゃないですか?」など)

(B子の母親の答え)……二重否定の形の問いに対する応答詞の使いわけ

また4項目を通じてつぎの点にも注目する。

(1) 現在いるかいないかをたずねるばあい、およびそれに答えるばあい、「いらっ

しゃいましたか?」「いらっしゃいませんでしたか?」および「いましたよ。」「い  
ませんでしたよ。」のような過去形(完了形・確認形)を使うかどうか。

(2) 待遇表現(敬語)の使いわけが、どの程度あるか(あるいは、ないか)。

(3) 終助詞の使いわけはどうなっているか。

調査の中心は、「1. あらまし」にも述べてあるが、「存在の動詞をふくむ形での問い  
(主格の「B子さん」は省略する)」——「応答詞『はい』『いいえ』の類+存在の動詞をふ  
くむ形での答え」という結びつきでの、ごく普通のいいかたを調べることである。  
(したがって、たとえば「おるすですか」「おでかけですか」、「るすです」「でかけまし  
た」などの言いかたは記録しない。)

### 3. 調査地点・被調査者

調査地点は「調査Ⅰ」に同じであることを原則とするが、事情によっては、別でも  
かまわない。しかし、別のばあいにも「調査Ⅰ」と同様な条件の所を選ぶこととす  
る。

被調査者は、その土地に生まれ育った女子高校生(1名か2名)で、その土地育ち  
の母親を持つ者。女子高校生には、したい友だちの家を訪ねた場面を想定しても  
らって答えを求める。母親には、娘のしたい友だちが訪ねてきた場面を想定して  
もらって答えを求める。

被調査者には、特殊な階層(名門・大金持・旧大地主など)に属する者は避けて、  
なるべく普通の農家・商家・俸給生活者などの家庭を選ぶこととする。

### 4. 調査の対象とする言語

その地域社会で、被調査者の年代の人たちが、この設定された場面では、普通に  
使うとみられることばであるから、いわゆる純粋の方言に限らない。もちろん、い  
わゆる標準語(共通語)だけを対象とするものではない。両方とも使うとか、混合し  
た形を使うとかいうばあいも、それが普通ならば、みな記述する。被調査者が、こ  
の点で不適当だったとき(不当に標準語しか使わないとか、当然期待される方言形  
が答えとして得られないときなど)には、被調査者を選びなおして調査していただ  
きたい。

### 5. 記録のしかた

記録は記入票におこなう。記入票は各項目ごとに「予想形」の欄、「発話形」の欄、  
および「注記」の欄からなっている。調査と記録はつぎの順におこなってほしい。

- ① 予備的な調査または、すでに得た資料によって調査地点で使われている言いかたをあらかじめ「予想形」の欄に記入しておく。このばあい、問題の場面でははいていぬいすぎると思われるもの、乱暴すぎると思われるものなども記入しておく。
- ② 現地では、それを被調査者に見せないで、答えを求め、それを「発話形」の欄に記入する。
- ③ つぎに、「予想形」の欄と「発話形」の欄を照合し、予想されたのに答えに出なかった形について、被調査者にこの場面でするか使わないかを確かめる。
- ④ ③の結果を次の記号をもちいて「予想形」の欄および「発話形」の欄にするす。

「予想形」の欄に	{	◎……発話形と一致する形 ○……自発的には、発話されなかったが、被調査者に確かめたら「こういう場面で自分も使う」と答えた形 △……同じく被調査者に確かめたら、「こういう場面で自分は使わないが、人は使う」と答えた形 ×……同じく被調査者に確かめたら、「こういう場面では自分も人も使わない」と答えた形
「発話形」の欄に	{	√ ……「予想形」になくて、「発話形」にのみある形 アンダーライン……標準語とみられる形(またはその部分)

- ⑤ 「予想形」および「発話形」のそれぞれの言いかたについて、「注記」の欄に必要と思われる注記をおこなう。

なお、記入票への記録のしかたは、調査票の末尾につけた記入例を参照していただきたい。

## 6. 表記について

表記の方法は調査Ⅰのばあいと同じとする(別紙「表記について」を参照)。イントネーションの表記を要するときは「注記」の欄にするす。

## 7. 参考: 「はい」「いいえ」について

「『行きませんでしたか?』という問に対して、『』, 行きませんでした。』という意味の答えをするばあい、『』の『はい』『いいえ』に該当する方言形は?』という趣旨の調査が、以前、国語研究所・地調 51(昭和 26 年)で行なわれた。各県 7 地点の調査で、7 つの県の報告を欠いているし、結果はまだ公表されていない。概略の地図によれば、「イヤ・イヤン・イエ」などの否定系の答えが、九州各県と、中国・四国・近畿の一部などに多いほか、中部・関東・東北・北海道に点在

し、他は肯定系ないしは肯否不明の応答詞である。問いの「行きませんでしたか？」の「ません」という否定部分が、どの程度、論理的にはたらくかということも、答えのしかたに影響があって、問題になるところであろう。(実情の細部については、「注記」の記入を期待するところである。)

# 中学生の言語習得に関する研究

## I 中学生の漢字習得に関する研究 (継続)

### A 目的・意義・担当者

中学生が義務教育課程終了までに、どれくらいの漢字をどのようにして習得するか、中学校3年間にわたり、事例的に、特定個人についての漢字の習得状況を、量的・質的に追跡調査し、中学生の文字習得の可能な量とその習得状況・過程・要因を推定しようとするものである。

昭和39年度から着手、41年度は、芦沢節・根本今朝男が担当、川又瑠璃子がこれを助けたが、そのうち根本今朝男は、事例生徒の要因調査および中学校の漢字学習指導の実態に関する調査を主として担当(別掲)、川又瑠璃子は、調査の実施・集計整理など、作業の全般に参加した。なお、問題作成の過程で、研究第2部及び他の研究部の有志の共同討議にかけた。また、一定期間、数名の臨時補助者が、一部の集計作業を助けた。

### B これまでの経過

中学生の漢字習得を研究する方法として、当用漢字全数音訓読み書き調査を行なった。これは、中学生の漢字力をできるだけくわしくみるために、事例研究の方法をとり、当用漢字を中心に(表外字にも及ぶ)全数調査を実施し、それを中学3年間継続して追究するもので、全数調査をたてまえとするために、調査方法として消却方式をとり、まず昭和39年度入学の時に全数調査を実施し、その後の調査で正しく読み書きができ、習得が安定したと認められた文字は調査対象からはずして、徐々に新しく表外字をさし加えていく方法である。

#### 調査方法

(読み) 当用漢字(1,850字)を当用漢字音訓表で認められている音訓全部に



わたって調べる。カードによる1対1方式(個人調査)で読みの力を追究する。

交 通
通
通る 通り

左図のように、見出し漢字のほか、その文字の音と訓(当用漢字音訓表による)が出るような語形をあらかじめカードに記入しておいて、それを読ませ、反応集計表に反応を詳しく記入する。

(書き) 問題用紙に記入させる。(集団調査) 文字の意味が出やすい文脈や語句を与えて、目的の文字を記入させる。

例 □<sup>とく</sup>をあける。西□<sup>ざいれき</sup>1965年。

読みでは、音訓両方にわたったが、書きでは、原則として、生徒に親近性のある読み方をとった。(問題のあるものは、音・訓両面にわたって書かせた。)

用紙 教育漢字 16枚 教育外当用漢字 22枚(ただし、調査を重ねるうちに、個人によりテスト量の増減がある)

#### 表外字の読みの調査

生徒が他教科その他の読書、テレビ、広告、看板などの文字環境から自然に習得する表外字はどの程度のひろがりをもっているかを推定しようとするもので、当研究所で、雑誌九十種の用語用字調査で行なった漢字表における表外字を中心に、他の諸資料から得た表外字の読みの力を見る。文字を示し、その読みをたずね、なお、何で、どこで、どういうことばでなど、その文字の習得の経路などをできるだけ記入させる。

#### 調査対象

調査の実施協力学校 北区稲付中学校(校長 長谷重幸氏 国語主任 吉村安夫氏 北区教育委員会指導主事 相原正志氏推薦による)

被調査者 昭和39年度新入生8人(男子4・女子4。知能・国語学力等学級で中位のもの)

以上のような規模で、全教調査を、年に2回実施し、(第1回 昭和39年4月~7月 第2回 昭和39年12月~40年3月 以後前期・後期と、年間2回ずつ実施)、その結果、漢字の読みの力(とくに教育漢字)は一応あるが、音訓を

つくして読めるという立場からは問題があること、漢字を書く力は教育漢字の高学年用の漢字がやはり書けないこと、表外字の読みは、生徒に関係のある文字はかなり接近度が高く、読める字が多いことなどが認められた。

## C 本年度の作業

本年度は、この研究の第3年めにあたる。次のような研究計画を立てて実施した。

### 計画と実施

#### 〔計画〕

- I 昨年にひきつづき当用漢字全数音訓読み書き調査を行なう

年間 2回

- II 漢字習得上の問題解明のためのテストを実施する

特定の対象生徒の全数調査の補いとして、全数調査での問題点や習得の確度を吟味したり、漢字習得上の問題を解明したりするために、当該学年の中学生(集団)に検証テストをおこない、全数調査の結果の解釈資料、次の調査への修正資料を得る。

- Iのb 対象生徒の漢字の習得要因資料の収集・整備をはかる。

漢字の習得要因資料として、学校側からの提供資料、研究室の調査による資料などを整備する。

- III 中学校の漢字学習指導の実態に関する質問紙調査を全国的規模で実施する。

#### 〔実施〕

- I 当用漢字(1850字)の全数音訓読み書き調査(付 表外字の読み)の実施  
第1回(通算第5回) 当用漢字全数音訓読み書き調査(表外字の読み 1000字)

41年7月8日～7月23日 延べ 9回

(1回のテスト所要時間は、放課後の時間  
を利用し、約2時間、1・2年の時より消却

文字がふえてきたので、調査の延べ回数は短縮されたが、表外字はふえている)

第2回(通算第6回) 当用漢字全数音訓読み書き調査(表外字の読み 1000字)

42年3月2日～3月14日 延べ 7回

## II 漢字習得上の問題解明のためのテスト

同一の対象生徒に、同じ文字を、音訓全般にわたって継続的に調査するので、習得上の問題点がいろいろ出る。すでに、第4回までの調査結果から、読みにおける音訓の難易とその習得の不均衡の問題、小学校の段階で、学習するたてまえの教育漢字における読めない音訓の問題、書きにおける、教育漢字の小学校の中・高学年用の文字の習得不振の問題などが、習得上の問題点としてみられ、それらの問題点を追究するために、2年の後期で、漢字習得上の問題解明のためのテストを実施して、事例調査の結果の信頼性や、問題解明の手がかりが得られたので、3年生の卒業時にも、同じ目的のこの調査を実施した。なお、今回のテストは、従来、東京中心に行なわれたので、訓読み等における地域性との関係をもあわせみようとして、関西・中京方面を中心に実施してみた。

### 調査の実施校

	校 長	実施時期
大阪府箕面第一中学校	田中 静夫氏	42年2月27日
〃 箕面第二中学校	下野 寅雄氏	42年2月28日
〃 止呂美中学校	川上 龍雄氏	42年3月(学校側の自主的参加による)
名古屋市前津中学校	中村 義高氏	42年3月6日(午前)
〃 南陽中学校	篠辺 広氏	42年3月6日(午後)
東京都稲付中学校	長谷 重幸氏	42年3月2日・3日
〃 文海中学校	中沢 政雄氏	42年3月9日

大阪・名古屋での調査にあたって、大阪府教育委員会指導第二課長 中畔肇氏、指導主事 田中昭次氏、愛知県教育委員会学校教育課長

永屋省三氏，指導主事 市川光雄氏に，実施校の選定・交渉などについて御高配をいただき，またテスト実施に際しては，大阪府教育委員会指導主事 松山三郎左衛門氏，名古屋市教育委員会指導主事 田中喜一郎氏のご協力をいただいた。

事例調査の対象生徒のいる稲付中学校および，同じ地域でも，教育的環境がととのっているところ，地理的条件等で環境が不備なところなど，生徒の漢字力になるべく幅広くわかるように学校を選び，各学校の3年生の2学級分の生徒を調査した。

### 調査の問題

問 題	字 数	ね ら い と 構 成	実施上の注
1 教育漢字の読み	50字	8人の調査結果および2年の集団調査結果を参考にし，音訓の読みかたをみる。また，音・訓・着の読みかたをみる。また，音・訓・着の読みかたをみる。また，音・訓・着の読みかたをみる。	制限内容の時さう で答えい全 るより，答 せよる，答 よる。答 えをよる。 配慮す 以下同
2 教育外当用漢字の読み	50字	ねらいは，1の教育漢字の場合と同じ。	
3 表外字の読み	50字	8人の調査結果を参考にし，よく読めた字(接近度の高い字)を中心に，50字の読みの力をみる。なお，他教科と関連のある文字もいくつか入れてみる。なお，この問題には，その文字をいつ，何で見知ようになったか，接近の意識の内省も記入させて，接近の経路・領域もあわせてみる。	
4 教育漢字の書き	60字	8人の調査結果および2年の集団調査結果等を参考にし，成績のわるいもの，問題のあるものから文字をえらび，書く力をみる。なお，読みとの対応をみるために，文字上の配慮がしてある。	
5 教育外当用漢字の書き	40字	ねらいは，4の教育漢字の場合と同じ。読みとの対応をみるために，文字上の配慮がしてある。	

問 題	字 数	ね ら い と 構 成	実 施 上 の 注 意
6 特殊な音読み	教育 20字 教外当 10字	特殊な音読みの漢字(漢語)の読み の力をみる。 従来のテストで、また、日常生活 的でないために読むに抵抗がある ものを30字選んで読む。他の読み かた、かきとりの力と比較でき よう、一部文字上の配慮がして ある。	実施上の 注意 ・テスト ・順序 ・1問 ・2問 ・3問 ・4問 ・5問 ・6問 ・7問 ・8問 ・9問 ・10問
7 漢字の訓読み と意味把握 (理解)	教育 10字 教外当 10字	問題のある訓読みが、ことばとし ての理解とどのような関係がある か、漢字の読み(訓)とその語の意 味、理解の関係をみる。 問題1・2及び4・5と1部対応 させてある。	〃
8 漢字学習の実 態と意識・意 見	15問	日ごろどのように漢字学習をして いるか、漢字学習に対してどのよ うな意識をもっているかなど、習 得要因を解明する上で、関係のあ ることをたずねる。	

問題用紙 10 枚 所要時間 約 150 分

#### 【の b 対象生徒の漢字の習得要因資料の収集・整備

対象生徒の漢字習得に関係があると思われる諸要因を明らかにしてお  
くことは漢字の習得過程を知る上に重要であるので、つとめて要因資料  
を整備した。

##### 1 学校側から提供を受けたもの

- (1) 各教科の学年学期別成績
- (2) 行動テストの結果
- (3) 学校で行なった知能検査結果
- (4) 家庭、家族関係資料
- (5) クラブ活動、生徒会関係資料
- (6) 作文資料(3年)自由題
- (7) 担当教員からの情報

##### 2 研究室が特別に行なったもの

- (1) 読 書 調 査 42年1月20日

(雑誌, 一般の単行本, 学習参考書, 新聞, テレビ・映画等を含む)

- (2) 研究所の調査に対する, 3年間の感想, 意見等(6項目)を中心とした対話録音資料 42年3月実施(1人約15分)

### Ⅲ 中学校の漢字学習指導の実態に関する調査(別掲)

結果のあらまし

#### I 当用漢字全数音訓読み書き調査

結果については, 第6回の調査を3月卒業時直前に行なったために, 整理中であるので, 整理のできた部分を中心に, その概要だけをあげておく。

第6回の義務教育最終時の当用漢字全数音訓読み書き調査(付, 表外字1,000字の読み)の結果を数量的にみると, 次のようで, 第1表は, 教育漢字・教育外当用漢字・表外字が, 第1回(入学時)・第3回(2年1学期)の調査結果と比べて, どの程度読み書きできるようになっているかをみたもの, 第2表は, それを個人別にみた場合は, それぞれどれだけの文字が読み書きできるようになったかをみたものである。

第1・2表で読めた(正答)というのは, 従来の漢字調査の結果と比較するために1字のもつ音訓をすべてつくして読めたという数でなく, 音訓すべてにわたって読めたものはもちろん, 音訓どちらか読めたものも入れた数字であり, 当用漢字を読み書きする力は, このように従来の調査・整理方法でみると, 中学の入学時から2年時を経て, 次第にのび, 卒業時までには相当数の習得が認められる。また, 音訓表に認められる音・訓にわたって, その文字がどのように読めるか, 書く力との関係からみるとどうか, さらに, 完全に習得したと認めうる文字という立場(2回続けて正答できたものは習得が定着したとみなす)からではどうかなど, 教育漢字の習得状況を厳密に調べてみたのが第3表で, 第1年度および第2年度の調査結果では, この観点からすると, 習得の文字量がかなり減少することが指摘されたが, (年報16—昭和39年度, 年報17—昭和40年度参照) 今回の調査では, 卒業時の段階であるだけに, 第1・2表との差は, かな(→47ペ)

(第1表) 当用漢字全数読み書き調査結果(付表外字読み) 1・3・6回

字種 読み・書き	教育漢字 (881字)			教育外当用漢字 (969字)			表外字									
	読み	書き	書き	読み	書き	書き	読み	書き	書き							
	第1回 (入学時)	第2回 (2年前)	第3回 (3年前)	第6回 (終了時)	第1回 (入学時)	第3回 (3年前)	第6回 (終了時)	第1回 (100字)	第3回 (322字)	第6回 (1000字)						
正答 100% の漢字	813字 (92.3%)	877 (99.5)	881 (100)	881 (100)	347 (39.4)	531 (60.3)	770 (87.4)	187 (19.3)	531 (54.8)	860 (88.8)	18 (1.9)	48 (5.0)	205 (21.2)	* 16 (16.2)	31 (9.6)	** 60 (6.0)
87.5%	56 (6.4)	4 (0.5)			155 (17.6)	135 (15.3)	75 (8.5)	117 (12.1)	140 (14.4)	53 (5.5)	20 (2.1)	65 (6.7)	144 (14.9)	10 (10.1)	39 (12.1)	53 (5.3)
75.0%	9 (1.0)	0 (0)			118 (13.4)	119 (13.5)	23 (2.6)	103 (10.6)	82 (8.5)	22 (2.3)	30 (3.1)	68 (7.0)	157 (16.2)	8 (8.1)	26 (8.1)	81 (8.1)
62.5%	3 (0.3)				75 (8.5)	44 (5.0)	9 (1.0)	87 (9.0)	57 (5.9)	15 (1.5)	36 (3.7)	67 (6.9)	132 (13.6)	11 (11.1)	26 (8.1)	72 (7.2)
50.0%					83 (9.4)	30 (3.4)	4 (0.5)	96 (9.9)	43 (4.4)	8 (0.8)	50 (5.2)	87 (9.0)	108 (11.1)	8 (8.1)	37 (11.5)	74 (7.4)
37.5%					53 (6.0)	16 (1.8)		84 (8.7)	27 (2.8)	5 (0.5)	73 (7.5)	119 (12.3)	82 (8.5)	6 (6.1)	21 (6.5)	85 (8.5)
25.0%					30 (3.4)	4 (0.5)		75 (7.7)	25 (2.6)	4 (0.4)	79 (8.2)	125 (12.9)	64 (6.6)	7 (7.1)	28 (8.7)	106 (10.6)
12.5%					15 (1.7)	1 (0.1)		88 (9.1)	37 (3.8)	2 (0.2)	150 (15.5)	151 (15.6)	56 (5.8)	9 (9.1)	44 (13.7)	154 (15.4)
0%						0 (0)		132 (13.6)	27 (2.8)	0 (0)	513 (52.9)	239 (24.7)	21 (2.2)	24 (24.2)	70 (21.7)	315 (31.5)

\* 表外字の第1回調査文字数は100字であるが、印刷上のミスから、実際は99字について整理してある。  
 \*\* 整理作業中のため、3年前期(第5回)の成績をもって示した。

(第2表) 個人別成績一覽 (1・3・6回)

字種 読み・書き 調査時	教育漢字(881字)						教育外当用漢字(969字)						表外字		
	読		書		き		読		書		き		読 説 み		
	第1回	第3回	第6回	第1回	第3回	第6回	第1回	第3回	第6回	第1回	第3回	第6回	第1回 (100字)	第3回 (322字)	第6回 (1000字)
氏名	第1回	第3回	第6回	第1回	第3回	第6回	第1回	第3回	第6回	第1回	第3回	第6回	第1回	第3回	第6回
男	881	881	(100)	843	875	(99.3)	881	910	934	863	615	893	60	195	572
K・M	881	881	(100)	843	875	(99.3)	881	910	934	863	615	893	60	195	572
正答率	(99.9)	(100)	(100)	(95.7)	(99.3)	(100)	(78.2)	(93.9)	(99.5)	(37.5)	(63.5)	(92.1)	(60.6)	(60.6)	(57.2)
N・T	875	881	(100)	689	738	(83.8)	851	812	933	121	225	443	49	120	334
	(99.3)	(100)	(100)	(78.2)	(83.8)	(96.6)	(62.5)	(83.8)	(96.3)	(12.5)	(23.2)	(45.7)	(49.5)	(37.3)	(33.4)
M・M	877	881	(100)	802	849	(96.4)	878	840	944	183	416	747	41	122	271
	(99.5)	(100)	(100)	(91.0)	(96.4)	(99.7)	(56.1)	(86.7)	(97.4)	(18.9)	(42.9)	(77.1)	(41.4)	(37.9)	(27.1)
M・N	881	881	(100)	646	739	(83.9)	840	851	953	138	237	463	63	151	344
	(100)	(100)	(100)	(73.3)	(83.9)	(95.3)	(73.3)	(87.8)	(98.3)	(14.2)	(24.5)	(47.8)	(63.6)	(49.7)	(34.4)
女	879	881	(100)	756	831	(94.3)	874	785	961	201	411	822	49	140	313
K・E	(99.8)	(100)	(100)	(85.8)	(94.3)	(99.2)	(51.3)	(81.0)	(99.2)	(20.7)	(42.4)	(84.8)	(49.5)	(43.5)	(31.3)
K・I	842	880	(100)	600	770	(87.4)	862	690	934	82	254	629	38	132	247
	(95.6)	(99.9)	(100)	(68.1)	(87.4)	(97.8)	(31.7)	(71.2)	(96.4)	(8.5)	(26.2)	(64.9)	(38.4)	(41.0)	(24.7)
K・R	853	878	(100)	524	707	(80.2)	837	597	880	79	194	477	28	95	192
	(96.8)	(99.7)	(100)	(59.5)	(80.2)	(95.0)	(36.2)	(61.6)	(90.8)	(8.2)	(20.0)	(49.2)	(28.3)	(29.5)	(19.2)
F・K	879	881	(100)	702	805	(91.4)	862	860	946	190	341	646	46	159	344
	(99.8)	(100)	(100)	(79.7)	(91.4)	(97.8)	(54.8)	(88.8)	(97.6)	(19.6)	(35.2)	(66.7)	(46.5)	(49.4)	(34.4)
8人平均	870.8	880.5	(99.9)	695.2	789.3	(89.6)	860.6	793.1	939.4	169.6	333.6	640.0	46.8	139.3	327.1
	(98.8)	(99.9)	(100)	(78.9)	(89.6)	(97.7)	(55.5)	(81.9)	(96.9)	(17.5)	(34.7)	(66.0)	(47.3)	(43.3)	(32.7)



(第3表) 教育漢字全数(881字)音訓読み書き調査結果

	教育漢字 (881字)																	
	読み完了					書き完了					読み書きともに完了							
	2回目 (1年後期)		3回目 (2年前期)		6回目 (3年終了時)	2回目		3回目		6回目	2回目		3回目		6回目			
	人数	割合	人数	割合	人数	人数	割合	人数	割合	人数	人数	割合	人数	割合	人数	割合		
男	766 (86.9)	799 (90.7)	861 (97.7)	823 (93.4)	851 (96.6)	880 (99.9)	711 (81.4)	774 (87.9)	860 (97.6)	617 (70.0)	739 (83.9)	853 (96.8)	589 (66.9)	651 (73.9)	829 (94.1)	438 (49.7)	559 (63.5)	805 (91.4)
	654 (74.2)	769 (87.3)	836 (94.9)	757 (85.9)	810 (91.9)	877 (99.5)	563 (63.9)	711 (80.7)	832 (94.4)	695 (78.9)	771 (87.5)	843 (95.7)	567 (64.4)	645 (73.2)	813 (92.3)	457 (51.9)	577 (65.5)	782 (88.9)
女	580 (65.8)	692 (78.5)	836 (94.9)	708 (80.4)	765 (86.8)	870 (98.8)	493 (56.0)	605 (68.7)	825 (93.6)	460 (52.2)	620 (70.4)	761 (86.4)	546 (62.0)	617 (70.0)	844 (95.8)	298 (33.8)	444 (50.4)	730 (82.9)
	463 (52.6)	572 (64.9)	769 (87.3)	469 (53.2)	593 (67.3)	816 (92.6)	266 (30.2)	396 (44.9)	711 (80.7)	638 (72.4)	710 (80.6)	801 (90.9)	654 (74.2)	748 (84.9)	852 (96.7)	482 (54.7)	611 (69.4)	777 (88.2)

		教 育 漢 字 (881字)																				
		読 み 完 了						書 き 完 了						読 み 書 き と も に 完 了								
		2 回 目 (1 年 後 期)		3 回 目 (2 年 前 期)		6 回 目 (3 年 終 了 時)		2 回 目		3 回 目		6 回 目		2 回 目		3 回 目		6 回 目				
男	子	平	均	683.0 (77.5)	769.5 (87.3)	848.3 (96.3)	684.0 (77.6)	739.3 (83.9)	849.8 (96.5)	543.7 (61.7)	655.3 (74.4)	820.0 (93.1)	535.3 (60.8)	648.5 (73.6)	791.8 (89.9)	594.2 (67.5)	680.8 (77.3)	845.5 (96.0)	384.8 (43.7)	514.0 (58.3)	760.8 (86.4)	
男	女	平	均	609.1 (69.1)	709.0 (80.5)	820.0 (93.1)	639.1 (72.5)	710.0 (80.6)	847.6 (96.2)	464.3 (52.7)	584.6 (66.4)	790.4 (89.7)										

り縮まり、読み書きともに進歩が認められる。しかし、義務教育終了段階で、その習得が要求されている教育漢字の書きに、未習得、あるいは習得不安定な文字が残っていること、小学校段階でその習得が要請されている教育漢字の読みの上で、音訓の習得のアンバランスという問題が依然として残されていることがわかる。

具体的な文字の例をあげると次のようである。

中学終了時までには習得が完了しなかった教育漢字の読み書き

(読み) (半数以上のものが読めなかった例)

下<sub>もと</sub> 川<sub>かわ</sub> (以上1年用漢字) 行<sub>ゆ</sub> 字<sub>あざ</sub> 夕<sub>ゆふ</sub> 切<sub>き</sub> 天<sub>あま</sub> (2年用) 遠<sub>とほ</sub>  
 回<sub>まわ</sub> 期<sub>き</sub> 仕<sub>つか</sub> 社<sub>やしろ</sub> 坂<sub>さか</sub> 面<sub>おもて</sub> 由<sub>よし</sub> (3年用) 機<sub>はた</sub> 業<sub>わざ</sub> 結<sub>むす</sub> 拾<sub>ひろ</sub>  
 録<sub>ろく</sub> (4年用) 因<sub>よ</sub> 解<sub>と</sub> 各<sub>おの</sub> 久<sub>ひさ</sub> 経<sub>つ</sub> 功<sub>こう</sub> 興<sub>おこ</sub> 殺<sub>ころ</sub> 蚕<sub>いと</sub> 承<sub>うけたま</sub>

政<sub>まつりごと</sub> 精<sub>しょう</sub> 織<sub>おり</sub> 省<sub>かてみやう</sub> 説<sub>せつ</sub> 貸<sub>か</sub> 統<sub>と</sub> 報<sub>ほう</sub> (5年用) 眼<sub>まなこ</sub> 基<sub>もと</sub> 己<sub>おのれ</sub>

供<sub>たご</sub> 権<sub>けん</sub> 災<sub>わざい</sub> 採<sub>と</sub> 衆<sub>しゆ</sub> 授<sub>さづける</sub> 宗<sub>しゆ</sub> 舌<sub>した</sub> 退<sub>しりぞく</sub> 難<sub>がた</sub> 否<sub>いな</sub> 奮<sub>ふん</sub> 暴<sub>はげ</sub>

(6年用)

(書き) (2人以上のものが書けなかった一書く力として定着していなかった一例)

旗 察 齒 鼻 (4年用) 易 規 均 候 講 際 似 祝 術 象  
 承 貯 張 低 敵 粟 (5年用) 遺 壺 括 革 敏 勸 責 系  
 潔 券 兼 減 蔽 孝 穀 妻 採 策 積 就 衆 述 純 招  
 称 処 是 專 宣 蔵 俗 損 程 提 展 難 式 拝 評 複  
 奮 陸 補 墓 暴 未 預 臨 (6年用)

教育外当用漢字の読み書き

従来の整理法に従えば、かなり読み(平均96.9%)書き(66%)できるが、個人差が相当強く、上限と下限の差、読み(84字)書き(450字)である。

総じて、第6回卒業時の調査では、教育漢字・教育外当用漢字ともに予想外に読み書きの力がついたような結果がみられたが、これは、中学3年間の国語学習——漢字学習の結果、一般読書その他からの自然習得などによると

思われるが、高校進学に対処して、3年で、漢字学習の重点的指導が行なわれていること(東京都では、入試の科目が、三教科<国語・算数・英語>になったことも要因の一つ)、生徒も進学にそなえて、漢字学習に身を入れたということがあずかって力あったようである。教育漢字の書き、教育外当用漢字の読みに、特にそれが顕著であるようである。

#### 表外字の読み

表外字については、調査の結果および習得の内省から、他教科・一般読書・親しい固有名詞(人名・地名)・広告・テレビなどで、意外に接近していること、また、他教科や親しい固有名詞、日常生活に密接な文字については、その習得状況もあまり不安定なものでないことが、1～6回の調査結果でたしかめられた。3年前期(5回)後期(6回)の調査では、表外字の数をふやして1,000字(今までの調査で、8人が2回続けて正答した文字は省略し、新たに加えた文字数)を対象とした。そのうち、全員(8人)が読めた字は次の60字であり、これらの中には、前回までに正答率の高かったものが多い。

伊 咽 猿 迦 靴 峨 鶴 殼 韓 申 肌 磯 埼 旭 芹 隅  
圭 螢 桂 彦 宏 喉 溝 嵯 坐 洲 汁 壤 誰 瀉 仙 宋  
湊 馱 厨 釣 枕 灯 析 奈 稔 罵 漠 阪 播 磐 扉 梶  
猫 釜 糞 苔 李 鯉 梨 栗 笠 淋 蓮 呂

(7人までが読めた字 53字)

淵 伽 荊 菅 崎 巾 窟 壺 糊 虹 浩 幌 轟 薩 傘 只  
之 辰 菽 袖 塾 庄 篠 杖 疎 爪 藉 腺 苔 蝶 椿 辻  
淀 桐 屯 井 胚 唄 柏 餅 篇 泡 峯 棚 蜂 蜜 謎 蒙  
熊 鷹 羅 狼 或

8人～4人までが読めた字は340字ある。これらは、その習得経路をたずねたところ、おおむね、次のような経路から習得されていることが、うかがわれた。

例

奈 阪 滂 梨 仙	} (社 会 科)	笠 簞 肌 俺 唇	(テレビ映画)
韓 蓮 宋 屯 繩		灯 逢 串 唄 盃	(歌謡曲など)
穀 燐 胚 泥 蛋	(理 科)	濯 飴 漬 醬 渦	(テレビ等の 宣伝品名)
厨 苔 鳳 襖 埴	(美 術)	靴 椅 鍵 傘 裳	} (看板・店頭) 表示
咽 喉 腺 疹 腎	(保 健)	鯛 釣 灸 屑 宛	
枕 汁 鍋 袖 衿	(家 庭)	淋 嬉 嫌 謎 偵	} (一般読書)
伊 菽 梔 芹 壺	} (人 名)	嘘 蔭 匂 闇 其	
鶴 宏 圭 彦 蝶		李 杜 昌 綴 魯	(特に国語学 習から)

なお、かながきをたてまえとする動植物名が、次のように、多く読めていたことが新しい発見であったが、これらは、動植物名本来の機能としてより、むしろ、固有名詞、(人名・地名)物品名あるいは比喩的表現、熟語として接近し、習得するからであろう。

鶴 猫 猿 螢 鯉 (以上 8 人) 熊 蝶 狼 鷹 蜂 (7 人) 竜  
 鳩 虎 駒 雀 蛇 狗 蛾 鯛 獅 鷲 狸 (6 人) 鴨 鼠 鳳  
 鴻 雁 (5 人) 寅 蛙 兎 鮎 鮫 蟹 (4 人)  
 梨 芹 (8 人) 桐 菽 柏 椿 篠 苔 (7 人) 菱 樺 榎 笹  
 柳 楠 (6 人) 蘭 荻 檜 葛 樟 茨 槻 (5 人) 槇 蕪 (4  
 人)

## II 漢字習得上の問題解明のためのテスト

当用漢字全数音訓読み書き調査の結果で得た問題点を検証し、また習得上の問題点の解明がねらいのこの調査を40・41ページのような問題構成のもとに実施したが、結果は整理中なので、そのうちから一部を記しておく。

この調査は、2年生の時にも実施し、8人の事例調査で出た問題点が、当該学年の集合調査の結果にも認められた(年報7—昭和40年度参照)が、同じことが3年の終了時にもいえる。

### 教育漢字の読み

これまでの8人の調査および、中学2年の集合調査でも確かめ(→56ペ)

(第4表) 問題1(教育漢字の読み)の正答率

四

三

二

	1 川 セン	2 下 しももと	3 切 サイ	4 出 スイ トウ	5 歩 フ	6 字 あざ	7 坂 ハン	8 由 よし	9 主 ぬし	10 図 はか (る)	11 仕 つか (える)	12 病 やまい (む)	13 拾 シュウ	14 言 ゴ
I校	39.0	58.5	48.8	43.6	73.2	17.1	34.1	9.8	90.2	61.0	43.9	43.9	63.4	65.9
	50.0	69.0	66.7	42.9	73.8	19.0	9.5	14.3	97.6	69.0	47.6	52.4	40.5	61.9
B校	72.2	83.3	58.3	75.0	80.6	13.9	16.7	0	100	75.0	66.7	52.8	44.4	55.6
	55.9	94.1	58.8	70.6	82.4	8.8	14.7	8.8	97.1	64.7	55.9	50.0	35.3	61.8
M校	69.6	73.9	54.3	65.2	76.1	21.7	32.6	13.0	95.7	87.0	84.8	43.5	43.5	78.3
	82.2	95.6	71.1	73.3	84.4	31.1	31.1	24.4	100	82.2	82.2	60.0	93.3	95.6
M校	46.3	82.9	75.6	70.7	61.0	31.7	24.4	7.3	97.6	61.0	48.8	39.0	22.0	68.3
	53.8	82.1	79.5	56.4	59.0	23.1	15.4	0	100	53.8	43.6	41.0	33.3	69.2
T校	46.7	73.3	33.3	46.7	40.0	20.0	6.7	0	93.3	80.0	46.7	86.7	40.0	53.3
M校	87.5	75.0	80.0	67.5	80.0	72.5	52.5	15.0	97.5	87.5	67.5	70.0	60.0	65.0
	83.3	78.6	73.8	73.8	85.7	61.9	45.2	31.0	100	90.5	76.2	76.2	88.1	85.7
N校	50.0	36.8	31.6	57.9	68.4	81.6	5.3	0	86.8	65.8	36.8	68.4	36.8	39.5
	55.3	63.2	23.7	60.5	73.7	84.2	7.9	5.3	89.5	73.7	36.8	63.2	36.8	39.5
計	62.0	74.4	59.8	62.8	73.8	38.4	24.1	11.3	96.0	73.2	57.9	55.9	42.9	66.0
*2年集合 調査結果	47.4	27.7		24.9	55.9							51.2	71.5	46.8

問題1(教育漢字の読み)の正答率(続)

五

	15 機 はた	16 貸 ついで (す)	17 失 うしな (う)	18 結 ゆ (う)	19 商 あきな (う)	20 唱 となえ (る)	21 貸 タイ	22 漁 リョウ	23 蚕 ザン	24 織 シヨク	25 留 と (める)	26 報 むく (いる)	27 統 すべ (る)	28 健 すこ (やか)	29 縫 へ (る)	30 興 おこ (る)	
I校	{ 14.6 19.0 }	{ 70.7 69.0 }	{ 87.8 85.7 }	{ 34.1 47.6 }	{ 26.8 40.5 }	{ 41.5 47.6 }	{ 7.3 2.4 }	{ 63.4 76.2 }	{ 65.9 64.3 }	{ 17.1 26.2 }	{ 63.4 66.7 }	{ 85.4 92.9 }	{ 2.4 0 }	{ 82.9 88.1 }	{ 36.6 33.3 }	{ 22.0 7.1 }	
B校	{ 33.3 44.1 }	{ 69.4 58.8 }	{ 97.2 97.1 }	{ 22.2 32.4 }	{ 36.1 44.1 }	{ 44.4 50.0 }	{ 97.2 100 }	{ 69.4 73.5 }	{ 38.9 61.8 }	{ 25.0 26.5 }	{ 61.1 64.7 }	{ 94.4 94.1 }	{ 58.3 55.9 }	{ 2.8 2.9 }	{ 91.7 91.2 }	{ 52.8 44.1 }	{ 13.9 14.7 }
M校	{ 32.6 42.2 }	{ 89.1 91.1 }	{ 91.3 95.6 }	{ 47.8 66.7 }	{ 41.3 44.4 }	{ 80.4 88.9 }	{ 97.8 100 }	{ 65.2 68.9 }	{ 80.4 88.9 }	{ 30.4 28.9 }	{ 43.5 51.1 }	{ 95.7 97.8 }	{ 78.3 86.7 }	{ 10.9 2.2 }	{ 73.9 86.7 }	{ 58.7 62.2 }	{ 23.9 37.8 }
M校	{ 26.8 17.9 }	{ 70.7 71.8 }	{ 97.6 89.7 }	{ 29.3 38.5 }	{ 26.8 28.2 }	{ 85.4 76.9 }	{ 100 100 }	{ 9.8 10.3 }	{ 63.4 59.0 }	{ 17.1 23.1 }	{ 56.1 59.0 }	{ 95.1 87.2 }	{ 53.7 61.5 }	{ 2.4 2.6 }	{ 78.0 71.8 }	{ 51.2 46.2 }	{ 22.0 28.2 }
T校	{ 6.7 }	{ 93.3 }	{ 86.7 }	{ 33.3 }	{ 40.0 }	{ 93.3 }	{ 100 }	{ 6.7 }	{ 40.0 }	{ 13.3 }	{ 53.3 }	{ 100 }	{ 66.7 }	{ 80.0 }	{ 46.7 }	{ 13.3 }	
M校	{ 42.5 57.1 }	{ 87.5 83.3 }	{ 90.0 90.5 }	{ 57.5 52.4 }	{ 72.5 66.7 }	{ 80.0 71.4 }	{ 100 100 }	{ 45.0 47.6 }	{ 60.0 64.3 }	{ 20.0 31.0 }	{ 67.5 54.8 }	{ 95.0 95.2 }	{ 77.5 76.2 }	{ 10.0 47.6 }	{ 80.0 76.2 }	{ 72.5 69.0 }	{ 50.0 52.4 }
N校	{ 23.7 28.9 }	{ 84.2 81.6 }	{ 84.2 92.1 }	{ 7.9 7.9 }	{ 52.6 65.8 }	{ 21.1 13.4 }	{ 97.4 92.1 }	{ 7.9 63.2 }	{ 42.1 68.4 }	{ 5.3 23.7 }	{ 50.0 42.1 }	{ 92.1 89.5 }	{ 55.3 68.4 }	{ 5.3 7.9 }	{ 63.2 65.8 }	{ 50.0 42.1 }	{ 36.8 31.6 }
計	{ 31.2 }	{ 78.3 }	{ 91.3 }	{ 37.8 }	{ 45.5 }	{ 61.2 }	{ 98.8 }	{ 18.5 }	{ 63.0 }	{ 22.3 }	{ 56.3 }	{ 93.2 }	{ 65.6 }	{ 10.1 }	{ 79.1 }	{ 51.7 }	{ 28.2 }
*2年集合 調査結果	{ 84.8 }	{ 41.9 }	{ 11.1 }	{ 63.7 }	{ 53.2 }	{ 43.3 }	{ 5.5 }	{ 8.1 }									

問題1(教育漢字の読み)の正答率(続)

六

	31 餌 あたい (る)	32 承 うけなまわ (る)	33 背 せめ (る)	34 魚 うお (る)	35 省 かえり (みる)	36 暴 バク (みる)	37 舌 ゼツ (みる)	38 巳 キ (みる)	39 退 しりぞかた (く)	40 難 むずかた (い)	41 奮 ふる (う)	42 否 いな (む)	43 災 わざわ (い)	44 採 と (る)	45 欲 ほす (する)	46 授 さず (ける)	47 眼 まなこ (る)	48 断 た (つ)	49 深 いさぎよ (い)
I校	{ A 34.1 B 35.7	{ A 31.7 B 38.1	{ A 56.1 B 78.6	{ A 59.5 B 59.5	{ A 43.9 B 35.7	{ A 75.6 B 69.0	{ A 22.0 B 33.3	{ A 34.1 B 23.8	{ A 48.8 B 42.9	{ A 29.3 B 59.5	{ A 26.8 B 26.2	{ A 12.2 B 4.8	{ A 22.0 B 23.8	{ A 34.1 B 38.1	{ A 51.2 B 64.3	{ A 36.6 B 23.8	{ A 14.6 B 7.1	{ A 65.9 B 81.0	{ A 22.0 B 11.9
B校	{ A 25.0 B 20.6	{ A 36.1 B 38.2	{ A 66.7 B 58.8	{ A 69.4 B 73.5	{ A 47.2 B 41.2	{ A 55.6 B 47.1	{ A 33.3 B 32.4	{ A 13.9 B 14.7	{ A 47.2 B 47.1	{ A 47.2 B 50.0	{ A 58.3 B 47.1	{ A 5.6 B 8.8	{ A 22.2 B 26.5	{ A 44.4 B 41.2	{ A 52.8 B 35.3	{ A 33.3 B 29.4	{ A 19.4 B 17.6	{ A 63.9 B 64.7	{ A 19.4 B 14.7
M校	{ A 41.3 B 40.0	{ A 60.9 B 60.0	{ A 58.7 B 73.3	{ A 71.7 B 86.7	{ A 67.4 B 64.4	{ A 58.7 B 37.8	{ A 52.2 B 62.2	{ A 50.0 B 66.7	{ A 73.9 B 80.0	{ A 60.9 B 60.0	{ A 65.2 B 75.6	{ A 0 B 2.2	{ A 45.7 B 53.3	{ A 63.0 B 71.1	{ A 63.0 B 55.9	{ A 39.1 B 51.1	{ A 19.6 B 33.3	{ A 84.8 B 86.7	{ A 23.9 B 28.9
M校	{ A 31.7 B 43.6	{ A 31.7 B 35.9	{ A 51.2 B 61.5	{ A 61.0 B 79.5	{ A 36.6 B 33.3	{ A 36.6 B 38.5	{ A 22.0 B 25.6	{ A 43.9 B 51.3	{ A 53.7 B 59.0	{ A 39.0 B 35.9	{ A 51.2 B 71.8	{ A 7.3 B 0	{ A 22.0 B 15.4	{ A 70.7 B 64.1	{ A 14.6 B 10.3	{ A 24.4 B 23.1	{ A 12.2 B 7.7	{ A 85.4 B 76.9	{ A 31.7 B 17.9
T校	{ A 23.7	{ A 66.7	{ A 66.7	{ A 60.0	{ A 86.7	{ A 80.0	{ A 40.0	{ A 73.3	{ A 93.3	{ A 46.7	{ A 40.0	{ A 0	{ A 20.0	{ A 66.7	{ A 6.7	{ A 60.0	{ A 13.3	{ A 73.3	{ A 20.0
M校	{ A 65.0 B 73.8	{ A 62.5 B 50.0	{ A 75.0 B 85.7	{ A 67.5 B 76.2	{ A 47.5 B 71.4	{ A 57.5 B 78.6	{ A 45.0 B 47.6	{ A 67.5 B 71.4	{ A 82.5 B 83.3	{ A 75.0 B 69.0	{ A 67.5 B 69.0	{ A 37.5 B 50.0	{ A 42.5 B 38.1	{ A 70.0 B 76.2	{ A 75.0 B 71.4	{ A 45.0 B 64.3	{ A 27.5 B 26.2	{ A 92.5 B 92.9	{ A 40.0 B 38.1
N校	{ A 39.5 B 52.6	{ A 26.3 B 28.9	{ A 52.6 B 57.9	{ A 55.3 B 65.8	{ A 39.5 B 44.7	{ A 47.4 B 52.6	{ A 15.8 B 23.7	{ A 5.3 B 13.2	{ A 52.6 B 65.8	{ A 28.9 B 34.2	{ A 47.4 B 52.6	{ A 21.1 B 21.1	{ A 15.8 B 7.9	{ A 36.8 B 44.7	{ A 36.8 B 39.5	{ A 2.6 B 10.5	{ A 7.9 B 7.9	{ A 76.3 B 81.6	{ A 21.1 B 21.1
計	{ A 41.9	{ A 43.1	{ A 65.0	{ A 68.4	{ A 49.5	{ A 55.5	{ A 35.4	{ A 40.2	{ A 63.0	{ A 49.5	{ A 54.7	{ A 13.7	{ A 28.4	{ A 55.5	{ A 46.9	{ A 33.4	{ A 16.9	{ A 79.7	{ A 24.3
*2年集合 調査結果	{ A 27.1	{ A 27.9	{ A 46.9	{ A 25.7	{ A 39.2	{ A 25.7	{ A 3.8	{ A 59.1	{ A 3.8	{ A 34.8	{ A 52.6	{ A 39.8	{ A 27.9	{ A 31.4	{ A 21.4	{ A 60.2	{ A 8.8	{ A 11.1	{ A 8.8

\* 2年集合調査結果は、昭和40年に問題解明のための集合調査を東京の中学校(5校)に実施した際の平均正答率である。  
そのうち下段は、同じ読み方のテストを他の問題で重ねてためた時の平均正答率である。(第5,6表も同じ)



(第5表) 問題2(教育外当用漢字の読み)の正答率

	1 忙 いそが (しい)	2 顧 かえり (みる)	3 慕 した (り)	4 企 くわだ (てる)	5 價 いざお (る)	6 活 けが (ず)	7 戲 たわむ (れる)	8 募 つの (る)	9 捕 とら (える)	10 臆 いそ (しい)	11 危 あや (りい)	12 仰 おお (せ)	13 巡 めぐ (る)	14 怒 いか (る)	15 惑 まど (る)	16 侮 あなど (る)	17 詰 こ (り)
I校(A)	53.7	17.1	29.3	56.1	4.9	4.9	43.9	12.2	70.7	22.0	78.0	14.6	58.5	56.1	31.7	2.4	12.2
I校(B)	66.7	50.0	50.0	50.0	4.8	9.5	50.0	28.6	33.3	38.1	81.0	33.3	64.3	78.6	35.7	4.8	23.8
B校(A)	63.9	33.3	77.8	47.2	5.6	25.0	63.9	8.3	63.9	33.3	83.3	27.8	55.6	66.7	30.6	2.8	27.8
B校(B)	61.8	35.3	67.6	52.9	2.9	14.7	52.9	11.8	61.8	38.2	82.4	20.6	44.1	58.8	47.1	2.9	35.3
M校(A)	73.9	71.7	76.1	50.0	21.7	30.4	41.3	43.5	78.3	30.4	89.1	10.9	2.2	58.7	32.6	39.1	28.3
M校(B)	77.8	46.7	77.8	64.4	8.9	28.9	53.3	53.3	62.2	42.2	97.8	11.1	8.9	51.1	42.2	40.0	33.3
M校(A)	70.7	19.5	61.0	19.5	12.2	9.8	58.5	22.0	73.2	19.5	75.6	19.5	12.2	65.9	7.3	0	24.4
M校(B)	79.5	15.4	64.1	10.3	0	12.8	28.1	10.3	74.4	23.1	82.1	5.1	0	51.3	7.7	2.6	15.4
T校	86.7	40.0	73.3	80.0	86.7	66.7	93.3	100	73.3	60.0	93.3	46.7	26.7	93.3	86.7	60.0	40.0
M校(A)	82.5	42.5	75.0	47.5	20.0	40.0	62.5	22.5	92.5	27.5	87.5	57.5	12.5	65.0	37.5	27.5	70.0
M校(B)	73.8	73.8	59.5	40.5	31.0	45.2	42.9	28.6	81.0	61.9	85.7	38.1	31.0	88.1	40.5	23.8	64.3
N校(A)	71.1	42.1	28.9	26.3	15.8	21.1	34.2	5.3	55.3	31.6	73.7	26.3	23.7	57.9	23.7	15.8	7.9
N校(B)	84.2	47.4	42.1	28.9	10.5	13.2	55.3	10.5	65.8	50.0	84.2	10.5	10.5	63.2	10.5	13.2	18.4
計	70.2	41.9	59.8	42.7	14.1	22.9	50.1	24.7	72.2	35.6	83.9	23.5	26.4	64.4	30.8	16.7	30.6
2年総合 調査結果	55.5	25.8		26.8 28.7	4.9 4.9	3.0 4.3	22.7 24.4	12.3 13.3	55.8		77.0 77.5	15.2	3.5	54.5		4.1	

問題2(教育外当用漢字の読み)の正答率(続)

	18 施 ほどこ (す)	19 充 あ (てる)	20 趣 おもしろ き	21 机 キ	22 泣 キ ユウ	23 添 テ ン	24 茂 モ シ	25 詳 シ ョウ	26 妥 ウ ヤ	27 煩 ハ ン	28 既 キ	29 奪 ダ ツ	30 墮 ウ ダ	31 醜 シ ユウ	32 暫 ザ ン	33 魔 レイ	34 怠 タイ
I校{A	48.8	2.4	26.8	70.7	4.9	41.5	36.6	22.0	48.8	39.0	48.8	34.1	22.0	9.4	19.5	78.0	61.0
B	69.0	2.4	28.6	71.4	2.4	26.2	26.2	19.0	45.2	38.1	64.3	42.9	26.2	33.3	16.7	81.0	71.4
B校{A	80.6	2.8	22.2	16.7	2.8	2.8	27.8	30.6	72.2	38.9	61.1	16.7	13.9	27.8	25.0	75.0	69.4
B	73.5	2.9	32.4	26.5	5.9	11.8	26.5	32.4	70.6	17.6	58.8	14.7	17.6	14.7	20.6	76.5	61.8
M校{A	56.5	0	63.0	71.7	6.5	73.9	26.1	47.8	71.7	23.9	60.9	28.3	28.3	26.1	26.1	73.9	67.4
B	57.8	0	64.4	28.9	2.2	77.8	17.8	35.6	77.8	15.6	68.9	35.6	17.8	44.4	24.4	77.8	73.3
M校{A	48.8	0	43.9	9.8	4.9	14.6	9.8	19.5	58.5	0	43.9	9.8	14.6	4.9	9.8	78.0	39.0
B	46.2	0	51.3	5.1	0	15.4	7.7	12.8	61.5	5.1	53.8	15.4	10.3	15.4	10.3	66.7	48.7
T校	86.7	20.0	60.0	53.3	0	86.7	26.7	33.3	86.7	6.7	46.7	20.0	6.7	26.7	13.3	60.0	73.3
M校{A	60.0	0	67.5	35.0	15.0	25.0	27.5	32.5	67.5	57.5	62.5	60.0	60.0	35.0	95.0	65.0	90.0
B	71.4	28.6	69.0	52.4	7.1	9.5	28.6	21.4	69.0	83.3	78.6	31.0	31.0	21.4	69.0	73.8	90.5
N校{A	31.6	34.2	26.3	18.4	2.6	28.9	21.1	5.3	15.8	44.7	28.9	18.4	18.4	18.4	13.2	50.0	34.2
B	42.1	15.8	42.1	28.9	0	39.5	15.8	10.5	18.4	39.5	34.2	13.2	13.2	13.2	21.1	55.3	50.0
計	57.9	7.6	46.1	37.8	4.4	35.6	22.7	24.7	57.7	32.8	55.5	22.1	22.5	22.5	29.0	70.8	63.8
2年集合 調査結果	15.7	1.6	28.5	22.2		17.8		12.9	22.7		18.4	21.4		12.6	11.5	32.9	23.9

問題2(教育外当用漢字の読み)の正答率(続)

	35 袋 タイ	36 裏 チ	37 悔 カイ	38 皆 カイ	39 該 ガイ	40 底 フ	41 恨 ウ	42 念 オ	43 煩 ウ	44 麗 ウ	45 醜 ウ	46 毒 ウ	47 既 ウ	48 携 ウ	49 敗 ウ	50 堪 ウ
%																
I校(A)	7.3	4.9	22.0	19.5	24.4	2.4	29.3	68.3	39.0	46.3	22.0	58.5	7.3	19.5	48.8	7.3
I校(B)	7.1	4.8	31.0	33.3	14.3	0	50.0	59.5	33.3	38.1	38.1	64.3	9.5	31.0	45.2	14.3
B校(A)	0	2.8	47.2	19.4	25.0	2.8	41.7	75.0	2.8	66.7	41.7	50.0	11.1	22.2	27.8	13.9
B校(B)	8.8	0	50.0	35.3	32.4	2.9	55.9	61.8	2.9	58.8	29.4	55.9	8.8	26.5	35.3	14.7
M校(A)	19.6	30.4	23.1	39.1	37.0	8.7	52.2	65.2	15.2	23.9	63.0	39.1	6.5	37.0	41.3	8.7
M校(B)	31.1	28.9	23.7	51.1	37.8	2.2	46.7	71.1	13.3	35.9	51.1	53.3	13.3	40.0	48.9	17.8
N校(A)	7.3	2.4	17.1	34.1	31.7	2.4	41.5	17.1	7.3	39.0	24.4	36.6	7.3	19.5	22.0	7.3
N校(B)	12.8	2.6	17.9	35.9	30.3	2.6	48.7	15.4	5.1	38.5	28.2	25.6	5.1	5.1	2.6	5.1
T校	33.3	20.0	53.3	73.3	46.7	20.0	73.3	100.0	66.7	73.3	80.0	66.7	0	60.0	60.0	13.3
M校(A)	25.0	70.0	20.0	50.0	42.5	7.5	55.0	67.5	20.0	47.5	65.0	60.0	42.5	37.5	45.0	40.0
M校(B)	33.3	40.5	33.3	64.3	57.1	7.1	69.0	64.3	38.1	59.5	59.5	61.9	47.6	28.6	57.1	54.8
N校(A)	13.2	2.6	10.5	13.2	5.3	2.6	36.8	39.5	23.7	55.3	47.4	55.3	21.1	5.3	50.0	15.8
N校(B)	13.2	0	2.6	18.4	10.5	2.6	57.9	50.0	26.3	52.6	50.0	52.6	13.2	10.5	63.2	28.9
計	15.9	16.7	26.0	26.0	30.0	4.2	49.5	56.1	20.7	46.9	44.9	51.5	15.7	25.2	41.4	18.9
2年集念 調査結果	7.1		27.4	23.0		24.4		33.4		23.0	25.8	46.3	12.6	7.0	14.1	

られたように、小学校段階で、その読みは一応習得することを目標としている教育漢字の読みにおける音訓習得のアンバランスは、その差が次第に縮められてくるとはいえ、依然として問題を残していることが認められるので、3年のこのテストでも、そうした観点に立って問題を構成(前掲)し、実施した。結果は第4表でみるように、義務教育終了段階では、難点のあった音なり訓なりの読みの力は、2～3年の1年間で、かなり上昇するが、しかし、依然として問題を残している読みがあること(例 統<sup>す</sup> 潔<sup>い</sup> 授<sup>ま</sup> 眼<sup>ま</sup> 災<sup>わ</sup> 否<sup>い</sup> 興<sup>き</sup>等)が確かめられた。

なお、2年では非常に低かったものが、古典その他の学習によるためか、かなり上昇している(例 難<sup>か</sup> 欲<sup>ほ</sup>)、訓読みに難点のあるもので、地域の差による読みかたの反応差(例「魚」の関東→さかな、関西→うおの読みの差の有無を調べたが、「さかな」に移行する傾向がみられる一名古屋方面)があまり認められない、生活上必要でありながら、地域によっては関係の薄いもの(例 字<sup>じ</sup>)、今日の書簡文や公用文には無縁になりかけているもの(例 由<sup>ゆ</sup>)などが読めないなどの現象がある。

音読みでは、呉音などの特殊な読みに抵抗があるのはやむをえないとしても、日常生活で、使用される拾<sup>しよ</sup>(拾得、收拾) 貸<sup>か</sup>(貸借・貸与)などが、拾う、貸すに比べるとたいへん低いというような現象が半面であって、これなどは、漢語での表現をさけて、拾得→拾う、貸借→貸し借りと言いなおしている、現在の話しことばの傾向が滲透した結果であると思われる。

音読みに抵抗のある代表的なものとして、呉音などによる特殊なものがある。仏教関係の語などにそれが多く、日常生活の中に入りこんでいるから、音訓表の中に、特殊な音として採りあげられているが、これらはやはり、生徒の日常生活あるいは国語学習の上で、比較的縁が薄いためか、不振である。問題6でそうした一連の読みをテストしたが、

回向エコウ(平均正答率 24.3%)衆生<sup>しゆじよウ</sup>  $\left( \begin{array}{cc} 11.7 & 16.1 \\ 3.6 & \end{array} \right.$  下段は2年の成績  
権化ゴンゲ(36.8 29.2)罪業ザイゴウ<sup>(19.1)</sup>  $\left( \begin{array}{c} 9.8 \end{array} \right)$  などであり、遊説ユウゼイ

( $\frac{26.6}{12.7}$ ) 成就 ジョウジュ ( $\frac{40.6}{27.9}$   $\frac{42.3}{27.9}$ ) 緑青 ロクショウ ( $\frac{39.2}{13.8}$   $\frac{41.9}{14.6}$ ) 最期 サイゴ ( $\frac{31.0}{29.8}$ ) 解毒 ゲドク ( $\frac{33.6}{22.5}$ ) 解脱 ゲダツ (21.5) など、一般日常生活でかなり使用される語でも、相当低いことがわかる。なお、読本(トクホン)として往時用いられた「トク」は、今日の生徒にはあまり読めなくなっており、( $\frac{\text{トクホン} 33.0\%}{19.8}$ ) 「ドクホン」と濁音化の傾向が強い。昔の読本(トクホン)は、国語の教科書となり、「〇〇読本」という複合語の形で用いられることが多い現状の反映であろう。漢字の読みかたの大勢が、使用語いの変遷とともに移行していくことが改めて認められるのである。

### 教育外当用漢字の読み

教育外当用漢字は中学校の段階で学習の対象となる文字であるため、1・2年での調査結果では、教育漢字同様の問題がいっそう顕著であった。それが、3年終了まででどのようになるかをみたのが、問題(2)であるが、結果は第5表のように、音訓習得の不均衡はかなり縮められてくる。しかし、2年の集合調査でみられたように、訓よみでは、

生徒の日常生活の中で次第に使用されなくなっていることばのよみ(訓)

例 募<sup>モ</sup> (平均正答率24.7%) 侮<sup>ブ</sup> (16.7) 請<sup>モウ</sup> (30.6) 充<sup>モウ</sup> (7.6) 携<sup>モウ</sup>  
(25.2) 堪<sup>カン</sup> (18.9) 既<sup>キ</sup> (12.6)

一般に世間で行なわれているよみかたや別訓のあるもの

例 憤<sup>フン</sup> (14.1% / おこる・いかる7.8%) 汚<sup>ウ</sup> (22.9% / よごす60.2%)  
巡<sup>メ</sup> (26.4% / まわる50.9%) 怒<sup>イ</sup> (64.4% / おこる27.2%)

などに抵抗がみられる。また、反対に、訓読みおよび書く力も相当ありながら音読みでは低い、次のようなものもある。

例 机<sup>キ</sup> (37.8%) 2年の調査で机上として提出したところ、無答が多く、読みとしてはタクジョウ (16.6%) と反応し食卓、卓上コンロなど現代生活を反映していたが、今度の調査でも正答率は低い。

泣<sup>キユウ</sup> (4.4%) 茂<sup>キ</sup> (22.7%) 袋<sup>フクロ</sup> (15.9%)

これら一連の現象は、正答率が2年時に比べると多少よくなっている程度

(第6表) 問題4(教育漢字の書き)の正答率

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
	礼袋	待っ	借りる	拾う	合唱	函(は)	川の底	貿易	救助(く)	留学	報告	貸す	総計	蚕(かい)
I 校	{A	87.8	61.0	78.0	63.4	87.8	63.4	73.2	63.4	61.0	78.0	65.9	85.4	58.5
	{B	92.9	59.5	71.4	61.9	81.0	57.1	73.2	47.6	52.4	88.1	71.4	85.7	66.7
B 校	{A	88.9	75.0	69.4	66.7	86.1	91.7	80.6	55.6	58.3	88.9	83.3	61.1	52.8
	{A	94.1	79.4	58.8	61.8	91.2	82.4	85.3	55.9	61.8	91.2	70.6	73.5	76.5
M 校	{A	82.6	82.6	63.0	71.7	95.7	82.6	91.3	58.7	52.2	95.7	87.0	69.6	78.8
	{B	91.1	80.0	77.8	84.4	86.7	86.7	91.1	64.4	64.4	93.3	80.0	71.1	82.2
M 校	{A	85.4	70.7	58.5	65.9	95.1	65.9	73.2	43.9	46.3	78.0	65.9	85.4	78.0
	{B	87.2	71.8	66.7	74.4	89.7	76.9	74.4	43.6	35.9	82.1	64.1	76.9	61.5
T 校		80.0	73.3	73.3	60.0	86.7	73.3	86.7	46.7	40.0	80.0	100	73.3	86.7
M 校	{A	97.5	85.0	70.0	80.0	90.0	85.0	72.5	65.0	60.0	95.0	85.0	97.5	77.5
	{B	90.5	78.6	66.7	81.0	97.6	78.6	81.0	57.1	52.4	95.2	83.3	66.7	73.8
N 校	{A	89.5	68.4	76.3	57.9	81.6	63.2	42.1	50.0	44.7	84.2	73.7	76.3	78.9
	{B	81.6	65.8	65.8	60.5	84.2	71.1	52.6	47.4	42.1	76.3	60.5	65.8	78.9
計		88.7	73.2	68.8	69.2	88.9	76.1	78.9	54.3	52.3	87.1	75.3	80.5	72.6
2年集合同 調査結果			68.8		55.9		73.3	64.7	60.0	60.0				

問題 4 (教育漢字の書き) の正答率 (続)

	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
	気 象 庁	祝 う	承 知	夫 婦	投 票	準 備	貯 金	低 (ひく)	主 張	気 候	平 均 点	臨 時	遺 産	災 難
I 校 {A B}	65.9 59.5	39.0 47.6	70.7 66.7	75.6 76.2	53.7 57.1	73.2 78.6	19.5 26.2	65.9 73.8	61.0 71.4	78.0 71.4	58.5 61.9	61.0 57.1	51.2 28.6	70.7 66.7
B 校 {A B}	72.2 50.0	52.8 44.1	75.0 61.8	80.6 79.4	75.0 67.6	77.8 76.5	22.2 26.5	72.2 76.5	91.7 64.7	88.9 76.5	63.9 73.5	52.8 55.9	44.4 58.8	75.0 82.4
M 校 {A B}	84.8 60.0	54.3 46.7	82.6 71.1	78.3 84.4	67.4 77.8	73.9 75.6	39.1 48.9	78.3 80.0	76.1 82.2	80.4 82.2	65.2 66.7	63.0 73.3	56.5 71.1	73.9 86.7
M 校 {A B}	63.4 53.8	41.5 48.7	70.7 66.7	73.2 79.5	56.1 56.4	68.3 61.5	39.0 48.7	68.3 63.7	61.0 71.8	63.4 66.7	63.4 46.2	58.5 71.8	43.9 59.0	75.6 74.4
T 校	73.3	40.0	86.7	73.3	73.3	80.0	26.7	73.3	66.7	73.3	33.3	60.0	80.0	53.3
M 校 {A B}	85.0 78.6	75.0 71.4	87.5 88.1	80.0 78.6	85.0 78.6	72.5 83.3	52.5 52.4	77.5 81.0	85.0 90.5	95.0 88.1	77.5 73.8	67.5 81.0	80.0 83.3	90.0 90.5
N 校 {A B}	42.1 44.7	47.4 57.9	68.4 73.7	55.3 42.1	92.1 57.9	63.2 65.8	44.7 36.8	50.0 84.2	52.6 71.1	68.4 71.1	50.0 42.1	60.5 50.0	50.0 31.6	68.4 73.7
計	64.2	51.9	74.2	73.8	68.8	72.8	38.0	73.0	72.4	77.5	61.2	63.0	55.9	76.7
2 年 集 合 調 査 結 果									73.4			47.7	48.5	81.4

問題 4 (教育漢字の書き)の正答率 (続)

	28 火		29 暴 風 雨	30 補 習	31 宣 伝	32 専 門 家	33 除 外	34 公 衆 電 話	35 称 する	36 純 粋	37 徹 理 会	38 活 潔	39 勤 新	40 減 少		
	災 難	困														
I 校 { A B }	85.4 78.6	48.8 57.1	65.9 61.9	53.7 57.1	63.4 64.3	51.2 45.2	58.5 57.1	63.4 76.2	43.9 35.7	24.4 26.2	65.9 52.4	46.3 50.0	39.0 42.9	61.0 45.2	68.3 81.0	63.4 73.8
B 校 { A B }	83.3 91.2	69.4 70.6	69.4 73.5	61.1 50.0	69.4 85.3	66.7 55.9	58.3 50.0	58.3 61.8	44.4 23.5	38.9 38.2	58.3 52.9	47.2 44.1	61.1 52.9	55.6 55.9	72.2 61.8	66.7 58.8
M 校 { A B }	78.3 97.8	56.5 62.2	60.9 64.4	65.2 73.3	69.6 75.6	54.3 51.1	69.6 60.0	67.4 64.4	78.3 80.0	41.3 35.6	60.9 57.8	45.7 60.0	52.2 55.6	67.4 64.4	65.2 71.1	60.9 66.7
M 校 { A B }	92.7 89.7	53.7 56.4	31.7 41.0	46.3 59.0	63.4 53.8	53.7 51.3	36.6 51.3	48.8 56.4	31.7 64.1	24.4 25.6	58.5 79.5	36.6 51.3	51.2 48.7	68.3 53.8	46.3 28.2	48.8 25.6
T 校	86.7	80.0	40.0	53.3	93.3	86.7	33.3	46.7	53.3	46.7	66.7	60.0	93.3	46.7	53.3	53.3
M 校 { A B }	95.0 97.6	85.0 66.7	80.0 81.0	60.0 52.4	87.5 73.8	82.5 61.9	70.0 59.5	72.5 66.7	62.5 76.2	32.5 31.0	72.5 83.3	57.5 47.6	67.5 69.0	67.5 69.0	82.5 71.4	75.0 71.4
N 校 { A B }	89.5 92.1	60.5 73.7	47.4 57.9	42.1 47.4	52.6 60.5	65.8 71.1	28.9 36.8	52.6 55.3	34.2 42.1	10.5 15.8	57.9 65.8	13.2 36.8	47.4 47.4	36.8 57.9	65.8 47.4	52.6 36.8
計	89.1	63.6	60.6	55.9	69.0	59.8	52.9	61.8	52.5	29.4	64.0	45.5	54.1	58.6	63.4	58.6
2年 集 合 調 査 結 果			52.6	40.0	59.7	39.2	41.6		34.8	45.8 39.5	63.6	40.8		47.4		



問題4 (教育漢字の書き)の正答率 (続)

	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53
	殺物	虜	渡派	近眼	退学	欲(ヨク)	出版	奮闘	複教	招く	供給	誤解	株式会社
I	校 { A B	43.9 45.2	65.9 76.2	73.2 71.4	70.7 69.0	48.8 45.2	53.7 69.0	43.9 38.1	48.8 52.4	58.5 66.7	78.0 59.5	56.1 54.8	80.5 83.3
B	校 { A B	5.6 8.8	86.1 82.4	80.6 70.6	69.4 73.5	52.8 58.8	69.4 73.5	58.3 70.6	33.3 44.1	69.4 55.9	77.8 76.5	72.2 76.5	77.8 79.4
M	校 { A B	58.7 40.0	43.5 48.9	82.6 86.7	69.6 73.3	67.4 77.8	52.2 37.8	69.6 75.6	39.1 37.8	54.3 64.4	76.1 82.2	71.7 71.1	87.0 82.2
M	校 { A B	24.4 23.1	46.3 35.9	68.3 82.1	58.5 56.4	58.5 69.2	48.8 51.3	31.7 30.8	39.0 48.7	43.9 51.3	65.9 61.5	56.1 46.2	70.7 74.4
T	校	20.0	53.3	80.0	60.0	86.7	66.7	80.0	33.3	60.0	86.7	100	80.0
M	校 { A B	30.0 33.3	50.0 52.4	75.0 73.8	70.0 76.2	75.0 64.3	70.0 73.8	75.0 73.8	60.0 50.0	65.0 52.4	85.0 73.8	77.5 81.0	80.0 73.8
N	校 { A B	2.6 13.2	55.3 63.2	78.9 65.8	71.1 57.9	71.1 76.3	34.2 60.5	50.0 60.5	21.1 15.8	50.0 47.4	60.5 60.5	57.9 76.3	47.4 63.2
計		26.0	48.3	77.1	68.8	74.2	54.9	63.8	49.7	45.1	58.8	71.8	66.8
2年集 調査結果		40.8	43.6		68.8 66.6								

問題4(教育漢字の書き)の正答率(続)

		54	55	56	57	58	59	
		述	妻	嚴	未	異	拡	
		語	(つま)	重	来	義	大	張
I	校 {A B}	41.5 42.9	41.5 59.5	24.4 26.2	70.7 69.0	36.6 35.7	75.6 76.2	63.4 71.4
B	校 {A B}	44.4 58.8	63.9 64.7	41.7 26.5	58.3 70.6	58.3 70.6	69.4 79.4	69.4 76.5
M	校 {A B}	47.8 46.7	41.3 51.1	30.4 42.2	78.3 73.3	78.3 73.3	87.0 84.4	82.6 80.0
M	校 {A B}	46.3 71.8	26.8 38.5	26.8 25.6	53.7 56.4	53.7 56.4	73.2 53.8	58.5 46.2
T	校	93.3	46.7	33.3	66.7	60.0	66.7	60.0
M	校 {A B}	72.5 57.1	57.5 52.4	52.5 57.1	62.5 78.6	62.5 78.6	90.0 90.5	85.0 83.3
N	校 {A B}	31.6 52.6	21.1 52.6	42.1 52.6	81.6 57.9	81.6 57.9	73.7 76.3	50.0 42.1
計		52.3	47.3	37.2	67.8	41.0	77.5	67.6
2年集合 調査結果						62.7	51.0	

で、依然として問題を残していることがわかる。

#### 教育漢字の書き

義務教育終了段階でその習得を要求されている教育漢字を書く力は、第6表でみられるように総体的には伸びているが、やはり、5、6年用漢字の中に、習得しにくいものがあり、完全習得にまでには至っていない。(調査対象がちがうが2年時の調査より低くなっているものもある。——災・称・異) また8人の事例調査結果で、習得が完了しなかった祝貯(5年用)補専穀嚴衆称敏複奮就難臨遣(6年用)などは、集合調査でも同様に正答率が低い。これらの文字は、小学校終了段階から書きにくい字であったが、中学3年を終え

る時に至っても、それがもち越されていることがわかる。

#### 教育外当用漢字の書き

現行の学習指導要領では、教育外当用漢字を書く力は要請されていないが、教育外当用漢字の中には、ある種の教育漢字よりかなり書けるものがある。(例 忙 73.6% 趣 74.4% 巡 75.5% 施 72.4%)しかした、教育外当用漢字の中に、姓名(36.2%) 本籍(35.4%) 拝啓(32.8%) 履歴書(11.5%) 謹賀新年(23.3%)のように、日常生活で、早晚書くことが予想され、また書けなくてはこまる文字がかえて書けていないという現象がみられた。これなどは、この種の文字を使う必要があっても、すでに印刷されていることが多く、手書きをする必要が少なくなっている、経験に乏しいという現実が影響しているようである。

#### 漢字や漢字学習に関する意識・意見など

漢字や漢字学習について生徒がどのように意識し、どのような意見を持っているかなど15項目についてたずねたところ(問題8)、種々な反応が得られたが、そのうち、次のような生徒の現実の文字生活や漢字学習の様相があることに注目される。

問い あなたは本や新聞などを読んでいて、読みかたのわからない漢字がありますか。

	I 校		B 校		M 校		M 校	
	A	B	A	B	A	B	A	B
イ よ く あ る	31.7%	19.0%	30.6%	23.5%	15.2%	8.9%	39.0%	35.9%
ロ と き ど き あ る	61.0	61.9	63.9	58.8	65.2	62.2	58.5	48.7
ハ あ ま り な い	4.9	16.7	2.8	14.7	17.4	26.7	0	10.3
ニ 気 が つ か な い	2.4	2.4	2.8	2.9	2.2	2.2	0	5.1
ホ な い	0	0	0	0	0	0	2.4	0

	T校	M校		N校		計
	A	A	B	A	B	
イ よくある	18.8%	27.5%	26.2%	39.5%	36.8%	27.1%
ロ ときどきある	81.8	62.5	54.8	60.5	63.2	60.8
ハ あまりない	0	7.5	16.7	2.6	2.6	10.2
ニ 気がつかない	0	2.5	2.4	0	0	2.0
ホ な い	0	0	0	0	0	0.2

問い 本や新聞などを読んでいて、よみかたがわからないときはどうしますか、次のどれにあたりますか。

	I校		B校		M校		M校	
	A	B	A	B	A	B	A	B
イ 人にたずねる	53.7%	50.0%	27.8%	41.2%	32.6%	57.8%	34.1%	28.2%
ロ 辞典などをひく	31.7	23.8	19.4	14.7	21.7	31.1	17.1	15.4
ハ 前後の文章の関係で なんとか読んでしま う	46.3	52.4	55.6	79.4	45.7	40.0	36.6	33.5
ニ 正しい読みがわから なくても、なんとなく 意味がわかるので、そ のまますぎる	36.6	47.6	36.1	29.4	19.6	26.7	26.3	30.8
ホ 読めない字はそのまま にしてとばし読みを する	22.0	9.5	2.8	29.4	2.2	2.2	7.3	5.1

	T校	M校		N校		計
	A	A	B	A	B	
	25.0%	27.5%	35.7%	15.8%	42.1%	37.1%
	18.8	30.0	28.6	18.4	10.5	22.1
	37.5	62.5	57.1	36.8	31.6	47.8
	18.8	22.5	28.6	18.4	10.5	27.5
	0	5.0	7.1	15.8	13.2	9.4

問い あなたは本などを読んでいて、わからない字が出てきたとき、気にするほうですか。

	I 校		B 校		M 校		M 校	
	A <sub>%</sub>	B <sub>%</sub>	A <sub>%</sub>	B <sub>%</sub>	A <sub>%</sub>	B <sub>%</sub>	A <sub>%</sub>	B <sub>%</sub>
イ とても気になる	19.5	31.0	22.2	14.7	21.7	35.8	19.5	15.4
ロ あまり気にしない	75.6	66.7	77.8	82.4	71.7	64.4	73.2	82.1
ハ すこしも気にならない	4.9	2.4	0	2.9	6.5	0	0	2.6
	T校	M 校		N 校		計		
	A <sub>%</sub>	A <sub>%</sub>	B <sub>%</sub>	A <sub>%</sub>	B <sub>%</sub>	計		
	18.8	35.0	45.2	28.9	23.7	26.1		
	75.0	60.0	54.8	60.5	68.4	69.7		
	6.3	5.0	0	10.5	5.3	3.4		

問い あなたは漢字をおぼえるのは、むずかしいと思いますか。

	I 校		B 校		M 校		M 校	
	A <sub>%</sub>	B <sub>%</sub>	A <sub>%</sub>	B <sub>%</sub>	A <sub>%</sub>	B <sub>%</sub>	A <sub>%</sub>	B <sub>%</sub>
イ むずかしい	39.0	16.7	36.1	32.4	30.4	22.2	53.7	64.1
ロ それほどでもない	56.1	71.4	58.3	64.7	63.0	71.1	41.5	33.3
ハ やさしい	2.4	9.5	2.8	2.9	4.3	2.2	2.4	0
	T校	M 校		N 校		計		
	A <sub>%</sub>	A <sub>%</sub>	B <sub>%</sub>	A <sub>%</sub>	B <sub>%</sub>	計		
	6.3	35.0	38.1	39.5	39.5	35.9		
	81.3	55.0	47.6	55.3	55.3	57.0		
	6.3	2.5	7.1	2.6	0	3.2		

漢字のよみでは

	I 校		B 校		M 校		M 校	
	A <sub>%</sub>	B <sub>%</sub>	A <sub>%</sub>	B <sub>%</sub>	A <sub>%</sub>	B <sub>%</sub>	A <sub>%</sub>	B <sub>%</sub>
イ むずかしい	14.6	11.9	13.9	14.7	17.4	15.6	22.0	38.5
ロ それほどでもない	73.2	69.0	75.0	70.6	67.4	48.9	63.4	56.4
ハ やさしい	9.8	16.7	11.1	14.7	8.7	33.3	14.6	5.1

T校	M校		N校		計
	A	B	A	B	
6.3	25.0	19.0	26.3	10.5	18.7
68.8	57.5	61.9	60.5	71.1	64.5
25.0	17.5	16.7	10.5	13.2	14.9

漢字のかきでは

	I校		B校		M校		M校	
	A	B	A	B	A	B	A	B
イむずかしい	58.5	23.6	52.8	47.1	52.2	31.1	68.3	79.5
口それほどでもない	39.0	59.5	41.7	47.1	34.8	60.0	29.3	20.5
ハやさしい	0	9.5	5.6	2.9	4.3	6.7	2.4	0

T校	M校		N校		計
	A	B	A	B	
50.0	67.5	50.0	52.6	50.0	52.8
43.8	25.0	35.7	42.1	44.7	40.2
6.3	7.5	9.5	2.6	0	4.4

問い あなたは漢字の学習がすきなほうですか。

	I校		B校		M校		M校	
	A	B	A	B	A	B	A	B
イすき	7.3	7.1	2.8	8.8	4.3	4.4	2.4	0
口すきなほう	9.8	28.6	13.9	26.5	17.4	28.9	19.5	15.4
ハあまりすきでない	68.3	61.9	72.2	44.1	52.2	53.3	63.4	64.1
ニきらい	14.6	2.4	11.1	20.6	26.1	13.3	14.6	20.5

T校	M校		N校		計
	A	B	A	B	
6.3	0	19.0	0	7.9	5.4
25.0	37.5	21.4	23.7	15.8	21.7
68.8	42.5	50.0	57.9	57.9	57.6
0	17.5	9.5	13.2	15.8	14.5

問い あなたは漢字の学習について、どのように考えますか。

	I 校		B 校		M 校		M 校	
	A %	B %	A %	B %	A %	B %	A %	B %
イ 漢字をよみかきでき ることは、国語の学 習の基礎になるから 大事だと思う	82.9	88.1	75.0	58.8	69.6	75.6	65.9	76.9
ロ 漢字のよみかきより も、国語の学習とし て、もっと大切なこ とがあると思う	12.2	11.9	13.9	35.3	10.9	13.3	17.1	17.9
ハ 漢字のよみかきよ り、英語や数学の学 習に力を入れたほう がよいと思う	0	0	0	2.9	6.5	2.2	2.4	2.6
	T校	M 校		N 校		計		
	A %	A %	B %	A %	B %	%		
	81.3	65.0	66.7	68.4	71.1	72.5		
	12.5	17.5	26.2	21.1	15.8	17.3		
	0	2.5	4.8	2.6	5.3	2.8		

本や新聞などを読んでいて、読みかたのわからない漢字が、「よくある」と「ときどきある」を加えると 87.9% というかなりの率で、あることがわかる。しかも、そうした場合、人にたずねたり、辞典をひいたりすることもあるが、前後の文章の関係でなんとか読んでしまう、正しい読みがわからなくても、なんとなく意味がわかるのでそのまま過ぎるということが多い。反応数では相半ばしているが、次の設問で、わからない字が出た時あまり気にしないという数のほうが多いことと合わせ考えると、現実には、後者の方が多いと思われる。本や新聞は、原則としては、当用漢字のワク内で表記するのがたてまえであるから、「読み方がわからない」と答えた字が、すべて表外字ではなく、もし表外字とすると、ルビをつけるのが原則であるから、これら読み方のわからない漢字というのは、当用漢字内でのものが相当部分を占めていると思われる。調査結果の習得不振のもの、音訓習得のアンバランス現象と現実の読みの生活との関係が示されている。現在では、当用漢字内の文字は一

応読めるものと見なして、読みに抵抗のあるものにもルビをつけない。したがって、学校で教科書に提出され、学習ずみのものは読めても、学習しなかった、あるいは習得しきれなかった訓なり音なりの読みかたを正しく新しく獲得していく場が限定されがちなところに、「このごろの大学生は漢字が読めない」というような漢字力低下のなげきも出てくるものと思われる。

そうした生徒の漢字力を形成する基盤になるものとして、漢字学習に対する興味・関心や意見をたずねた一連の質問に対しては、漢字をおぼえるのはそれほどむずかしくない(57.0%)、ことに読みではそうだ(64.5%)が、書きになると逆転して、むずかしくなる(52.8%)という反応は、漢字の読みに比べて書きがなかなか習得しにくい現実を、そのまま裏書きしている。したがって、漢字学習は、あまり好きでない(57.6%)、きらい(14.5%)ということになる。漢字学習についての意義はかなりの数のものが認め(72.5%)ていながら、漢字学習にはあまり興味もてない。このへんに、漢字指導の方法を開発する鍵が蔽されていると思われる。

#### D 今後の予定・見通し

以上は41年度に実施した調査の概観であるが、42年度は、3年間の調査(事例調査と集合調査、習得要因資料など)の結果を、くわしく整理分析し、あわせて漢字習得と関係の深い使用教科書の漢字提出状況をも調べ、その相互の関係をたしかめ、さらに、どのような指導が行なわれたか、教師の指導の実際も加えるなど、中学生の漢字習得について、いろいろな角度から研究考察を加え、別掲の「中学校の漢字学習指導の実態に関する調査」の結果も加えて、報告書「中学生の漢字習得の研究」を刊行する予定である。(声 沢)



## Ⅱ 中学校の漢字学習指導の実態に関する調査

### A 目的・意義

中学校国語科の学習指導の実態を知るための調査は、すでに当研究所でも、昭和38年度に実施しており、それなりの結果も報告されている（昭和38年度年報）。しかし、これは、漢字の学習指導という観点にしぼって調査が行なわれたわけではないので、この面ではまだわからないことが多い。また、国語教育研究の上で、漢字学習指導の領域が立ちおけているということが一般にいわれている。

そこで、中学校の漢字学習指導の実態を、広い規模で把握し、少しでも明らかにしておくことは、必要であり、その価値が大きいと判断される。

もちろん、実態調査をしたからといって、その結果からただちに漢字学習指導のあるべき姿がつかめるというものではない。実態調査の結果から引きだせるものにはおのずから限界があるだろう。この点も承知したうえで、われわれはこの調査を行なった。

この調査の対象を中学校教員に限定したのは、現在、国語教育研究室が「中学生の漢字習得」を中心的テーマとして研究を行なっていることとの関連による。

### B 方法・内容

実態調査の方法としては、いろいろ考えられるが、こんどのばあい、質問紙法によった。質問紙による調査は、結果として意見調査的性格を帯びやすいきらいがあるので、質問のしかた、選択肢のつくりかたなどで、なるべく指導の実態がつかめるものであるよう注意をはらった。意見を記入してもらう欄もいくつか設け、そこには意見がはっきり書けるようにした。調査票の

作成にあたって、とくに内容については、研究室員および所内の有志等の協力を得て数回の共同討議を行なった。

調査は全国的な規模で行なった。その中をさらに、

- ① 県内の全公立中学校(各学校1名ずつ)に回答を依頼する 地域(神奈川県・千葉・青森の3県)
- ② 教育委員会を通じて、県内から5～6名(東京は10名)ぐらいの推薦を願い、そこで推薦された人々に回答者となってもらう 地域(上記3県を除く全都道府県)

とにわけた。①は、悉皆調査に近い形でその地域の漢字学習指導の実態を把握することをねらいとした。そしてこの3県は、最近3か年(昭和39, 40, 41年度)における各都道府県の高校進学率の平均値を求め、これによって、上・中・下の3グループに分けた中から一つずつ選んだ。②は、全国的状況を把握することを主眼とし、どちらかといえば、国語科学習指導に熱心な方々の漢字学習指導の実態を知ることがねらった。推薦依頼の時に、あらかじめ、そのような意味をこめた依頼をしておいた。

調査には大別してつぎのような内容項目をふくめた。

- I. 学校の環境と国語科学習指導
- II. 漢字学習指導の方法
- III. 漢字学習指導の内容
- IV. その他の指導
- V. 漢字学習指導に対するあなたのご意見

調査票への記入については、学校の代表としてではなく、国語科教員のひとりという立場で回答を寄せてもらうようにした。調査票は全部、同一形式、同一内容のものを用いた。内容の全部をつぎに示しておく。

## 中学校の漢字学習指導の実態に関する質問紙調査(調査票)

昭和41年12月 国立国語研究所国語教育研究室

ま え が き

- a この調査は、学校の代表としてではなく、国語科教員のひとりという立場でお答えください。
- b この調査は、内容を事実と意見とに分けると、どちらかといえば、事実を主にした調査です。ご意見を記入していただくために設けた欄以外のところは、「こうしてきた」「こうしている」「こうなっている」というような事実について、だいたい今年度になってからのことを中心にご記入願います。
- c 項目によって、先生おひとりについての事項と、学校全体に関する事項とがあります。
- d 答えかたは、だいたい、該当する項目を○でかこみ(質問によっては、該当する項目が二つ以上になることがあります)、さらに、たりないと思われることがあったら、それぞれ適宜書きこんでいただくようになっています。

### I 学校の環境と国語科学習指導

a あなたの現在の学校の地域環境

- |          |          |        |
|----------|----------|--------|
| 1 住宅市街   | 2 商業市街   | 3 工業市街 |
| 4 鉱業市街   | 5 その他の市街 | 6 小都市  |
| 7 都市近郊農村 | 8 普通農村   | 9 農山村  |
| 10 農漁村   | 11 漁村    | 12 鉱山  |
| 13 山村    | 14 その他   |        |

(二つにまたがっている場合は、その両方をかこむ)

b あなたの現在の学校の全学級数 学級

c あなたの現在の学校の国語科教員数 1 専任者 名, 2 兼任者 名

d あなたの現在の学校の毛筆習字は

- |                |                  |
|----------------|------------------|
| 1 国語科教員全員で指導   | 2 国語科教員のうちの一部で指導 |
| 3 国語科以外の教員が指導  | 4 特別の非常勤講師を依頼    |
| 5 校長または校務主任が指導 |                  |

e あなた自身の現在の国語科のうけもち

1年生	学級	名	}	総時間数	1週	時間
2年生	学級	名				
3年生	学級	名				

f あなた自身の現在の、その他(e以外)の校務分掌

( )

## II 漢字学習指導の方法

a 教科書による、ふつうの国語の授業における漢字学習指導の過程

教科書による、ふつうの国語の授業における漢字学習指導の過程の例として、つぎのようなものを考えました。あなたのぼあい、実際にはこれがどうなっているでしょうか。例にならってお書きください。

- (例)
- ① 教科書よみをとおしての正確な音声化(A)
  - ② 文章中での文脈的理解 (B)
  - ③ 摘出しての語句単位での理解 (C)
  - ④ 分解による文字単位での理解 (D)
  - ⑤ 応用的、発展的理解と練習 (E)
  - ⑥ 練習による態度変化 (F)

(記入欄) 1

左の例をごらんになって、あなたのぼあいは、つぎのどれでしょうか。  
 イ 内容・順序とも例と同じ。  
 ロ 内容はほぼ同じになるが順序があがう。このぼあいは、A、B…の記号でその順序を下におかきください。  
 ( )  
 ハ 例とは違った指導過程をとっている。このぼあいは(記入欄)2におかきください。

(記入欄) 2

- ① ( )
- ② ( )
- ③ ( )
- ④ ( )
- ⑤ ( )
- ⑥ ( )
- ( )

b 教科書以外の漢字のとりたて指導

1 教科書の読解の場合に指導する以外に、つぎのような指導をしているでしょうか。

イ 主として教科書で習ったものの練習学習

(i) その教材なり，単元なりが終ったところでの練習学習

(ii) 1週間に何回かの特別の時間をきめての練習学習

(iii) あるときまとめて(期末，その他)の練習学習

ロ 教科書と関係のない，ワーク・ブック，テスト・ブックなどを使つての練習学習

(i) している

(ii) していない

ハ 自分でくみだしたり，あるいは，何かの参考書を利用して作つたりの，漢字についての知識や技能を増すための特別なレッスン

(i) している

(ii) していない

2 テ ス ト

イ 漢字のテストはどのような時機に行なっているでしょうか。

(i) 毎週行なっている (ii) 小単元が終ったところで行なっている。

(iii) 単元の終ったところで行なっている。

(iv) その他( )

ロ テストに出す漢字のソース

(i) 教科書に提出されている漢字の中から (ii) 教科書以外の教材の中から

(iii) 当用漢字の中から (iv) 当用漢字以外の漢字からも

(v) その他( )

ハ 答案に略字・旧字体の漢字が出てきたばあいの処理はどうしていますか。

(i) 略字( ) (ii) 旧字体( )

Ⅲ 漢字学習指導の内容

a 熟語の指導のばあい，その語を構成している漢字の1字1字の意味を指導しているでしょうか。

1 1字1字の意味の指導が，その語の理解に必要と判断したとき指導している。

- 2 語としては指導しているが、1字1字の意味にはふれない。
  - 3 その熟語が音よみの熟語で、1字1字の意味の指導がその語の理解に必要と判断したときに指導している。
  - 4 指導するかしないかは、その時の事情による。
  - 5 その他( )
- b 当用漢字の指導で、音訓表に示された以外のよみにふれることがあるでしょうか。
- 1 ふれたことがある。
 

あるとすれば、それは、どんな漢字のばあいでしたか。できれば、それらの漢字をいくつかお示してください。( )

また、その理由としては、どんなことが考えられるでしょうか。

( )
  - 2 ふれたことがあるように思う。
  - 3 ふれたことはない。
- c 教科書による授業の中で、取り出して指導している漢字はどれでしょうか。
- 1 新出漢字の全部
  - 2 新出漢字のうち、生徒にとって抵抗が大きいと思われるもの。
  - 3 既習漢字のうち、習得率の低いもの。
  - 4 その他( )
- d 上記cの指導のばあい、音訓についてはどうなっているでしょうか。
- 1 教科書の文脈でのよみだけを指導している。
  - 2 教科書の文脈でのよみが音だけであるばあい、なるべくその漢字の訓(それがあれば)も指導するようにしている。
  - 3 教科書の文脈でのよみが訓だけのばあい、なるべくその漢字の音(それがあれば)も指導するようにしている。
  - 4 教科書の文脈でのよみが訓であれば、音にふれることはほとんどない。
  - 5 その他( )
- e 筆順について、なにか指導しなければならないようなことがあったでしょうか。
- 1 あった。

あったとすれば、それは筆順のどろいう点についてでしょうか。なるべく具体的にお示しください。( )

2 なかった。

f 作文の中で漢字を指導しているでしょうか。

1 事後処理として、誤字、誤用等の漢字を訂正して返している。

( i かならず ii だいたい iii その時の事情による )

2 知っている漢字は、なるべく多く使って書くように指導している。

3 漢字を使うときは、たしかに知っている字を使うように指導している。

4 書くときに辞書を使わせて、自信のない字は確かめてから書くように指導している。

5 書く意欲をそぐので、作文での漢字指導はなるべくしないことにしている。

6 その他( )

g ふだん、漢字を正しく書くよう、その態度化について、どんな指導をしていますか。

1 書くときには正しい漢字を書くよう心掛けさせている。

2 字画をきちんと書くよう指導している。

3 漢和辞典、国語辞典等をおっくうがらずにひいてみる習慣をつけるように指導している。

4 自信のない字は、知っている人に聞くなり、辞書でひくなり、なるべく確かめてから書くように指導している。

5 ノート検査によって、正しく書くことの態度化をはかっている。

6 その他( )

h 部首の知識を利用した漢字の指導をなさっているでしょうか。

1 した。 2 しなかった。

i 部首についてなにか指導をなさったでしょうか。

1 まとめては行っていないが、必要に応じてふれてきた。

2 漢和辞典を利用して指導してきた。

3 生徒の自発学習にまかせてきた。

4 その他( )





た。

ニ その他( )

2 漢和辞典を利用した授業をなさっているでしょうか。

イ してきた, そのばあいどんなふうに利用されましたか。

( )

ロ してこなかった。

ハ その他( )

3 漢和辞典を生徒にどのように使わせていますか。

イ 授業中自由に使わせている。

ロ 休み時間や放課後等に使わせている。

ハ 家で予習, 復習のときに使わせている。

ニ その他( )

b 副教科書・ワークブック

1 漢字学習中心の副教科書・ワークブック等を使わせていますか。

イ 使わせている                      ロ 使わせていない

2 漢字学習をふくむ副教科書・ワークブック等を使わせていますか。

イ 使わせている                      ロ 使わせていない

c 家庭学習

1 漢字学習を宿題として家でやらせていますか。

イ やらせている(月に 回ぐらい)      ロ やらせていない

2 やらせているばあい, それは主として漢字学習のどのようなことについてですか。

イ 書きの練習                      ロ 難語句のよみや意味を調べる一環として

ハ その他( )

3 特別に行なっている 漢字の学習指導 漢字の学習指導上, なにか特別に行なっていることがあるでしょうか。ありましたら, それをお書きください。

イ 先生個人として

( )

ロ 学校, または地域として

( )

V 漢字学習指導に対するあなたのご意見

a 中学校卒業までに身につけさせたい漢字力は?

1 別表外当用漢字(969字)について

イ よみ, かきとも完全に身につけさせたい。

ロ よみだけは完全に身につけさせたい。

ハ その他( )

2 当用漢字外の漢字について

イ ルビつきで出してあればよい, とくに指導する必要はない。

ロ 必要のある漢字については指導しなければならない。(だいたい 字ぐらい)

ハ その他( )

b 漢字学習指導のあるべき姿について, あなたはどうお考えでしょうか。400字以内ぐらいでお書きください。

{ }

c 漢字学習指導の観点から, 小学校に要望したいことがありましたら, かんたんに書きください。

( )

◎ 回答者の氏名・所属など(1, 2, 5については, さしつかえなかったらお書きください)

1 氏名 \_\_\_\_\_ 2 年齢 \_\_\_\_\_

3 学校名 県 市 郡 \_\_\_\_\_ 中学校

4 教職経験年数 \_\_\_\_\_ 年 (うち中学校 \_\_\_\_\_ 年)

5 何かの研究団体に所属しているばあい, その所属団体名

( )

## C 実施・回収状況

調査は、各都道府県教育委員会の協力を得て実施した。県によっては、県段階の国語教育研究団体の協力をも得た。

調査票は、神奈川・千葉・青森の3県については、各中学校長あてに送付し、その学校の校長および国語主任のかたから回答者をえらんで手渡ししていただいた。他の地域については、教育委員会から推薦をいただいた回答依頼者に直接送付した。

調査は、それぞれ、つぎに示すような時期に実施した。

神奈川 県 昭和41年12月

千葉 県 昭和42年1月

青森 県 昭和42年2月

その他の地域 昭和42年2月から3月にかけて

記入された調査票の回収は、神奈川、千葉、青森、その他の地域の順で進められ、41年12月末から42年3月末までに完了した。配布部数、回収結果等はつぎに示すとおりである。

	配布部数	回収部数	回収率
神奈川 県	225	118	52.4%
千葉 県	267	131	49.1%
青森 県	307	188	61.2%
その他の地域	237	200	84.4%
※テスト実施校	6	6	100%
合 計	1,042	642	61.6%

※「テスト実施校」としてあるのは、研究室が生徒について行なった漢字の特別調査の実施校（大阪府箕面市立第一中学校・同第二中学校・同止止呂美中学校、名古屋市立前津中学校・同南陽中学校、東京都立文海中学校）の先生に特に回答を依頼したもの。

なお、その他の地域とした各都道府県に該当するものの県名、回答者数はつぎのとおりである。

北海道	4	秋田	5	岩手	1
山形	6	宮城	6	福島	6
栃木	6	茨城	4	群馬	5
東京	9	新潟	5	富山	4
福井	5	石川	4	長野	5
山梨	5	静岡	6	岐阜	6
愛知	5	滋賀	3	京都	5
大阪	3	奈良	5	和歌山	5
三重	6	岡山	5	兵庫	6
鳥取	5	広島	6	山口	6
高知	3	香川	5	愛媛	6
福岡	5	長崎	4	佐賀	5
大分	5	熊本	5	宮崎	6
鹿児島	3				

この調査を行なうにあたって、つぎのかたがたには、種々の面で格別のご協力お力添えをたまわった。ここに記して深く謝意を表したい。

須藤久幸(神奈川県指導主事)，大山正幸(神奈川県中学校国語教育研究会長)，伊藤英雄(千葉県教育委員会指導課長)，戸川昂(千葉県指導主事)，寒川英希(文部省特殊教育課長)，飯塚正八(青森県教育委員会指導課長)，岩淵寛二(青森県指導主事)，鈴木康之(東京成徳短期大学)，田島均(富山県礪波市立太田小学校一当時，富山県派遣内地留学生)

#### D 結果の処理，今後の見とおし

この種の調査は，簡単にたびたび実施することはむずかしい。それだけに，回収されたものについては，細部に至るまでいねいに整理し，分析を加えていきたいと思っている。

結果の処理は，42年2月から開始した。まず，回答者に意見を書きこんでいただいた部分をカードに写しとる作業からはじめた。これについては，

3月末までに、神奈川、千葉の全部と青森の大部分を完了した。また、選択肢によって回答を求めた項目については、神奈川、千葉の両県分について集計表への記入をほとんど完了した。

現在、上記以外の残された部分についての整理集計作業を進めつつある。6月中には一応の素集計を完了し、7月中にはそれらの結果をまとめて中間報告ができる予定である。そして、今年12月末までにこの調査についての最終的なまとめができるように仕事を進めていくつもりである。

(根 本)

# 幼児の言語発達に関する準備的研究

## A 研究の経過

標記の題目に関する研究は昨年度よりはじまる。昨年度は「従来の言語発達研究の展望」「言語・文字の記録資料の収集・整理」を主にして研究作業をすすめたが、本年度はそれらの作業を継続して、「言語発達文献 展望・リスト」のレポートにまとめるほか、あらたに「言語発達に関する課題調査」を行なうことになった。すなわち、本年度は次のふたつを主な研究内容とした。

- 1 言語発達文献 展望・リストの作成
- 2 言語発達に関する課題調査

昨年度、われわれは言語発達研究に関する共同討議から、多面的な言語発達の研究領域を整理し、問題解決のための長期的研究ステップと方法論に関する問題点を明らかにすることができた。そして当面の段階として、言語能力の構造的側面の発達を研究することにしたが、そのためには、いくつかの小規模な課題調査が先行されなければならない、そのいずれかは将来、本格的な調査に発展されるであろうから、課題調査はその準備調査としての役割を果たすであろうと判断した。本年度はそのような意味での、幼児の言語発達に関する準備的研究を行なうことにした。

## B 担当者と実験・協力園

国語教育研究室の村石昭三、天野清の2名が研究調査にあたり、福田昭子がこの作業を助けた。なお、実験・協力園として、次の3園に各課題に関する調査を委嘱した。

実験園 東京 北区立王子保育園(園長 星野清子) 課題 語音知覚の発達

協力園 川口 川口市立舟戸幼稚園(園長 島田節子) 課題 文字力

## (読)の発達

川 口 川口南幼稚園(園長 新井久子) 課題 文字力(書)の発達

横 浜 東寺尾幼稚園(園長 亀井和子) 課題 助数詞の発達  
課題調査の計画立案, 実施, 集計には研究所員があたった。

## C 実 施 概 要

### 1 言語発達文献——展望・リスト——の作成

昭和42年3月「言語発達文献 展望・リスト」A4.149ページのレポート(タイプ印刷)をまとめた。これは昭和40年度からすすめてきた幼児の言語発達に関する準備的研究のうち, 幼児に関する, 従来の言語発達研究の展望, 言語・文字の記録資料の収集・整理を通して, 将来の課題調査の方法論を確立する資料をえようとしたものであり, 研究物資料貸与者, 言語発達研究者に内容の検討を願うために中間報告としてまとめたものである。その内容は,

- 1 保育現場における言語研究(執筆者 村石)
- 2 最近の言語発達研究(執筆者 天野)

からなる。1には, 言語研究物350点, 言語録音資料109点, 文字資料31種が含まれ, 2には, 国内文献85点, 米国の博士論文56点, 外国雑誌論文121点が含まれている。

### 2 言語発達に関する課題調査

#### 〔課題1〕 語音知覚の発達

観 点: 平がな文字の有効な学習プログラムをつくりだす準備として, 幼児の語音知覚能力, 特に, 語の音構造を分析する能力の発達をさぐる。

調 査 語: 直単音のみの音節からなる語(トラ・ラクダ etc)10語を拗長・捉・撥音等の特殊な音節を含む21語。

被 調 査 者: 3. 4. 5歳児各20名 計60名

調 査 方 法: エリコニンの方法を検討し, それを日本語の特性にそって部分的に修正した白色ランプ点滅実験装置をつくり, その装置によって語を音

節に分解させる一定のトレーニングを行ない、後各語についてテストを行なった。

結果：語を音節に分解する能力は文字を学習する以前より一定の発達が見られ、特に4歳の後期になると幼児は直音で短音のみの音節からなる語を、ほとんど100%正しく音節に分けることができること、分析能力の発達は長音節単位から短音節単位に進むこと等が明らかになった。なお、本課題調査の計画立案・実施は主として天野清によって行なわれた。実験結果の詳細は次の論文によって報告されている。天野清「就学前児童の語の音構造の分析能力」(ことばの研究-国立国語研究所論文集3, 1967)

#### 〔課題2〕 文字力(読)の発達

観点：5歳児段階における文字(語・文を含む)を読む能力の発達をさぐる。

調査時期：第1回 昭和41年5月，第2回 昭和41年7月，第3回 昭和41年9月，第4回 昭和41年11月，第5回 昭和42年1月，第6回 昭和42年3月，年間6回の調査。

調査文字：平かな清音+「ん」，簡単な語句ならびに短文—「入門期の言語能力」(国立国語研究所報告7)による。

被調査者：5歳児2年保育 30名(男15，女15)  
5歳児1年保育 30名(男15，女15)  
4歳児2年保育 30名(男15，女15)  
5歳児4歳児ともに無作為抽出。

調査方法：年間6回の各時期とも，同一幼児，同一条件による追跡調査。  
なお，最終回にはコントロール群の調査も行なった。

#### 1 文 字

・個別テスト ・各文字を短冊に4字(たとえば，も，こ，ま，め)ずつ12枚におさめ，1字ずつ読ませる。

#### 2 語 句・短 文

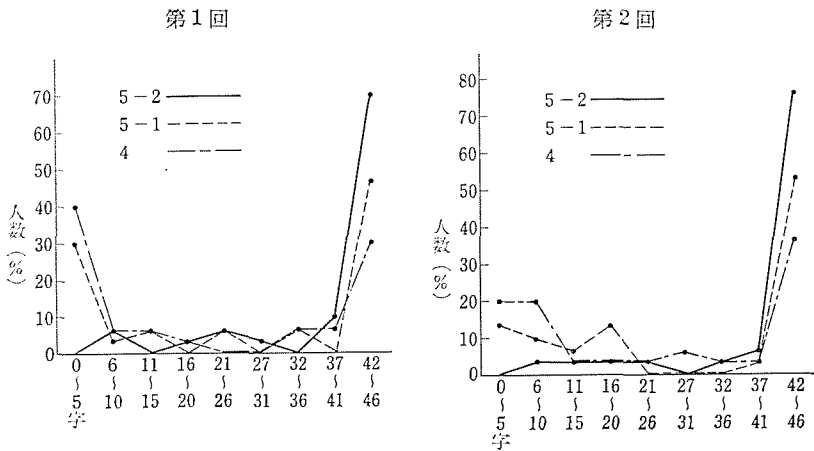
・個別テスト ・音読をさせ，それを録音する。



結果：文字調査のなかの、第1回目(5月)、第2回目(7月)の素集計のいくつかを図表によって示す。

- 1 年令別読字数分布 グラフ中、5-2は5歳児2年保育、5-1は5歳児1年保育、4は4歳児を示す(以下、これに準ずる)。年令が進むにつれ読字数分布の型がU字型からJ字型に変わっている。
- 2 誤読一覧表 表中の数字で、たとえば「が2」とあるのは、「か」を「が」と読み誤ったものが2名あったことを示す。数字が記入してないのはひとりだけの誤りである。誤読には字形の類似(たとえば、ぬーめ、ぬーね)や音の類似(たとえば、いーき、てーえ)による誤りがみられる。
- 3 各文字別読字率 表中の数字は正しく読めたものの割合(%)を示す。

1 年令別読字数分布



2 誤読一覧表

(第 1 回)

	5-2	5-1	4
あ		つ	のかわ
い		きこ	こ
う			
え	き		
お			みき
か		が <sup>2</sup>	
き		ひき	ぎま
く		かじ	
け	なは	い <sup>2</sup> りし	ぎいた
こ	き		ぎ <sup>2</sup>
さ	つ	じよ	おる
し			ら
す			
せ		ほつたこ	
そ	ぶ		
た			
ち	き <sup>2</sup>	ろし	こい
つ		へえ	の
と			
な		た <sup>2</sup>	
に		た <sup>2</sup>	
ぬ	め <sup>2</sup> ね <sup>3</sup> む	ねら	めね <sup>3</sup>
ね	ぬ	きぬ	
の			
は	ほ		み
ひ			いき
ふ	くむ	む	く
へ		は <sup>3</sup> な	ほつ
ほ	おほ	うし	ねみ
ま			
み	やゆ		
む	ぬ	らぬ <sup>2</sup> こ	の
め		こ	おなき
も			
や		らめちう	
ゆ		う	つみ
よ			と
ら	わ		
り	み	いこ	
る		らろ	
れ			
ろ	る	ら	らる <sup>2</sup>
わ	れぬ		は
を	うか	み	もそ
ん			

(第 2 回)

	5-2	5-1	4
あ		かお	けめき
い		えこゆ	
う		おほ	
え	じ	い	
お			みれ
か		やがべ	し
き			ち
く			
け	せ	ひ	
こ	と	お	まい
さ	き		き <sup>3</sup>
し			ち <sup>3</sup>
す		つ	ち
せ			ち
そ	ふ	お <sup>2</sup>	
た		わ	
ち	き		き
つ		しと	
と			せ
な		えど	
に			み
ぬ	ね <sup>3</sup>	ね <sup>4</sup>	めね
ね	る	ぬわ <sup>2</sup>	かぬめの
の		ち	
は		わ <sup>2</sup> よ	
ひ		す	
ふ		つぶ	き
へ	え	せく	あしく <sup>2</sup>
ほ	ふほ	ほは	は <sup>4</sup>
ま			よ <sup>2</sup>
み			
む			
め	え	む	ね
も			きと
や		え	す
ゆ			て
よ			
ら		ち	る
り	み		ま
る		ら	ら
れ		わは	か
ろ	る <sup>2</sup> れ	う	る <sup>2</sup> ひ
わ	れぬ		れ <sup>2</sup> でね
を		か	
ん			

3 各文字別読字率 (%)

回数	年齢	あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	し	す	せ	そ	た	ち	つ	て	と	な	に	ぬ	ね
第1回	5—2	86.7	90.0	90.0	83.3	90.0	100	86.7	90.0	90.0	86.7	86.7	90.0	90.0	90.0	83.3	90.0	80.0	96.7	86.7	93.3	80.0	80.0	50.0	86.7
	5—1	60.0	60.0	66.7	60.0	60.0	63.3	66.7	60.0	56.7	60.0	60.0	70.0	70.0	56.7	46.7	56.7	56.7	63.3	53.3	60.0	50.0	50.0	46.7	50.0
	4	43.3	53.3	53.3	50.0	46.7	56.7	56.7	50.0	50.0	46.7	40.0	40.0	50.0	46.7	40.0	36.7	50.0	43.3	56.7	46.7	50.0	43.3	43.3	23.3
第2回	5—2	90.0	90.0	93.3	86.7	90.0	100	93.3	90.0	86.7	93.3	86.7	96.7	93.3	93.3	86.7	93.3	90.0	96.7	86.7	100	86.7	83.3	60.0	80.0
	5—1	73.3	66.7	70.0	70.0	70.0	63.3	76.7	66.7	60.0	73.3	66.7	76.7	76.7	63.3	53.3	66.7	70.0	66.7	63.3	63.3	63.3	60.0	46.7	56.7
	4	53.3	60.0	63.3	53.3	56.7	63.3	60.0	56.7	53.3	56.7	50.0	63.3	56.7	50.0	43.3	60.0	60.0	63.3	50.0	60.0	50.0	53.3	40.0	43.3
回数	年齢	の	は	ひ	ふ	へ	ほ	ま	み	む	め	も	や	ゆ	よ	り	る	れ	ろ	わ	を	ん			
第1回	5—2	96.7	76.7	93.3	73.3	76.7	56.7	93.3	86.7	80.0	86.7	80.0	90.0	86.7	93.3	80.0	90.0	93.3	76.7	83.3	73.3	73.3	73.3	93.3	
	5—1	66.7	60.0	66.7	53.3	56.7	46.7	63.3	63.3	56.7	53.3	56.7	63.3	53.3	63.3	60.0	60.0	56.7	50.0	60.0	53.3	50.0	53.3		
	4	66.7	46.7	50.0	43.3	36.7	23.3	53.3	60.0	40.0	43.3	43.3	50.0	46.7	50.0	46.7	50.0	46.7	40.0	36.7	40.0	26.7	43.3		
第2回	5—2	96.7	86.7	93.3	86.7	83.3	80.0	96.7	93.3	86.7	90.0	86.7	96.7	93.3	93.3	90.0	93.3	90.0	83.3	83.3	80.0	86.7	96.7		
	5—1	76.7	53.3	76.7	63.3	63.3	46.7	73.3	70.0	53.3	60.0	60.0	70.0	63.3	70.0	63.3	70.0	63.3	53.3	60.0	63.3	53.3	60.0		
	4	66.7	53.3	66.7	50.0	43.3	33.3	56.7	73.3	43.3	43.3	53.3	60.0	66.7	53.3	50.0	60.0	53.3	46.7	40.0	50.0	36.7	56.7		

〔課題3〕 文字力(書)の発達

観 点：5歳児段階における文字を書く能力(字形・筆順を含む)の発達をさぐる。

調査時期：第1回 昭和41年6月，第2回 昭和41年10月，第3回 昭和42年2月

調査文字：平がな清音+「ん」。2日間に分けて実施。

被調査者：5歳児(2年保育)。視写，聴写のグループ分けは無作為。

- 1 視写 26名(男17，女9)
- 2 聴写 28名(男15，女13)
- 3 筆順 視写，聴写各グループより10名ずつ 計20名

調査方法：

- 1 視写 ・集団テスト 作業制限法 ・記入用紙には視写すべき文字(たとえば「あ」)が書いてあり，この字と同じ字を書きましょう，という指示を与え，クレヨンで書かせる。
- 3 聴写 ・集団テスト 作業制限法 ・記入用紙の片面には，たとえば「蛙」の絵が書いてあり，「蛙」の「か」という字を書きましょう，という指示を与え，クレヨンで書かせる。
- 3 筆順 ・集団テスト 作業制限法 ・視写，聴写テスト中に観察者が1対1で特定幼児の筆順を記録。

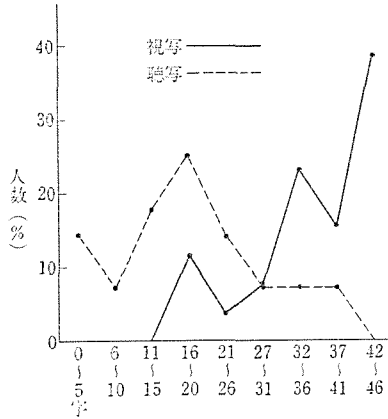
結 果：第1回目調査(6月)の結果資料を中心にあげ，必要に応じて第2回調査(10月)の結果資料も参考程度にあげる。

- 1 視写，聴写別書字数分布 聴写による書字テストがふつうにいわれる書字力テストに相当する。聴写の書字数分布で16字～20字のところに平均的なまとまりがみられる。0字～5字にある1割程度の幼児が書いた文字は自分の名前程度のものである。
- 2 誤字類型一覧表 視写の場合，線の断絶が多く，無答，鏡映文字もある。聴写の場合は無答と鏡映文字が多い。
- 3 各文字別書字率(%) 相対的に視写と聴写とで難易度が異なるのが

ある。「ほ」、「む」、「を」など。

4 筆順一覧表 表中、上欄の筆順は一応の基準を示した。○は正しい字形で筆順も上欄の筆順基準に合ったもの。×は無答。筆順の記入法は紙に筆をつけて書きだすごとにその順序を番号で記し、紙から筆を離した箇所ごとに「>」印をつけ、その運動の方向を示した。筆順には特定文字および個人の特定規則による型がみられる。

1 視写・聴写別書字数分布



2 誤字類型一覧表

				視	写	聴	写
他	の	文	字		0.6%		3.6%
無			答		7.3		69.6
不			明		4.1		0.7
鏡			映		1.3		8.0
部	分	鏡	映		3.2		1.6
反			映		1.9		0.7
横			転		0.9		0.2
画	の	追	転		8.5		1.9
画	の	省	加		8.5		2.1
線	の	延	略		3.8		2.2
線	の	不	足		8.9		2.2
線	の	断	絶		23.2		1.2
円	の	追	加		3.5		0.8
円	の	不	足		1.6		0.4
点	線	の	配		16.1		3.8
そ		置	の		6.6		1.0
		の	不				
			整				
			他				

3 各文字別書字率(%) (第1回)

	視 写	聴 写
あ	53.8	32.1
い	92.3	75.0
う	92.3	64.3
え	57.7	25.0
お	80.8	57.1
か	92.3	75.0
き	88.5	50.0
く	76.9	39.3
け	96.2	28.6
こ	96.2	64.3
さ	84.6	42.9
し	96.2	64.3
す	76.9	46.4
せ	92.3	14.3
そ	76.9	10.7
た	92.3	53.6
ち	84.6	39.3
つ	92.3	57.1
て	92.3	50.0
と	88.5	35.7
な	50.0	14.3
に	92.3	39.3
ぬ	65.4	17.9

	視 写	聴 写
ね	53.8	17.9
の	84.6	60.7
は	83.5	32.1
ひ	84.6	78.6
ふ	61.5	14.3
へ	84.6	25.0
ほ	69.2	7.1
ま	92.3	75.0
み	76.9	46.4
む	57.7	3.6
め	61.5	14.3
も	92.3	35.7
や	69.2	35.7
ゆ	73.1	14.3
よ	88.5	46.4
ら	53.8	32.1
り	84.6	67.9
る	84.6	42.9
れ	46.2	21.4
ろ	92.3	50.0
わ	61.5	35.7
を	61.5	0
ん	73.1	46.4

## (第2回)

	視 写	聴 写
あ	64.3	29.6
い	96.4	85.4
う	100	70.4
え	46.4	51.6
お	78.6	74.1
か	92.9	85.2
き	75.0	59.3
く	75.0	40.7
け	78.6	33.3
こ	96.4	66.7
さ	85.7	48.1
し	89.3	63.0
す	82.1	77.8
せ	92.9	55.6
そ	82.1	25.9
た	78.6	74.1
ち	85.7	63.0
つ	96.4	66.7
て	82.1	59.3
と	85.7	48.1
な	57.1	37.0
に	82.1	66.7
ぬ	75.0	22.2

	視 写	聴 写
ね	71.4	33.3
の	92.9	66.7
は	92.9	51.6
ひ	78.6	70.4
ふ	46.4	29.6
へ	85.7	29.6
ほ	64.3	14.8
ま	89.3	74.1
み	82.1	63.0
む	53.6	33.3
め	75.0	29.6
も	92.9	81.5
や	82.1	51.6
ゆ	67.9	37.0
よ	82.1	44.4
ら	67.9	59.3
り	89.3	66.7
る	92.9	59.3
れ	42.9	29.6
ろ	78.6	63.0
わ	75.0	48.1
を	64.3	18.5
ん	53.6	59.3

(第一回テスト) 4 筆順一覽表 (1) 視 写

文字 筆順	あ	い	え	お	か	き	く	け	こ	さ	し	す	せ	そ	た	正順	誤順	無答
幼児	あ	い	え	お	か	き	く	け	こ	さ	し	す	せ	そ	た	12	4	0
1	○	○	え	○	○	○	く	け	○	○	○	○	せ	○	○	12	4	0
2	○	○	え	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	15	1	0
3	○	○	○	○	○	き	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10	5	1
4	あ	○	え	○	か	○	く	け	○	○	○	○	○	○	○	5	11	0
5	あ	○	え	○	か	○	く	○	○	○	し	○	○	○	○	14	2	0
6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	15	1	0
7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	8	8	0
8	あ	○	○	○	○	き	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12	4	0
9	○	○	○	○	○	き	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5	3	8
10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	108		
正順	6	10	7	4	6	6	6	7	8	5	8	8	5	7	6			
誤順	3	0	3	1	3	4	3	2	2	5	1	1	4	2	4		43	
無答	1	0	1	0	1	0	1	1	0	0	1	1	1	1	0			9



	ち	つ	て	七	な	に	ぬ	ね	の	は	ひ	ふ	へ	ほ	ほ	み	正順	誤順	無答
1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9	7	0
2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12	4	0
3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9	7	0
4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9	7	0
5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4	12	0
6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	13	3	0
7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	15	1	0
8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5	11	0
9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12	4	0
10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5	4	7
正順	8	9	10	6	4	6	5	5	7	2	7	2	9	2	7	4	93		
誤順	2	1	0	4	5	4	5	4	3	8	2	7	0	7	3	5		60	
無答	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	1	1	1	0	1			7

	む <sub>2</sub> <sup>3</sup>	ぬ <sub>2</sub>	ぬ <sub>2</sub> <sup>3</sup>	ゆ <sub>2</sub>	よ <sub>2</sub>	ら <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	れ <sub>2</sub>	ろ <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	ん	正順	誤順	無答	総計		
															正順	誤順	無答
1	○	○	ぬ <sub>2</sub> <sup>3</sup>	ゆ <sub>2</sub> <sup>3</sup>	よ <sub>2</sub> <sup>3</sup>	ら <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	れ <sub>2</sub>	ろ <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	ん	10	4	0	31	15	0
2	○	○	ぬ <sub>2</sub>	ゆ <sub>2</sub>	よ <sub>2</sub>	ら <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	れ <sub>2</sub>	ろ <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	ん	11	3	0	35	11	0
3	ぬ <sub>2</sub> <sup>3</sup>	○	ぬ <sub>2</sub>	ゆ <sub>2</sub>	よ <sub>2</sub>	ら <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	れ <sub>2</sub>	ろ <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	ん	12	2	0	36	10	0
4	ぬ <sub>2</sub> <sup>3</sup>	ぬ <sub>2</sub>	ぬ <sub>2</sub> <sup>3</sup>	ゆ <sub>2</sub>	よ <sub>2</sub>	ら <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	れ <sub>2</sub>	ろ <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	ん	6	8	0	25	20	1
5	ぬ <sub>2</sub> <sup>3</sup>	ぬ <sub>2</sub>	ぬ <sub>2</sub> <sup>3</sup>	ゆ <sub>2</sub>	よ <sub>2</sub>	ら <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	れ <sub>2</sub>	ろ <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	ん	5	9	0	14	32	0
6	ぬ <sub>2</sub> <sup>3</sup>	ぬ <sub>2</sub>	ぬ <sub>2</sub> <sup>3</sup>	ゆ <sub>2</sub>	よ <sub>2</sub>	ら <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	れ <sub>2</sub>	ろ <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	ん	3	11	0	30	16	0
7	○	○	ぬ <sub>2</sub>	ゆ <sub>2</sub>	よ <sub>2</sub>	ら <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	れ <sub>2</sub>	ろ <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	ん	10	4	0	40	6	0
8	ぬ <sub>2</sub> <sup>3</sup>	ぬ <sub>2</sub>	ぬ <sub>2</sub> <sup>3</sup>	ゆ <sub>2</sub>	よ <sub>2</sub>	ら <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	れ <sub>2</sub>	ろ <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	ん	5	9	0	18	28	0
9	○	○	ぬ <sub>2</sub>	ゆ <sub>2</sub>	よ <sub>2</sub>	ら <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	れ <sub>2</sub>	ろ <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	ん	12	1	1	36	9	1
10	×	×	ぬ <sub>2</sub>	ゆ <sub>2</sub>	よ <sub>2</sub>	ら <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	れ <sub>2</sub>	ろ <sub>2</sub>	る <sub>2</sub>	ん	3	5	6	13	12	21
正順○	4	5	5	4	4	6	9	9	2	10	8	77			278		
誤順○	5	4	5	4	6	3	1	1	0	4	2		56		159		
無答×	1	1	0	2	0	1	0	1	0	1	0			7			23

(2) 聴 写

	あ <sub>3</sub>	い <sub>2</sub>	う <sub>2</sub>	え <sub>2</sub>	お <sub>2</sub>	か <sub>2</sub>	き <sub>2</sub>	く <sub>1</sub>	け <sub>2</sub>	こ <sub>2</sub>	さ <sub>2</sub>	し <sub>1</sub>	す <sub>1</sub>	せ <sub>1</sub>	た <sub>2</sub>	正順	誤順	無答
1	○	○	○	い <sub>2</sub>	○	○	か <sub>2</sub>	く <sub>1</sub>	×	○	×	し <sub>1</sub>	○	×	×	7	4	5
2	お <sub>2</sub>	い <sub>2</sub>	○	え <sub>2</sub>	○	か <sub>2</sub>	お <sub>2</sub>	く <sub>1</sub>	×	○	×	○	お <sub>2</sub>	×	×	4	8	4
3	×	い <sub>2</sub>	○	え <sub>2</sub>	○	か <sub>2</sub>	お <sub>2</sub>	く <sub>1</sub>	×	○	×	○	お <sub>2</sub>	×	×	6	5	5
4	×	×	お <sub>2</sub>	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0	1	15
5	○	○	○	×	×	○	×	く <sub>1</sub>	×	×	○	○	×	×	○	7	1	8
6	○	○	○	○	○	○	×	く <sub>1</sub>	×	○	×	○	×	×	○	10	1	5
7	お <sub>2</sub>	○	○	え <sub>2</sub>	○	か <sub>2</sub>	き <sub>2</sub>	く <sub>1</sub>	×	○	×	○	○	せ <sub>2</sub>	○	9	6	1
8	お <sub>2</sub>	い <sub>2</sub>	×	×	お <sub>2</sub>	×	×	く <sub>1</sub>	×	×	×	○	×	×	○	2	4	10
9	お <sub>2</sub>	い <sub>2</sub>	×	い <sub>2</sub>	○	○	○	×	×	○	×	し <sub>1</sub>	○	×	た <sub>2</sub>	5	6	5
10	×	○	え <sub>2</sub>	×	○	○	○	く <sub>1</sub>	け <sub>2</sub>	○	○	○	○	×	た <sub>2</sub>	8	4	4
正順	3	5	6	1	7	6	2	1	0	7	2	7	6	0	1	58		
誤順	4	4	2	5	1	2	4	7	1	0	3	2	1	2	0	40		
無答	3	1	2	4	2	2	4	2	9	3	5	1	3	8	9			62

	ち	つ	て	と	た	に	ぬ	ね	の	は	ひ	へ	ほ	み	正順	誤順	無答
1	X	0	X	と <sub>1</sub>	0	0	X	X	0	は <sub>2</sub>	0	X	は <sub>3</sub>	み <sub>2</sub>	4	4	8
2	あ <sub>3</sub>	0	0	X	X	0	X	X	X	は <sub>2</sub>	0	X	は <sub>3</sub>	み <sub>2</sub>	5	3	8
3	0	0	0	X	た <sub>2</sub>	0	た	0	0	0	X	0	は <sub>3</sub>	み <sub>2</sub>	9	3	4
4	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	み <sub>2</sub>	0	1	15
5	X	0	X	と <sub>2</sub>	た <sub>2</sub>	0	X	X	0	X	X	X	X	0	4	2	10
6	X	X	0	0	た <sub>2</sub>	に <sub>2</sub>	ぬ <sub>2</sub>	X	0	X	0	X	X	0	7	3	6
7	0	0	0	X	た <sub>2</sub>	0	X	X	0	0	は <sub>2</sub>	0	は <sub>3</sub>	み <sub>2</sub>	8	3	5
8	X	X	0	と <sub>1</sub>	0	X	X	X	0	X	X	0	は <sub>3</sub>	み <sub>2</sub>	5	3	8
9	X	X	X	と <sub>2</sub>	X	に <sub>1</sub>	X	0	0	X	ひ <sub>2</sub>	X	X	み <sub>2</sub>	3	4	9
10	0	0	0	X	X	に <sub>1</sub>	ぬ <sub>2</sub>	X	0	X	ひ <sub>2</sub>	X	X	み <sub>2</sub>	6	3	7
正順	3	6	6	1	2	5	0	1	5	2	4	1	3	5	51		
誤順	1	0	0	4	4	3	2	1	3	2	3	1	0	2		29	
無答	6	4	4	5	4	2	8	8	2	6	3	8	7	8			80

	む	ぬ	も	ぞ	ゆ	よ	ら	い	る	れ	ろ	わ	を	ん	正順	誤順	無答	総正順	総誤順	総無答
1	×	×	ち	×	ゆ	よ	×	い	×	×	×	×	を	ん	1	4	9	12	12	22
2	×	×	じ	け	×	○	×	○	ろ	×	ろ	×	を	ん	2	6	6	11	17	18
3	×	×	○	×	×	○	×	○	×	×	○	×	を	ん	6	1	7	21	9	16
4	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	を	ん	0	1	13	0	3	43
5	×	×	×	○	×	×	×	○	○	×	○	×	×	ん	4	0	10	15	3	28
6	×	×	○	け	×	ち	×	○	×	×	×	×	を	ん	2	4	8	19	8	19
7	×	×	ち	○	×	○	○	○	○	○	○	×	を	ん	8	2	4	25	11	10
8	×	×	×	け	ゆ	よ	×	○	ろ	○	×	○	を	ん	3	4	7	10	11	25
9	×	×	ち	○	○	よ	ら	い	○	○	○	○	を	ん	6	6	2	14	16	16
10	×	○	×	×	ゆ	よ	×	○	×	×	×	×	を	ん	2	2	10	16	9	21
正順○	0	1	2	3	1	3	1	7	4	3	4	2	0	3	34			143		
誤順×	0	0	4	2	1	5	1	2	2	0	1	0	9	3		30			99	
無答×	10	9	4	5	8	2	8	1	4	7	5	8	1	4			76			218

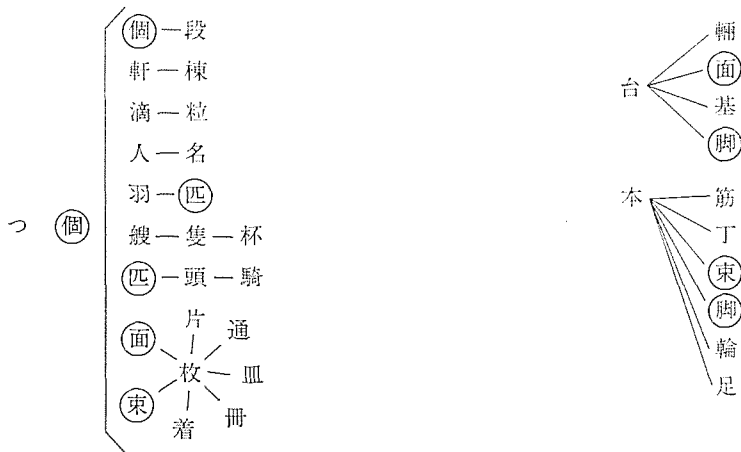
〔課題 4〕 助数詞

観 点：5 歳児段階における助数詞の理解・呼称の問題点をさぐる。

調 査 時 期：第 1 回 昭和 41 年 7 月，第 2 回 昭和 41 年 10 月，第 3 回 昭和 42 年 2 月。

調 査 語：・延べ 39 語，異なり 32 語。対象事物は延べ 324，異なり 76。

・身近な助数詞 10 語を選び，これに類縁関係にある語を配す。



\* ○印は重複を示す。

被 調 査 者：5 歳児。各調査時期とも同一幼児，同一条件による追跡調査。

1. 理解テスト 74 名 2 年保育 男 27，女 26，1 年保育 男 11，女 10。

2. 呼称テスト 25 名 2 年保育 男 13，女 12。

呼称テストの被調査者は理解テストの 2 年保育児から無作為に抽出。

調 査 方 法：

1. 理解テスト ・集団テスト 作業制限法。全調査語を 2 日間に分けて実施。・1 刺激語に対し，記入用紙に 6 個の絵を用意し，たとえば，一本，二本とかぞえるものに○をつけましょう，と指示を与え，赤鉛筆で必要な絵に○をつけさせる。

2. 呼称テスト ・個別テスト 作業制限法。理解テストの終了後に実

施。ひとり約15分、・理解テストで使用した各絵を個別に呈示し、鉛筆は一本、二本とかぞえますね。魚は？馬は？と質問し、それに答えさせる。

結 果：呼称テストのなかの、第1回目(7月)第2回目(10月)の素集計の資料をあげる。

1. 呼称テスト・助数詞調査結果表 各対象事物に幼児がどのような助数詞で反応したか、その割合(%)を示したもの。「N」とあるは無答あるいは知らないと答えたものの割合。第1回調査で象は匹、牛は頭、花は本、ノートは枚、と答えるなどの結果に幼児的な判断の特徴が感じられる。また、先だつ理解テストの順序効果が現われている。
2. 呼称テスト・個人別助数詞例 76の対象事物にたいして、どれだけの助数詞(異なり)で答えたかを個人別に整理したもの。

なお、助数詞理解テストは比較的多人数の被調査者によって行なわれたが、その結果は呼称テストの結果と高い相関があることがたしかめられている。

呼称テスト 助数詞調査 5歳児 (1) 第1回 '66.7.8~7.9

1 兎	2 パイオリン	3 封書	4 男の子	5 鬼	6 花	7 葉	8 紙束	9 手袋	10 テレビ	11 ごはん	12 電報	13 鉛筆	14 ノート
匹 88.0 12.0 N	個 4.0 ひとつ 92.0 N	枚 76.0 4.0 匹 N 12.0	人 96.0 4.0 匹 N	匹 32.0 4.0 本 64.0 枚 個 輪 N 48.0	4.0 16.0 4.0 16.0 枚 個 輪 N 48.0	枚 72.0 4.0 24.0 N	8.0 32.0 8.0 52.0 枚 個 足 N	20.0 8.0 8.0 64.0 枚 個 足 N	個 12.0 ひとつ 16.0 台 64.0 N	52.0 4.0 8.0 4.0 杯 せん 枚 個 N 32.0	56.0 8.0 4.0 32.0 本 個 冊 N	80.0 16.0 4.0 N	枚 52.0 冊 4.0 個 4.0
15 皿	16 帽子	17 本	18 びん	19 人參	20 豆	21 いす	22 パソ	23 民家	24 鶴	25 手拭	26 倉庫	27 靴	28 水滴
枚 48.0 ひとつ 4.0 個 N 40.0	個 8.0 92.0 冊 N	個 8.0 52.0 冊 枚 N 24.0	本 52.0 個 8.0 40.0 N 24.0	株 4.0 12.0 本 4.0 片 さ ひ と つ 12.0 個 N 52.0	4.0 28.0 32.0 36.0 輪 粒 個 N	個 32.0 ひとつ 64.0 枚 N 4.0 8.0 1.23 4.0 N 48.0	24.0 12.0 N	軒 68.0 32.0 N	匹 40.0 羽 N 20.0	枚 64.0 個 12.0 24.0 N	軒 64.0 4.0 32.0 N	足 48.0 ひとつ 8.0 冊 4.0 N 36.0	粒 16.0 滴 4.0 個 12.0 個 68.0
29 槍	30 象	31 ロケット	32 玩具	33 階段	34 たび	35 ネクタイ	36 リンゴ	37 工場	38 商船	39 飛行機	40 商店	41 川	42 犬
本 32.0 個 8.0 60.0 N	匹 84.0 4.0 12.0 N	台 12.0 個 1.23 ひとつ 人 N 60.0	ひとつ 20.0 個 28.0 4.0 台 48.0 N	段 56.0 12.0 1.23 8.0 個 24.0 N	足 32.0 16.0 枚 12.0 ひとつ 8.0 個 N 32.0	枚 20.0 ひとつ 4.0 N 8.0	個 68.0 ひとつ 24.0 N 8.0	軒 36.0 64.0 N	艘 20.0 16.0 12.0 4.0 頭 台 N 48.0	台 32.0 16.0 4.0 48.0 N	軒 64.0 36.0 N	100 匹 N 88.0 12.0	犬



43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	
自動車	めがね	雀	和船	のれん	へび	おぼQ	馬	しき盤	汽車	花(一輪花)	カメラ	洋服	豚の	
台 ひとつ 4.0 匹 20.0 N	76.0 ひとつ 4.0 個 12.0 羽 20.0 N	56.0 4.0 20.0 8.0 12.0 N	50.0 16.0 8.0 4.0 4.0 N	44.0 4.0 4.0 4.0 48.0 N	8.0 52.0 1.2.3 36.0 N	28.0 4.0 8.0 60.0 N	40.0 40.0 20.0 N	8.0 8.0 84.0 N	8.0 28.0 16.0 N	16.0 8.0 4.0 8.0 N	24.0 ひとつ 12.0 ひとつ 64.0 N	56.0 ひとつ 4.0 40.0 N	44.0 20.0 36.0 N	
57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	
電車	人形	牛	ピアノ	魚	Yジャッ	ほりち よろ	女の子	橋	花束	手鏡	けんび きょう	机	乗馬	
台 ひとつ 4.0 1.2.3 個 N	16.0 ひとつ 24.0 匹 32.0 28.0 N	44.0 32.0 24.0 N	16.0 8.0 4.0 72.0 N	80.0 4.0 16.0 N	64.0 86.0 N	8.0 16.0 16.0 4.0 52.0 N	92.0 8.0 N	8.0 4.0 88.0 N	4.0 ひとつ 12.0 ひとつ 4.0 4.0 N	8.0 4.0 24.0 8.0 56.0 N	24.0 ひとつ 12.0 ひとつ 16.0 ひとつ 4.0 ひとつ 4.0 ひとつ 64.0 N	24.0 1.2.3 4.0 8.0 64.0 N	48.0 24.0 28.0 N	
71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	
貝がら	シヤベ ル	ヨット	丸栗	そろば ん	荷船									
個 ひとつ 16.0 N	48.0 ひとつ 20.0 1.2.3 28.0 N	24.0 8.0 16.0 4.0 12.0 36.0 N	40.0 4.0 20.0 4.0 16.0 20.0 N	4.0 1.2.3 4.0 72.0 20.0 N	28.0 20.0 12.0 4.0 4.0 40.0 N									

呼称テスト 助数詞調査 5 歳児 (2) 第2回 '66. 10. 18, 20

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
兎	パイオリ	封書	男の子	鬼	花	葉	紙束	手袋	テレビ	ごはん	電報	鉛筆	ノート
匹	4.2枚 4.2ひとつ 8.3 N	87.5 4.2 8.3 N	100人 N	58.3 41.7 N	20.8 16.7 4.2 8.3 1.2,3 4.2 N	79.2 16.7 4.2 N	50.0 50.0 N	37.5 4.2 58.3 N	20.8 12.5 8.3 1.2,3 N	62.5 16.7 4.2 2.2 4.2 N	62.5 4.2 4.2 29.2	91.7 8.3 N	58.3 29.2 12.5
皿	12.5 4.2 4.2 8.3 70.8 N	冊 枚 1.2,3 8.3 N	75.0 4.2 4.2 16.7 N	25.0 16.7 8.3 4.2 N	58.3 20.8 4.2 N	16.7 12.5 4.2 66.7 N	20.8 8.3 4.2 4.2 N	66.7 4.2 29.2 N	45.8 25.0 4.2 25.0 N	70.8 4.2 25.0 N	50.0 4.2 45.8 N	靴 足 ひとつ N	水滴 8.3 16.7 4.2 8.3 4.2 8.3 個 4.2 4.2 N
槍	30 象	81 ロボケッ ト	32 玩具	33 階段	34 たび	35 ネクタイ	36 リンゴ	37 工場	38 商船	39 飛行機	40 前店	41 川	42 大
本 個 N	79.2 16.7 4.2 1.2,3 4.2 N	12.5 8.3 4.2 1.2,3 4.2 N	58.3 8.3 8.3 N	70.8 4.2 12.5 12.5 N	33.3 29.2 4.2 4.2 N	29.2 4.2 8.3 58.3 N	79.2 4.2 8.3 N	45.8 4.2 50.0 N	37.5 12.5 16.7 4.2 N	50.0 12.5 4.2 4.2 29.2 N	54.2 4.2 4.2 4.2 37.5	100 匹 個	95 匹 個

43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56
自動車	めがね	雀	和船	のれん	へび	おばQ	馬	しよぎ	汽車	花(一輪花)	カメラ	洋服	豚のウ-
83.3% 個 4.2 個 4.2 個 4.2 個 8.3 N	25.0 羽 1.2.3 個 4.2 個 12.5 匹 58.3 N	50.0 艘 4.2 隻 33.3 合 12.5 個	45.8 艘 8.3 隻 20.8 合 4.2 個 20.8 N	37.5 枚 8.3 個 54.2 N	66.7 匹 8.3 本 25.0 N	41.7 匹 8.3 頭 50.0 艘	54.2 匹 33.3 頭 4.2 匹 8.3 N	16.7 個 12.5 個 4.2 個 66.7 N	41.7 台 8.3 輛 4.2 個 12.3 輛 4.2 頭 37.5 N	20.8 個 16.7 台 8.3 輪 4.2 個 8.3 東 4.2 枚 4.2 N 45.8 N	20.8 着 8.3 放 4.2 1.2.3 4.2 1.2.3 62.5 個	8.3 人 33.3 匹 4.2 N 45.8	12.5 人 54.2 匹 4.2 N 33.3
57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70
電車	人形	牛	ピアノ	魚	Yシャツ	ほうちよ	女の子	橋	花東	手鏡	けんび きよ	機	乗馬
45.8 人 4.2 個 4.2 個 4.2 個 4.2 個 4.2 個 37.5	29.2 匹 25.0 頭 20.9 N	58.3 匹 37.5 頭 4.2 N	29.2 合 12.5 個 4.2 個 1.2.3 個 50.0 N	83.3 着 4.2 個 12.5 隻	8.3 本 50.0 片 33.3 丁	20.8 個 8.3 枚 8.3 本 4.2 片 4.2 個 4.2 個 4.2 丁 45.8 N	95.8 人 4.2 匹 4.2 匹	4.2 木 4.2 1.2.3 1.2.3 個 87.5 N	8.3 木 12.5 東 12.5 個 4.2 輛 4.2 個 4.2 N 50.0 N	29.2 個 16.7 合 16.7 台 4.2 1.2.3 4.2 1.2.3 33.3 N	16.7 個 8.3 軒 4.2 1.2.3 4.2 1.2.3 66.7 1.2.3 N	29.2 匹 4.2 頭 4.2 N 50.0	70
71	72	73	74	75	76								
貝がら	シャベル	ヨット	丸栗	そろばん	荷船								
33.3 個 12.5 枚 4.2 個 20.8 本 8.3 1.2.3 1.2.3 個 4.2 N	25.0 個 8.3 隻 4.2 合	37.5 艘 12.5 個 25.0 個 25.0 個	62.5 粒 20.8 個 8.3 隻 4.2 個 4.2 合 4.2 N	12.5 艘 1.2.3 隻 8.3 個 75.0 合 N	45.8 隻 12.5 個 4.2 隻 16.7 合 20.8 N								

幼児	呼称テラスト										個人別助数詞例	計									
1	匹	枚	ひと	人	木	冊	株	輪	軒	足	合	ひとつ	段	艘	羽	隻	頭	個	粒	17	
2	匹	枚	人	ひと	冊	杯	本	冊	軒	軒	匹	段	機	台	羽	隻	頭	輛	人	滴	19
3	匹	枚	人	個	木	冊	本	冊	軒	足	隻	台	艘	羽	隻	頭				11	
4	匹	枚	人	個	木	冊	本	冊	軒	合	隻	隻	羽	輛	頭	丁	粒				12
5	匹	枚	人	杯	本	冊	本	冊	片	足	滴	合	隻	隻	隻	隻	隻				17
6	匹	枚	人	杯	本	冊	本	冊	片	足	滴	合	隻	隻	隻	隻	隻				14
7	匹	枚	人	木	本	冊	本	冊	羽	足	艘	軒	ひとつ								12
8	匹	枚	人	木	本	冊	本	冊	杯	粒	個	軒	ひとつ								11
9	匹	枚	人	木	本	冊	本	冊	杯	粒	個	軒	ひとつ								14
10	匹	枚	人	木	本	冊	本	冊	杯	粒	個	冊	1.2	軒	足	台	頭				10
11	匹	通	人	木	本	冊	本	冊	粒	軒	機	ひとつ	段	艘	基	台	騎				16
12	匹	枚	人	木	本	冊	本	冊	個	軒	艘	台									11
13	匹	人	枚	ひと	冊	杯	本	粒	軒	足	1.2	段	艘	機	羽	頭	束	台			17
14	匹	人	個	枚	羽	1.2	ひとつ														7
15	匹	枚	人	杯	木	冊	冊	粒	羽	隻	台	頭	丁	ひとつ	個	艘					16
16	匹	枚	人	輪	合	本	冊	冊	個	軒	足	ひとつ	段	頭							14
17	匹	個	枚	人	杯	冊	冊	ひとつ	軒	足	1.2	頭	台	羽							13
18	匹	枚	人	個	冊	軒	ひとつ	粒													9
19	匹	枚	人	輪	足	合	杯	本	個	粒	軒	ひとつ	段	頭	隻						16
20	匹	ひと	つ	人	個	人	杯	冊	軒	かい											10
21	匹	木	人	冊	軒	本	冊	足	段	ひとつ	台	救									11
22	匹	枚	人	冊	冊	冊	冊	頭	段	頭	台	羽									11
23	枚	人	匹	頭	1.2	ひとつ															6
24	人	枚	本	軒	足	個	台	頭	1.2	粒											12
25	匹	個	人	輪	足	枚	軒	ひとつ													9

#### D. 今後の予定

昭和42年度には、特別研究として、「幼児の言語能力に関する全国調査（3年計画・第1年次）」を行なうことになった。その第1年次は「幼児の文字に関する全国調査」である。本年度に行なった、各課題調査は全国調査のための準備調査としてそれぞれ位置づけられることになる。

（村 石）

# 言語の表現機能と伝達効果の研究

## I 言語表現における場面の効果の研究(継続)

### A 目的・経過・見とおし

場面によって言語表現がどのような変容を示すかを、伝達という観点から調べ、あわせて、場面の分析および表現の分析を行なうことを目的とする。場面が表現に影響するもののうち、①主語の有無、②コソアドの使われ方、③敬語の使われ方、④人を表わす語の使われ方、の四つの柱を立てたが(年報16参照)、現在は、その第一の「主語の有無と場面の関係」を調べるための研究を進めている。

主語の有無を場面との関係において問題にするばあい、まず、文における主語の役割から明らかにしてかからなければならない。なぜなら、ある主語の省略が場面の影響であるというためには、その文の本来の文型では主語を必要とすることがわかっていなければならないし、また、ある主語の存在が場面の影響であるというためには、その文の本来の文型では主語を必要としないことが明らかでなければならないからである。そのために、まず「文における主語の役割」の研究から始めることにした。この研究のために、次の五つの段階を設定した。(説明は、年報17参照)

- ① 主述関係を構成する要素の、連語論的側面
- ② ことがら関係を表わすものとしての、主語と述語の関係の分析
- ③ 文の陳述から見た、主語と述語の関係の分析
- ④ 述語の機能の概観
- ⑤ 主語の本来的な役割と補助的な役割の分析

これらの分析を、ある程度のくわしさを保持して進めるためには、かなりの使用例を必要とする。そのため、種類も豊富で、量的にも資料を得やすい、文章にあらわれた使用例を使うことにし、文庫本を材料としてカード化

してきた。】(カードのとりかた、および、その見本は、年報16参照)

40年度までに、23の文学作品から、延べ約6万枚(異なり約5千枚)のカードを作成したが、基本的な用法以外については、使用例が少なすぎるので、本年度は、(話しことば研究室と共同で、)13の文学作品から、(当研究室分)延べ約12万枚(異なり約4千枚)のカードを追加した。このあと、42年度には、文学作品に少ない種類の使用例を集めるために、(やはり、話しことば研究室と共同で)説明文の使用例をカード化する計画を立てている。

40年度までは、同じ担当者によって「国民各層の言語生活の実態調査」(報告29「戦後の国民各層の文字生活」41年3月刊)の研究・執筆が平行して行なわれていたこと、カード化作業が今年度ほど能率化されていなかったことなどにより、分析のほうは、①②の段階に少し手をつけた程度であったが、今年度は、①の段階をほぼおわり、②の段階をかなり進めることができた。

今後さらに分析を進めて、43年度には「主語と述語」についてのいちおうの分析をおえ、46年度には、「主語の有無と場面」を完成する予定である。

## B 担 当 者

(1)(2)は、言語効果研究室長の高橋太郎が担当し、屋久茂子がこれを助けた。(3)は、研究室長の指導のもとに、屋久茂子が行なった。

## C 本年度のしごと

### (1) 文カードの追加

本年度は、13の文学作品から、延べ約12万枚のカード(異なり約4千枚)を作成した。(これは、話しことば研究室と共同で行なったもので、作品名・選択規準などは、「現代語の文法の調査研究」の項参照)

### (2) 主述関係の分析

さきにBでのべた②の段階の研究として、前年度から継続の「名詞述語文における主語と述語の関係」の第一次稿を作成し、ついで、「形容詞述語文における主語と述語の関係」の分析にはいった。

この研究の、対象への接近方法を具体的に示すために、前者の第一次稿の一部を引用する。

名詞述語文における、主語と述語の関係を分類すると、付表のようになる。

名詞述語文全体についての説明は、次年度以後に予定している報告書で行なうが、ここでは、「属性づけ」と「類づけ」のところだけをひく。ここでは、名詞述語文という範囲の中で、述語が属性をあらわす場合の形式のバラエティーが示されている。

### 属性づけ

主語に対して、その属性をのべているものである。

◇性質と状態の区別のはっきりしないものがある。しかし、あとでのべる動作・状態づけの中にはいらないものは、こちらに入れた。その意味では、「性質状態づけ」と呼んだほうがよいかもしれない。

⑭ 私も シュンはずれた。(平凡138)

⑮ お前は はたちだろう？(暗夜行路260)

などもここに入れた。

◇同じ単語が物と性質をあらわすとき、種類づけとの限界がはっきりしない。

⑯ それさへ皆蝕ひだ。(田園の憂鬱117)

◇形容動詞との限界のはっきりしないものもある。

⑰ 相変わらず彼の生活は、世間の目から見て放蕩無頼だった。(多情仏心260)

属性のあらわし方には、いろいろのものがある。これらは、主述関係の違いなのか、述語作りの形式的な手続きの違いにすぎないのか、よくわからない。

(ア) 性質(・状態)的な意味をもつ名詞

⑱ 畳は茶褐色だ。(平63)

⑲ ね、こっちが一重でしょう。(暗124)

⑳ 膈差は一尺八寸、直焼無銘、横鐘、銀の九曜の三並の目貫、赤銅緑

金拵である。(阿部一族65)



(付表) 名詞述語文における主述関係の一覧

現象解説	現象主体づけ	④8あれが、坊ちゃんでございますよ。		
		④9電話に出たのは、お蔭だった。		
	概念化	⑤5本当の恋を知らずのも、我等の仕事の一つだね。		
	意味づけ	④4一つきりとばなかったのは、二人が一人になる意味かもしれなかった。 ⑤1シメキとは、彼等仲間の隠語で情婦と云ふ意味だった。		
	言葉、考えづけ	④8悪徳には一切近よらないと云ふのが、あたしの立て通してきた主義です。		
概念展開	体言的概念展開	種類づけ	種づけ	④8仲田は如才のない男だ。
			類づけ	⑤1ポチは言ふまでもなく犬だ。
			特種づけ	④5了海様は、此の洞の主も同然な方ぢゃ。
			種類・属性づけ	④7私は畜生だった。
		物づけ	④9あなたの荷物って是れ?	
		内容づけ	④4パリの新流行は赤と黒の取り合せだ。	
	形容詞的概念展開	属性づけ	④6畳は茶褐色だ。 ④5あの娘は十六位だ。 ④5春琴も道修町の生れである。	
	動作・状態的概念展開	ようす、状態づけ	④7佃は今C大学を去ることは不可能な状態であった。	
		気持ちづけ	④5駒田は、芸者をあてがり腹である。	
		動作・状況づけ	④2わしゃもう高見の見物ぢゃ。	
		関係づけ	④5三好さんは、御一緒ぢゃないんですか。	
		時的動作・状態づけ	④9あなた方はそろそろ寝る時間ですよ。 ④5かれは出張中であった。	
	存在的概念展開	有無づけ	④9車の中には、女給が三人ばかりに、男が五六人。	
		場所づけ	④5家はあの下だ。	
④7野島が初めて杉子にあったのは、帝劇の廊下だ。				
時づけ		④3あたしなんぞほんとに眠るのは、二時三時よ。 ④9夫は、早春の夜の月が冴えた晩であった。		
側面の具体化	④3題は「平凡」、書方は牛の涎 ④6春琴の墓石は、高さ約六尺。			
価値づけ	モノゴト評価	④6彼の服装は、上等でもなかった。		
	現象評価	④5同じ路を引きかへして帰るは、愚である。		
	ぬき出し評価	④7人のいいことは無類です。		
	態度的評価	④5阿部一族討取などは、茶の子茶の子の朝茶の子だ。 ④7奇ばかり銜ふのははたの迷惑だよ。		
その他	(未分析のもの)			

㉔ やがて帰ってきたフラテを見ると、顔の半面と体とが泥だらけであった。

(田 60)

このほか「～性」「～状」「～だらけ」などが、その類である。語的意味の性格が形容詞性の方にまでひろがり、しかも文法的性格は名詞にとどまっている(形容動詞になっていない)という単語はわりあいに少ない。それらにしても、その形容詞的性格は、文の中で始めて発揮されるのであろう。

(イ) 数量を表わす名詞で量的に属性づける。

㉕ 座敷は二階と同じく六畳ばかり(つゆのあとさき73)

㉖ あの娘は年は十六位だった。(田93)

㉗ 食事の後廊下の長椅子に並んで腰をかけ珈琲を吸りながら、懇談すること又一時間ばかり。(つゆ92)

㉘ 細君の信用、ほとんど零だからね。(多32)

◇次のようなものは、あとで述べる。

○昨夜の泊から此処まではたった五里(友情68)

◇次のようなものは、ここに属しない。

○あれはね、二月ですよ、あの同じ年の二月ですよ。(多279)

○案内外してある電車の中には、二人の知らない他の店の女給が三人ばかりに、男が五六人。(つゆ20)

(ウ) 主語のもつある側面をぬき出した類概念的な名詞に連体規定語のついたもの。そのぬきだす点においては、ぬき出し主語(側面の具体化)における主語)と同じであるが、それを部分主語としてでなく、述語の方に使ったものである。

㉙ 彼はいらいらしながらも、よその人とさへ言へばこんな子供にまで小さくなって、小言一つ言へない性質であった。(田 53)

㉚ おれもそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。(羅生門 16)

㉛ 殊に権兵衛殿は既に髪を払はれて見れば、桑門同様の身の上である。(阿85)

㉜ 春琴も道修町の町家の生れである。(春琴抄 182)

㉝ わっしは、鳥をつかまへる商売でね。(銀河鉄道の夜 278)

㉞ 銀座通りの店々は、すっかりもう葺尾の装ひだった。(多 40)

これらの述語になっている名詞は、ある属性というものを示す単語であるが、それが文の中で、主語の示すものごとがそういう属性をもっているということを示している。

数や量の抽象語もここにはいる。

⑩① 東北鉄道はどの大会社が清算事務の帳尻を合はす前には、あゝでもよくかうでもいゝと云った性質の金だけでも、決して馬鹿にならない額だった。

(多 192)

⑩② 午前中が一日の長さだった。(伸子 90)

「～さ」には、次のような用法がある

⑩③ 君もまた馬鹿な熱心さだね。(多 34)

(㊦) 「程度」「くらい」など、程度に関する抽象語にかざりのついたもの。

⑩④ 彼の家はやっと食ふに困らない程度だった。(友 85)

⑩⑤ いいえ、それが中々そんな程度じゃないんです。(多 112)

⑩⑥ それは平地でよりも、もっと猛烈な位であった。(風立ちぬ 101)

⑩⑦ 検校のは四尺に足らぬ程であらうか。(春 137)

◇「ほど」「くらい」などは副助詞化する。

⑩⑧ 益々彼は杉子の美しさを感じたほどだった。(友 50)

(㊦) 部分・もちものなどをあらわす。

⑩⑨ わけても闊犬の性質を持った一疋は非常な力であった。(田 51)

⑩⑩ 彼が乗った電車はすいていたが、帰って来る電車はどれもいっばいの客であつた。(暗 178)

⑩⑪ 彼は、佃一郎といふ姓名であった。(伸 18)

⑩⑫ 佃さんといふ人は、いつもあんな顔色なのかえ？(伸 118)

⑩⑬ あの人は長い髪だねえ。

これらが属性を示すということは、まさに文の中においていえることである。

### 類づけ

主語に対して、その上位概念によってそのものごとを位置づけているものである。

⑩③ いるか、お魚でせうか。(銀 299)

⑩④ 私も男です。(友 98)

類づけは、文字通りに種類をあらわしているよりも、その類のもつ、ある特徴的な性質を意味していることが多い。

⑩④ 私も男です。本当のことを知れば、あきらめなければならない時はあきらめます。(友 98)

⑩⑤ 私は女です。私にはあなたのお役に立つことより他に望みはないのです。(友 108)

⑩⑥ 私がお糸さんに接近する目的は人生研究の為に、表面上性欲には関係はなかった、が、お糸さんも活物、私も死んだ思想に掬はれてあたけれど、矢張活物だ。活物同志が(後略)(平 125~6)

このことは、打消しになると、いっそうはっきりする。小説には、⑩⑦よりも⑩⑧⑩⑨のようなものの方が多いのではないか。

⑩⑦ いるか、魚ちゃありません、くじらと同じやうなけだものです。(銀 299)

⑩⑧ お前は人間ではない。自分の為に生きる人間ではない。(友 99)

⑩⑨ 自分の仕事が成功しようが、失敗しようが、それを心から喜ぶ者も悲しむものもない。父や母や、同胞や、しかしそれは 自分の家族ではない。(暗 182)

このように、類づけは、属性づけ的なおいをもっている。

### (3) 主述関係の分析のための補助的研究

主述関係の分析のために、次の二つの補助的研究を行なった。

#### (i) ガ格の名詞と変化を表わす動詞の組みあわせ

さきにCでのべた①の段階の研究として、40年度に行なった「ガ格の名詞と動詞の組みあわせ」のうち、特に問題のあるものの一つである「変化を表わす動詞のばあい」を分析した。その結果、ガ格の名詞が側面をあらわすばあいの条件として、動詞の意味の抽象性が大きくきいていることがわかった。このことについて、そのまとめのプリントから引用する。(「側面」については、年報17参照)

○動詞が抽象的になればなるほど、変化の内容をはっきりさせるために側面が重要になり、側面を示すが格の名詞は豊かになる。逆に、具体的になればなるほど、側面を示すが格の名詞は限定されてくる。

たとえば、「変る」のようなものは、大部分のものが側面となることが出来、「ふえる」のようなものでは、側面となり得るものは計量单位的なものという制約が起ってくるし、さらに「染まる」になれば、側面はほとんど“色”に限られる。さらに「わく」のようにになれば、側面を示すことがなくなる。

- ㉒ ちょっと表情が変った。(暗 99)
- ㉓ 春琴の相貌が如何なる程度に変化しつゝあるか。(春 198)
- ㉔ 君の性質が変って来たのは。(破成 44)
- ㉕ 私の運命が何う変化するか分かりませんけれども。(こころ 188)
- ㉖ 鶴さんは植源にゐた時とは全然様子が変って。(あらくれ 74)
- ㉗ 買う間にも色々気が変るので。(こ 190)
- ㉘ どうも斯の校長の態度が変った。(破 203)
- ㉙ 先生に会う度数が重なるに伴れて(こ 17)
- ㉚ 水は凍ると体積がふえる。
- ㉛ あのバスは昼間、ラッシュ時よりずい分回数が減る。
- ㉜ あの子は最近急に丈が伸びた。

○具体的な変化をあらわす動詞でも抽象的な意味で使う場合には、側面をあらわす格の名詞がくることがある。

- ㉝ 彼は思想が赤くなる。
- ㉞ 気分が急に暗くなる。(暗 11)

さきの水準変化で、具体的な変化は位置をあらわしているものは格の名詞は主体だが、抽象的なものには側面が出ている。(例㉝㉞㉟㊱)

- ㉟ そんな言葉で形容するより外に途のない所へ、自然の調子が落ちて来たのです。(こ 167)
- ㊱ 彼女は独りでそこへ乗出して行くほど、手があがって来た。(あ 232)

⑩ あんなものを相手にする人、私は大嫌、人品が下りますよ。(あ 192)

⑪ 地位があがる。

⑫ それよりこの方法のほうが効果があがる。

(ii) ガ格の名詞と組みあわさる「ある」の用法の研究

——(あわせて)「人がある」と「人がいる」の違い——

昨年度の「ガ格の名詞と動詞の組みあわせ」でとったカードを利用し、研究補助員の研修をかねて、この研究を行なった。この研究の、対象への接近のしかたを示すために、そのまとめの一部を引用する。

(a) 「人間・動物以外をあらわすガ格の名詞と組みあわさる“ある”の用法」の大分類のところから

これは、大きくわけて、次のように5つにわけられる。

ア 空間的な存在

一定の空間に、一定のものが存在することをあらわす。

⑧ 植源の庭には大きな水甕が三つもあった。(あ 92)

⑨ 茗荷谷に自家があったころ。(暗 188)

⑩ 前に大きな島があつて。(暗 152)

⑪ 庭へはいろいろとする所に屋根のついた小さな門がある。(暗180)

おもな特徴は、その存在する空間(存在場所)が、文中、または文脈で示されていること。

イ 範囲・わくぐみの中の存在

一定の範囲・わくぐみの中に、一定の抽象的なものが存在することをあらわす。

⑫ それからまだ外に穢多といふ階級があります。(破310)

⑬ なに、そんな事があるものですか。(あ 56)

⑭ 呼びかけと、彼女の応答とに間があつたので。(伸 113)

⑮ 良き鶯を獲ることは授業料の儲があるので。(春 177)

これらは、存在するものの性格にしたがって、存在するわくぐみの性格も変る。存在場所が抽象的である。

### ウ 事件・催しとしての存在

ガ格の名詞と「ある」が組みあわさって、ある事件がおこることや、ある催しがおこなわれることをあらわす。

- ⑩ 其前の晩、烈しい夫婦喧嘩があつて。(破 318)
- ⑪ 今度のやうなことがあると(破 252)
- ⑫ きょう四時から東海寺で先祖の法事があるんだが。(暗 97)
- ⑬ 一日置いて今夜の六時に新橋に着くといふ電報があつた。(ふく蒲団>43)

ここでは、「ある」が動作動詞的ニュアンスをもつ。状況語として時を示す語が出てくる。

### エ 所有されるもの、所属するものとしての存在

- ⑭ 宅には相当の財産があつたので。(こ 154)
- ⑮ 佐々さん、あなたこれから時間がありますか。(伸 95)
- ⑯ この机には、あしが四本ある。
- ⑰ 何んですか、私に用事があると仰るのは。(破 24)
- ⑱ 西鶴には、変な図太さがある。(暗 255)

ガ格の名詞は、人や物事に所有されているものや、所属しているものをあらわしている。もちぬしが主語的傾向を持つてくる。

### オ 経験としての存在

過去にそういうことをした経験をもっていることをあらわす。

- ⑲ 君は恋をした事がありますか。(こ 35)
- ⑳ お島は養家を出てから、こゝへも顔出しをしたことがあつた。(あ 138)
- ㉑ 奥さんは「――」と答へた事があつた。(こ 88)

「～したことが」と「ある」の組みあわせで、過去における一つの動作をあらわしている。それが特定の間人や物とかかわるという所有の関係になって存在していることをあらわす。

アとエ、およびウとオは、それぞれガ格の名詞の性格や「ある」のテンス的な性格が共通である。アとウは、所有でないことにおいて、ま

た、エとオは所有的であることにおいて、それぞれ共通性をもっている。イは、ア、エ、ウの中間的なものである。

(b) 「所有されるもの・所属するものとしての存在」の始めの部分から

エ 所有されるもの・所属するものとしての存在

「ある」の基本的な使われかたは

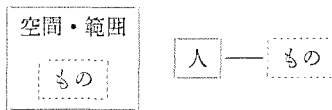
ア **もの** が **空間** にある。

という形をとる。この場合、「ある」は、空間との結びつきが非常に強い。この「空間」が抽象化されて、「範囲」を示すようになると、「ある」の「範囲」との結びつきは弱まってくる。それは、語順の上にもあらわれて、イでは、次のような語順になる傾向が、アよりも強くなる。

イ **範囲** に **もの** がある。

アにおいて、空間は、より対象語的であり、イにおいて、範囲は、より状況語的である。

しかし、図式化すれば、範囲も空間と同じように、わくであらわされるような性質をもっている。そして、「ある」はわくの中の存在をあらわしている。ところが、存在範囲が「人」になると、そのわくのような性質が、非常にうすくなる。



エ<sub>1</sub> **人** に **もの** がある。

こうなると、「ある」は、ある場所に具体的に存在することよりも、その人に所有されることをあらわす意味が強くなる。

この場合、実際には、「人」に」の形でなく、「人」には」「人」は」の形をとることが多くなる。

エ<sub>2</sub> **彼** には **財産** がある。

エ<sub>3</sub> **彼** は **財産** がある。



このようになると、「人」と「ある」の連語論的な結びつきが弱くなる。

そして、エ<sub>1</sub>になれば「人」は、主語的であると云える。そのことは、エ<sub>1</sub>だけではない。エ<sub>2</sub>の型でも、次のような現象がみられる。

エ<sub>1</sub> あの方 には、財産 がおありだ。

この場合、尊敬語の照応する相手は「人」であって、「もの」ではない。そこで、人称の統一性という側面だけからみると、主述関係は「人」と「ある」との間であって、「もの」と「ある」との間にはないということになる。もちろん、このことから、ただちに「人」が主語なのだということとはできないが、少なくとも、主語といえるための条件の一つを、「人」のほうがりけもっている、ということとはできる。

「人」がでてきた場合、ニ格の名詞と「ある」の組みあわせという連語論的な観点だけで処理しきれない面が大きくなる。これは、文論的なものである。この点で、エはアヤイとは、かなりの程度に異なったものということができよう。

エのようなものを、アヤイと区別して、とりだすことにする。これが、「所有されるもの・所属するものとしての存在」である。つまり、ガ格の名詞で示されたものが、もちぬし(「□に」「□には」「□は」などで示されているもの)に所有されたり、所属したりするものとして存在することをあらわすものである。

㊦ けれどもあなたは必竟財産があるからそんな香気な事を、(こ 90)

㊧ 財産があって、道楽に政治でも やって見ようといふ人は格別、(破 189)

㊨ 妻の家にも、何うか斯うか暮して行ける財産がある上に、(こ 278)

㊩ 私にはもう護り神があるの、(伸 85)

以上、もちぬしが人である場合について、説明したが、もちぬしはかならずしも人とは限らない。人でない場合でも、上にあげた、「所有されるもの、所属するものとしての存在」の性質をそなえている

ものは、ここにはいる。

185 この車は、エンジンが前にあります、

186 恰も石に壺があって、 (春 137)

187 意志の力に不足があった為ではありません、(こ 233)

(高 橋)

## II 文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究

### A 目的・意義・担当者

言語の表現機能と伝達効果の発達は、幼児の言語の獲得あるいは言語活動の形式の分化の中にさまざまな形であらわれるから、これを、特に幼児の文表現が成立し、文形式が形成されていく過程でとらえようとする。

そのために、(1)伝達機能の単位としての文(センテンス)をとりあげる。(2)対象としては、まず到達点としての4～6歳児について行ない、次に発達の観点に立って1歳から6歳児の問題を扱おうとしている。

言語については、文を構文、陳述の両側面から文法的に分析する。言語行動については、主として伝達機能の側面から分析する。かくして、文法的形式と伝達機能の関係の考察をする、等を目的としている。この研究は言語効果研究室の中で主として大久保愛が当たり、屋久茂子がこれを助けた。

### B 本年度の研究と作業

この研究は昭和40年度から始まっている。本年度は第二年目である。次のことを行なった。

1. 40年度に採集した資料カードを使って、幼児の構文の研究を行なうにあたり、まず、幼児は、年中、年長の時期において、どのような形式の構文を使用しているかの概観を見ようとした。その方法として、当研究所の話しことば研究室で行なった『話しことばの文型(2)』の文の成分の分け方(110ペ～113ペ)に準じて(多少ちがうところがある)赤羽台幼稚園児、年長26名、年中28名の資料を分析した。文の総数年長2,004文、年中1,485文の

中から、いわゆる平叙文のみを分析した。

しかし、幼児の構文的に分析するためには、次にあげるような個々の文法形式を詳細に研究したのち、あらためて、分析しなおす必要があるので、これらを研究項目としてとりあげ、まず「連体修飾語の用法」から分析にかかった。これら研究項目は、今後研究途上で、つけ加わる可能性があるが、今は次のようである。

(1) 連体修飾語の用法 (2) 補足文の形式 (3) 名詞による動詞修飾の用法 (4) 動詞の形態 (5) 形容詞の形態 (6) 従属文の形式 (7) 文末述語の形式 (8) 語順

また、伝達機能の研究の一環として、これも概観調査であるが、幼児の発話の長さを文節の長さを中心にして調べてみた。年中、年長の年齢によるちがい、男女の性によるちがい、年報17でのべたようにこの調査は九つの話題よりなっているが、その話題によるちがいなどを試みた。

2. 40年度に採集し、カード化した資料では不十分なので、今年度は年長児だけを対象として、40年度と同じ時期に、同じ発問法で、資料補充の調査を行なった。この年長児は、40年度に年中児であったものを主とし、他に同一クラスの幼児を含む。人数は、東京自由保育園 男19, 女12, 計31名、赤羽台幼稚園 男23, 女20, 計43名、つごう74名である。

## C 今後の予定

来年度は次のことを予定している。

1については、(1)から(8)までの課題のうち、(1)から(5)までの分析研究を2の資料も使って行ない、その結果をまとめる。

2については、40年度にならって、分析を強化するための資料、「幼児のことばカード」を作成する。

さらに3として、伝達機能の発達に関する準備的な分析を行なう。これは(1)話の展開形式 (2)質問に対する応答のしかた、などの面から分析しようとするばあいの方の準備的研究である。 (大久保)

# 明治時代語の調査研究

## A はじめに

近代語研究室では、昭和30年度以降、明治初期の文献を資料とした語彙調査を継続して行なってきた。その成果については、そのつど年報または報告書に発表されている。（『年報』7～15、および、『明治初期の新聞の用語—報告15—』参照）

昭和41年度は、「安愚楽鍋」（仮名垣魯文著・明治4～5年刊）の助詞・助動詞の索引を作成して、昭和30年度以降の研究に対して一応のしめくりをつけることにした。また、今後の新しい調査項目について構想をねり、準備調査に着手することにした。そのため、次の調査研究を行なった。

- (1) 「安愚楽鍋」の助詞・助動詞の索引作成
- (2) 「花柳春話」のふりがなつき漢字語の調査
- (3) 近代語資料の調査と探訪

## B 担当者

(1)(2)は見坊・飛田が共同して作業にあたり、牧野正子がこれを助けた。(3)は飛田が担当した。

## C 本年度の作業

- (1) 「安愚楽鍋」の助詞・助動詞の索引作成

助詞・助動詞のカードはすでに採集されていたので、これを点検・分類して配列した。配列は、アイウエオ順である。分類は原則として「現代語の助詞・助動詞」（国語研究所報告3）に従ったが、助詞は、格助詞・係助詞・接続助詞・並立助詞・終助詞・間投助詞とし、準体助詞は格助詞に含めた。助動詞は、その終止形を見出しとし、各活用形のアイウエオ順とした。また、助詞・助

動詞ともに、(助動詞は活用形ごとに)

- 1) 体言のあとに続く
- 2) 用言のあとに続く
- 3) 体言・用言以外の自立語のあとに続く
- 4) 助詞のあとに続く
- 5) 助動詞のあとに続く

の5種類の接続によって分類し、それを、イ) 会話 ロ) 独話 ハ) 地の文  
ニ) 引用文(上書など)に分類して、それぞれをページ順に配列した。たとえ  
ば次のようである。

		[助詞の例]	
ト	格助詞		
1	体言+ト		
	会(初)	7オ3, ...	
	独(三上)	18ウ1, ...	
	地(初)	1ウ3, ...	
	文(三下)	18オ7, ...	
2	用言+ト		
	会(初)	9オ2, ...	
	独(三上)	18ウ1, ...	
	地(初)	2ウ1, ...	
3	体言・用言以外+ト		
	会(初)	10ウ5, ...	
	地(初)	14オ8の2, ...	
4	助詞+ト		
	会(初)	7ウ1, ...	
	地(初)	20オ7の2, ...	
	文(三下)	18ウ6, ...	
5	助詞+ト		
	会(初)	9ウ5, ...	
	独(三上)	18オ6, ...	
	地(初)	10オ6の1, ...	
	文(三下)	19オ3, ...	

		[助動詞の例]	
ナイ	助動詞		
	ナイ(終止形)		
1	用言+ナイ		
	会(二上)	9ウ5, ...	
2	助動詞+ナイ		
	会(二上)	8ウ7, ...	
	ナイ(連体形)		
1	用言+ナイ		
	会(二上)	11ウ3, ...	
2	助動詞+ナイ		
	会(二上)	9オ5, ...	
ナカッ			
1	用言+ナカッ		
	会(初)	7オ1, ...	
2	助動詞+ナカッ		
	会(三下)	3オ5, ...	
ナク			
1	用言+ナク		
	会(二上)	9オ4, ...	
ナケレ			
1	用言+ナケレ		
	会(初)	25オ1, ...	
	独(三上)	19オ6, ...	

(2) 「花柳春話」のふりがなつき漢字語の調査

明治初期の文献にあらわれる漢字には、ふりがなのついているものについていないものがある。そこで、ふりがながついていない漢字語については、語形の認定やアイウエオ順の配列を行なおうとする場合に問題が生ずる。ふりがながつきの場合は、そのふりがなが現代の読み方と異なるものがかなりみられる。

また、そのふりがなが、読みくだすさいの本文であって漢字は添え物という場合と、そうでない場合がある。かなをふる場所については漢字の右側だけ、左側だけ、あるいは両側の三類がある。しかも、それらのふりがなが文脈の上からは、どちら側を手がかりとして使っても読める場合とそうでない場合がある。そこで、作者は、どういつもりでふりがなをつけたのか、ふりがなの役割と性格を明らかにし、また、どういう性質のふりがなが、ふりがなの役割を知る手がかりとなるかをさぐろうとしたのである。

以上の問題を明らかにするために、われわれは、明治11～12年刊の「花柳春話」(丹羽純一郎訳)のふりがなについて調査することにした。この作品をえらんだ理由は、

1. 「花柳春話」が明治初期の代表的翻訳文学と見られること(参照、矢野文雄「訳書読法」p106、明治16年11月刊)
2. ふりがなが、右側、左側、両側の三通りあって、その分量も調査に適当と認めたこと

である。底本には、近代語研究室蔵本(五冊本)を用いた。

「花柳春話」における漢字語のふりがなの実態は、次の通りである。語例は、上が右側ふりがな、下が左側ふりがなを示す。

	(例)
漢語(字音語)	<small>アンヤ</small> 暗夜ニ <small>イセン</small> 移遷ヲ <small>ガン</small> 顔ヲ
和語(字訓語)	<small>イトマ</small> 暇ナク <small>ウツタ</small> 訴フル
外来語(外国語を含む)	<small>オンブ</small> 百磅ノ <small>オンブ</small> 十磅金ヲ
混種語	<small>アイイツ</small> 相揖シ <small>ヲキ</small> 揖ス <small>コレ</small> <small>ラビウ</small> 虎烈刺病ニ
二文節以上	<small>フルヒト</small> 或

左側だけのふりがな

漢語	榻 <small>イス</small> ニ	丐兒 <small>ゴジキ</small>	今回 <small>コンノ</small>	厚情 <small>シンセツ</small> ヲ	
和語	赧然 <small>アカク</small> トシテ		不暇 <small>アドケナキ</small> 不飾 <small>ナキ</small> ノ	所在 <small>アリカ</small> ヲ	
外来語(外国語を含む)		毎週新聞 <small>ウイキリイペイパー</small> ヲ	骨牌 <small>カルタ</small> ノ	邪蘇祭典 <small>クリスマス</small> ハ	香湯 <small>コーヒー</small>
		神 <small>ゴード</small>			
混種語	荒蕪 <small>アレチ</small> ヲ	揖 <small>ヲヂキ</small> ス	庖厨 <small>イトリコ</small> ニ	黒絨 <small>クロビロード</small> ノ	
二文節以上	朱唇 <small>アカイクチビル</small> ヲ		苦笑 <small>イヤナワラヒ</small> シ		匆卒 <small>キガツカズ</small> ニ
		分娩 <small>ニワウム</small> ノ			

両側にあるふりがな

〔右側〕

〔左側〕

漢語(字音語)一漢語	丐兒 <small>ガイジ</small> ト <small>ゴジキ</small>	四顧 <small>シコ</small> <small>シハク</small>	雜沓 <small>ザツタフ</small> メ <small>コンサク</small>
	榻 <small>タフ</small> ニ <small>イス</small>	漏聲 <small>ロウセイ</small> <small>トケイ</small>	
漢語(字音語)一和語	暗淡 <small>アンダン</small> <small>マツクロ</small>	應 <small>オウ</small> ヲ <small>コダヘ</small>	顔 <small>ガン</small> ヲ <small>カホ</small>
	須臾 <small>シユニ</small> ニシテ <small>シバラク</small>	慄然 <small>リツペン</small> タラシム <small>ソツト</small>	
漢語(字音語)一二文節以上	糝景 <small>サンケイ</small> <small>カナシキケシキ</small>	熟視 <small>ジュクシ</small> シテ <small>トククリミテ</small>	貪婪 <small>タンラン</small> ナル <small>ヨクアカキ</small>
和語(字訓語)一和語	忙 <small>イソガ</small> ハシク <small>アハテ</small>	闌 <small>タケナ</small> ハナリ <small>フケ</small>	放 <small>ハナ</small> ツテ <small>ヒラク</small>
和語(字訓語)一外来語(外国語を含む)		企 <small>クワダ</small> テ <small>プロポーズ</small>	破 <small>ヤブ</small> ル <small>デスポーズ</small>

備考 1. 本文の調査単位は文節

2. この表には、人名、地名の例をはぶく。

以上のように、片側のふりがなも、両側のふりがなも、右側は、そのまま読み下せるが、左側は「赧無トシテ」「不暇不飾ノ」のように、意味を説明して読み下せないものがある。また右側の漢語・和語はその漢字の音訓を示す語であって、左側の漢語・和語とは性質が異なっている。「花柳春話」においてふりがなは、右側が本文の読みを示し、左側が意味を示している。

(3) 近代語資料の調査と探訪

本年度は、北海道函館市立図書館、東京都立大学図書館(明治コレクション)、

国学院大学図書館，静岡県立 図書館葵文庫，愛知教育大学図書館（チェンバレン文庫）を探訪調査した。東京都立大では平山輝男氏，国学院大では，中村啓信氏，葵文庫では，朝比奈豪氏，愛知教育大では，岡川恵学氏・荒木隆氏のお世話になった。（見 坊）



# 新聞の語彙調査

## A 目 的

婦人雑誌，総合雑誌，雑誌九十種と続けてきた語彙調査を，カードによる人為作業から電子計算機による自動処理に移して，データの処理量をふやし，語彙調査の結果を今日的課題の解決に役立つようにすることを目的とする。

## B 担 当 者

第一資料研究室の林四郎，石綿敏雄，田中章夫，南不二男，松本昭，および言語計量調査室の斎藤秀紀，木村繁(41年5月1日採用)がこれに当たり，第一資料研究室の柴崎香苗(42年3月15日退職)，沢田さち子(旧姓小林)，谷内レイ子(旧姓本多，41年11月1日退職)，小幡利子(41年11月1日採用)，益子芳江(42年3月16日採用)，言語計量調査室の神山典子，中野三千子，篠田美代子が研究作業をたすけた。プログラムの開発については，日立システム・エンジニアリングの山本武氏の助力を得たほか，機械のオペレートには，日立電子サービス社から電子計算機の保守員として派遣されている吉崎孝雄氏，大野智範氏の助力を得た。

## C これまでの研究経過

昭和38年度から電子計算機導入の準備を始め，40年度に漢テレと計算機が設置された。(漢テレは40年11月設置，電子計算機は41年1月設置，3月使用開始)40年度には，語彙調査処理プログラム開発の準備として，漢テレを入出力とする用例つき用語総索引作成のプログラム(名称“65カンソ”)を作り，これによって『くもの糸』の用例つき用語総索引を作った。

## D 本年度の調査研究作業

### 1 調査資料の準備

調査対象の母集団を41年1月1日から12月31日までの、朝日、毎日、読売、朝夕刊全紙面に含まれる語(推定約8,500万文節)としたので、この間の各紙、都内最終版を購入し整理した。

### 2 サンプリング

面積によるブロック・サンプリングによって、母集団から1/60の面積に相当するサンプルを抽出した。サンプル箇所の決定は電子計算機で行なった。(サンプリング法の詳細は別に出る報告書に書く)サンプル数は14,220ブロック。1ブロックに含まれる語数は平均約100語(文節)である。

### 3 サンプル区画指定

サンプル番号に従って紙面上にサンプル箇所を指定し、範囲指定のルールに従ってサンプルの範囲を枠づけした。14,220ブロック全部について指定を完了した。

### 4 長単位による語の分割

サンプル記事について、長単位分割ルールに従って、語の切れ目に線を入れた。全サンプルにつき作業完了。

### 5 層別の記入

各サンプルの属する層を注記した。層別は、次の4種の原理によって施した。この層別は、層別サンプリングのためにあらかじめ行なう層別ではなくて、あとで、語を所属カテゴリーに分類するために行なうものである。層別法は次のとおりである。

#### (1) 文種による層別(G) 17層

1 ニュース, 2 ニュース解説, 3 社説・コラム, 4 ニュースに連なる特集記事, 5 特別読みもの, 6 評論・論文, 7 実用知識読みもの, 8 探訪ルポ, 9 長期ニュース展望, 10 記録・通知, 11 紹介記事, 12 読者の作文, 13 コミュニケーション, 14 小説,

15 商業広告, 16 案内広告, 17 漫画

(2) 話題による層別(T)12層

1 政治, 2 外交, 3 経済, 4 労働, 5 社会, 6 国際,  
7 文化, 8 地方, 9 スポーツ, 10 婦人, 11 芸能娯楽, 12 広  
告(G 14から17までを合併したもの)

(3) 署名態度による層別(S)10層

1 無署名記事, 2 通信社記事, 3 冒頭署名記事, 4 外部者によ  
る末尾署名記事, 5 記者による末尾署名記事, 6 略号による末尾署  
名記事, 7 外電冒頭記名記事, 8 無署名だが社を代表する立場に  
ある筆者による記事, 9 無署名で外部者たることが明らかなもの。

10 T12に同じ

(4) 記事構成上の位置による層別(P)8層

1 見出し, 2 標題・欄名, 3 リード, 4 本文, 5 情報源・署  
名, 6 表, 7 写真・図・表などの説明, 8 T12に同じ

以上のうち, (1)~(3)は記事ごとにきまる区分であるが, (4)は, 1記事内  
での位置による区分である。層別注記も, 全サンプルにつき完了した。

6 漢テレ・タイプライティング用テキスト作成

単位分割, 層別記入および, 機械処理用特殊記号の記入の終わったサンプ  
ル記事を, 漢テレ作業員に見やすいように, 原稿用紙に転記した。転記し  
たものについて, そこまでの作業結果を検査した。転記作業は大部分完了  
したが, 検査は完了していない。

7 漢テレによる入力データの作成

漢テレタイピストが上記テキストを見て打鍵し, 電子計算機へのイン  
プットデータとなる紙テープを作成する。この作業に次の3段階がある。

(1) まず第一次データを作る。(2) 印字シートに校正を施し, タイピスト  
の打鍵の誤りを修正する。(3) データを電子計算機に入れることによ  
って, 漢テレの機械がおかした誤りである誤サン孔, 脱サン孔などを発見し,  
(次項プログラムの第2項参照), その誤りを修正打鍵して, 完全な入力

データを作る。

この作業は、1紙朝刊半年分(約14万語)のサンプルにつき、終了した。

## 8 語彙調査機械処理プログラムの作成

電子計算機による語彙調査の第一段階の業務として、原文を長単位に切ったままの段階、すなわち、活用形の修正もせず、同語異語の判別もしないままの形で見出し語が立つ語彙表を作成する。この形の語彙表を作成するまでのプログラムは、作成を完了し、12月初旬、少数のデータについてテストランを行なった。

このプログラムは、多くの部分に分かれるが、大きく分けると、次の4部分になる。

- (1) サンプリング・プログラム 調査母集団からサンプルを抽出するプログラム。
- (2) データ・チェック・プログラム 入力データを完全なものにするために、データ作成上の誤りを指摘するプログラム。
- (3) 語彙表作成プログラム データを読みこんで語彙調査を行ない、見出し語を特定の順に配列して語彙表を作成するプログラム。配列には、ある方式による五十音順と、使用度数順と、原則として二種類がある。
- (4) 漢字表作成プログラム データ中に含まれる漢字につき度数をかぞえ、用例につき文字表を作成するプログラム。

## 9 語彙表の作成

上記のとおり作成されたプログラムによって、一部のデータにつき実地処理を試みた。試験的に作成された語彙表は次のとおりである。

- 五十音順、出典つき語彙表(見出し語→漢テレ、出典→ラインプリンタ)
  - 五十音順、層別語彙表(見出し語→漢テレ、層別度数→ラインプリンタ)
  - 総度数順語彙表(見出し語→漢テレ、度数・順位→ラインプリンタ)
  - 総度数順、層別語彙表(見出し語→漢テレ、層別度数→ラインプリンタ)
- 漢字表のアウトプットも行なった。

## 10 分 析

分析が行なえる段階には、まだ達していないが、テストランに用いた小数データ(約2万語)について、分析の試行を行なった。これについては、近く出る報告書にしるした。

## 11 報 告

昭和42年3月14日、国立国語研究所の研究発表会(会場、国立教育会館)において、つぎのとおり発表を行なった。

新聞の語彙調査について	林 四 郎
語彙調査における語彙表作成上の問題	田 中 章 夫
言語情報処理における意味の取り扱い	石 綿 敏 雄

## E 今 後 の 予 定

42年度は、中間段階でのアウトプットを行なうとともに、短かい単位による作業に移る。

(林 四郎)

# 電子計算機による話しことば資料の 分析・処理の研究

## A 目 的

- 1 話しことば資料のファイル作成。
- 2 その資料における各種言語単位の現われ方（言語内，言語外の各種条件のもとにおける）の分析。

## B 担 当 者

南不二男，松本昭。（ともに第一資料研究室所属）

## C 使 用 資 料

昭和 38 年度に松江市で実施した「国民各層の言語生活の実態調査」のうち，ある市民の家庭内で行なわれた一日中の発話全部を録音したもの。（年報 15, 146 ページ～153 ページ，年報 16, 89 ページ～90 ページ参照）

## D 計 画

上記資料を文字化したテキストに，形態音韻論的，形態論的分析を施し，さらに種々の情報を付加したうえ，電子計算機に入力し，処理を行なう。具体的には，

- 1) テキストの磁気テープ作成
  - 2) 形態素および単語の用例つき索引の作成
- を，処理の一応の目標とする。

## E 本年度中の研究進行状況

- 1 音声表記テキスト完成(16 時間分全部)。

- 2 音素，形態音素の解釈分析一応完了（音声——音素——形態音素の変換規則設定）。
- 3 形態音素表記テキスト作成 5時間分すみ(午前6時～午前11時まで録音の分)。なお，このテキストには，形態素，単語および文にあたる発話の切れ目，発話番号，話し手，聞き手，文にあたる発話の種類についての情報が付加してある。表記のための使用文字は，H I T A C 3 0 1 0，64文字コード(ローマ字，数字，その他の記号)。
- 4 形態音素表記テキストの紙テープへのパンチ 上記5時間分すみ(226,150字)。日本ビジネス・コンサルタントへ依頼。
- 5 処理プログラム，その1 テキスト読みこみ。発話を単位とする sort のプログラム。40年度中に，山本武氏(現日立システム・エンジニアリング社員，当時日本ビジネス・コンサルタント社員で当研究所に出向)の協力を得て完成。
- 6 処理プログラム，その2 形態素，単語の sort のプログラム。おもに松本が担当し，3月末までに主要部分を完成。

(南)

# 社会構造と言語の関係についての 基礎的研究

## A 目的・意義

言語あるいは言語生活は、社会生活およびそれを規定している社会構造と密接な関係を持っている。その関係を明らかにするための基礎的準備的研究を行なおうとするものである。

比較的単純な構造を持つと思われる農村について、共通語生活と方言生活との交渉・接触の面を重視しつつ、言語およびその用法(の変動)と社会構造および社会生活(の変動)との関係を明らかにすることを目指している。

調査地点としては福島県伊達(だて)郡保原(ほばら)町地区および福島市郊外の茂庭(もにわ)地区を選んだ。

## B 担当者

飯豊毅一(音韻・文法を中心に言語および言語使用の面)、渡辺友左(語彙および社会構造、ならびに両者の関連の面)が担当し、河東はるみが作業を助けた。

## C これまでの作業の経過

昭和40年度(第一年度)においては音韻・文法の方言体系の概略の調査と一部の語彙体系(親族語および形容詞・形容動詞)の調査を行なった。

また、話し手の性・年齢・教養等の違いによって使用言語がどのように異なるかを調査するための録音採集を行ない、そのうちの8時間分について文字化およびカード採集を試みたが、この作業は本年度に持ち越された。

さらに社会構造の変動をみるために記録や各種統計表による概観調査を行なったが、これも本年度に継続する作業である。



## D 本年度の作業

大別して言語 および言語使用(の変動)の調査と社会構造 および社会生活(の変動)の調査との二つの面から研究を進めているが、本年度行なった作業はほぼ次の通りである。

### 1 言語および言語使用(の変動)の調査

#### 1. 1 音韻体系および文法体系の概略の調査

保原地区および茂庭地区の言語・言語使用(の変動)を考察するためには、まずその本来の方言体系を的確に把握しておくことが必要である。そこで、いわば準備的研究として、これらの地区方言の音韻体系、文法体系の概略の調査を面接調査と採集録音の分析とによって行ない、ほぼ完了した。この調査のために青森県西津軽郡金木町・秋田県大館市郊外等(8月末より9月上旬にかけて通じて約10日間)、福島県相馬市・岩手県大船渡市・岩手県雫石町等(2月末より3月上旬にかけて通じて約10日間)についても参照調査を行なった。

#### 1. 2 親族語・形容詞の語彙体系の調査

語彙について、その全容を把握することは困難である。そこでさし当って、親族語と形容詞についてその体系を明らかにすることを試みたのであった。その結果は「福島北部方言の親族語と形容詞の語彙体系」(ことばの研究—国立国語研究所論集 3—渡辺友左)として報告した。

#### 1. 3 録音資料の分析

話し手の性・年齢等の違いによって使用言語がどのように異なるかを調査しようとした。前年度採集した録音資料を文字化し、さらにカード化した。カード採集を行なった録音資料は保原地区・茂庭地区の老人男・老人女・青年男・青年女で、計8時間分である。いずれも学歴の低い人がくだけた話し合いを行なう場面である(老人—60歳以上、青年20歳前後)。

これらに含まれている話者ごとの文・文節数は次のようになる。

表1 分析対象の文・文節数

(1) 保原町

	姓 名	年 齢	文 数	文 節 数	一文平均数
老人男	渡 辺 吉 五 郎	72	126	1,089	8.6
	笠 原 喜 一	60	306	3,411	11.1
	木 戸 福 次 郎	67	89	615	6.9
	渡 辺 治 作	64	14	58	4.1
	渡 辺 昭 治	38	10	36	3.6
	合 計		545	5,209	9.6
老人女	大 友 タ ネ	59	500	2,095	4.2
	一 条 ユ ウ	61	306	1,690	5.5
	高 松 ヤ ス	59	208	744	3.6
	合 計		1,014	4,529	4.5
青年男	小 林 栄 重	21	322	1,234	3.8
	高 橋 雄 二	21	552	2,227	4.0
	井 間 弘 重	23	462	1,486	3.2
	合 計		1,336	4,947	3.7
青年女	一 条 キ イ 子	20	698	1,983	2.8
	齋 藤 タ カ ヨ	20	445	1,053	2.4
	土 田 楓 子	21	490	1,321	2.7
	合 計		1,633	4,357	2.7
総 計		4,528	19,042	4.2	

(2) 茂庭

	姓 名	年 齢	文 数	文 節 数	一文平均数
老人男	小 関 芳 之 助	65	341	1,948	5.7
	鈴 木 栄 徳	70	60	301	5.0
	齋 藤 松 太 郎	67	504	3,149	6.2
	合 計		905	5,398	6.0
老人女	鈴 木 ト キ	83	401	1,719	4.3
	鈴 木 正	78	352	1,923	5.5
	小 関 ウ ン	73	195	912	4.7

	姓 名	年齢	文 数	文 節 数	一文平均 文 節 数
	合 計		948	4,554	4.8
青年男	鈴木 忠司	24	165	1,384	8.4
	山田 広美	21	320	2,310	7.2
	山田 次男	22	190	1,363	7.2
	合 計		675	5,057	7.5
青年女	鈴木 清子	23	379	1,198	3.2
	小関 絹子	23	310	1,803	5.8
	合 計		689	3,001	4.4
総 計		3,217	18,010	5.6	

総文数・総文節数

(分析対象+不明瞭なため分析対象より除いたもの)

(1) 保 原 町

	姓 名	年齢	総 文 数	総 文 節 数	一文平均 文 節 数
老人男	渡辺 吉五郎	72	133	1,091	8.2
	笠原 喜一	60	310	3,412	11.0
	木戸 福次郎	67	93	616	6.6
	渡辺 治作	64	16	59	3.7
	渡辺 昭治	38	10	36	3.6
	合 計		562	5,214	9.3
老人女	大友 タネウ	59	510	2,100	4.1
	一条 ユウ	61	317	1,694	5.3
	高一 ヤス	59	216	747	3.5
	一 同		4	4	1.0
合 計		1,047	4,545	4.3	
青年男	小林 栄重	21	338	1,248	3.7
	高橋 雄二	21	573	2,240	3.9
	井 間 弘重	23	480	1,498	3.1
	合 計		1,391	4,986	3.6

	姓 名	年齢	総 文 数	総 文 節 数	一 文 平 均 数
青 年 女	一 条 キ イ 子	20	726	2,006	2.8
	齋 藤 タ カ ヨ	20	477	1,082	2.3
	土 田 槇 子	21	508	1,343	2.6
	合 計		1,711	4,431	2.6
総 計			4,711	19,176	4.1

注 次のように一文全ききとれないものは総文節数からも除いてある。

老 人 男	文数	老 人 女	文数	青 年 男	文数	青 年 女	文数
渡辺吉五郎	5	大友タネ	6	小林栄重	8	一条キイ子	7
笠原喜一	3	一条ユウ	7	高橋雄二	8	齋藤タカヨ	10
木戸福次郎	3	高松ヤス	5	井間弘重	7	土田槇子	2
渡辺治作	1						
	12		18		23		19

(2) 茂 庭

	姓 名	年齢	総 文 数	総 文 節 数	一 文 平 均 数
老 人 男	小 関 芳 之 助	65	347	1,954	6.6
	鈴 木 栄 徳	70	65	307	5.2
	齋 藤 松 太 郎	67	512	3,156	7.4
	話 者 不 明		1		
合 計			925	5,417	6.9
老 人 女	鈴 木 ト キ	83	426	1,759	4.9
	鈴 木 正	78	370	1,931	6.2
	小 関 ウ ン	73	202	927	5.1
	一 同		2	2	1.0
合 計			1,000	4,619	5.4
青 年 男	鈴 木 忠 司	24	168	1,421	10.0
	山 田 広 美	21	323	2,313	8.4
	山 田 次 男	22	198	1,380	8.7
	合 計			689	5,114

	姓 名	年齢	総 文 数	総 文 節 数	一文平均 文 節 数
青年 女	鈴木清子	23	385	1,201	4.0
	小関絹子	23	320	1,810	6.2
	合 計		705	3,011	5.0
総 計			3,319	18,161	5.5

注 次のように一文全くききとれないものは総文節数からも除いてある。

老人男	文数	老人女	文数	青年男	文数	青年女	文数
鈴木栄徳	2	鈴木トキ	11	山田広美	1	鈴木清子	3
斎藤松太郎	1	鈴木正	11	山田次男	2	小関絹子	4
話者不明	1						
	4		22		3		7

なお、飯豊・渡辺兩名の「ハー」「ハハー」「アー」「ソー」「ホー」「ソー」などのあいづち文はかなり多いので、この文字化資料には必ずしも記載していない。あいづち文の使用の状況は次のようになっている。

表 2 あ い づ ち 文

(1) 保 原 町

	氏 名	あ い づ ち			総 文 数	あいづち 文の使用 率 (%)
		文字化	省 略	計		
老 人	渡辺吉五郎	3	0	3	133	2.3
	笠原喜一	2	0	2	310	0.6
	木戸福次郎	11	0	11	93	11.8
	渡辺治作	0	0	0	16	0
	渡辺昭治	1	0	1	10	10.0
	飯 豊	46 (8.9%)	470 (91.1%)	516	550	93.8
男	渡 辺	11 (19.6%)	45 (80.4%)	56	74	75.7
	合 計	74	515	589	1,186	49.7

	氏名	あ い づ ち			総文数	あいづち文の使用率(%)
		文字化	省略	計		
老人女	大友タネ	90	0	90	510	17.6
	一条ユウ	39	0	39	317	12.3
	高松ヤス	42	0	42	216	19.4
	飯豊	85 (25.1%)	253 (74.9%)	338	370	91.2
	渡辺	16 (28.1%)	41 (71.9%)	57	90	63.3
	合計	272	294	566	1,503	37.7
青年男	小林栄重	13	0	13	326	3.9
	高橋雄二	35	0	35	573	0.6
	井岡弘重	17	0	17	480	3.5
	飯豊	54 (22.6%)	185 (77.4%)	239	264	90.5
	渡辺	16 (30.2%)	37 (69.8%)	53	130	40.8
	合計	135	222	357	1,783	20.0
青年女	一条キイ子	142	0	142	726	19.6
	斎藤タカヨ	116	0	116	477	24.3
	土田榎子	114	0	114	507	22.5
	飯豊	228 (61.0%)	146 (39.0%)	374	466	80.3
	渡辺	26 (44.8%)	32 (55.2%)	58	167	34.7
	合計	626	178	804	2,343	34.3
総計	1,107	1,209	2,316	6,815	29.4	

(2) 茂庭

	氏名	あ い づ ち			総文数	あいづち文の使用率(%)
		文字化	省略	計		
老人	小関芳之助	35	0	35	347	10.1
	鈴木栄徳	17	0	17	65	26.2
	斎藤松太郎	23	0	23	512	14.5
	飯豊	28 (6.2%)	422 (93.8%)	450	470	95.7
	合計					

	氏名	あ い づ ち			総文数	あいづち文の使用率 (%)
		文字化	省略	計		
男	渡 辺	8 (5.7%)	133 (94.3%)	141	176	80.1
	合 計	111	555	666	1,570	42.4
老人女	鈴木 ト キ	30	0	30	426	7.0
	鈴木 正	25	0	25	370	6.8
	小 関 ウ ン	19	0	19	202	9.4
	飯 豊	26 (6.1%)	402 (93.9%)	428	458	93.4
	渡 辺	29 (18.7%)	126 (81.3%)	155	207	74.9
	合 計	129	528	657	1,663	39.5
青年男	鈴木 忠 司	3	0	3	168	1.8
	山田 広 美	5	0	5	323	1.5
	山田 次 男	1	0	1	198	0.5
	飯 豊	10 (1.8%)	560 (98.2%)	570	585	97.4
	渡 辺	11 (6.2%)	166 (93.8%)	177	206	85.9
	合 計	30	726	756	1,480	51.1
青年女	鈴木 清 子	5	0	5	383	1.3
	小 関 絹 子	13	0	13	320	4.1
	飯 豊	14 (4.6%)	291 (95.4%)	305	421	72.4
	渡 辺	10 (7.2%)	128 (92.8%)	138	214	64.5
	合 計	42	419	461	1,338	34.5
総 計		312	2,228	2,540	6,021	23.7

これらの文字化資料は文法・音韻・語彙の分析を行なうためにカード化された。すなわち音韻・語彙はそれぞれ、ほぼ文節ごとに、文法は文ごとにカード化された(ただし茂庭地区は音韻・語彙は共通のカードを用いることにした)。カード枚数は全体で約6万1千枚である。資料の整備に多くの時間を要したので、カードを用いた分析は10月以降行なわれた。

## 2 社会構造の調査

本年度も前年度に引き続き記録や各種統計表による概観調査を行なった。すなわち、農林省発行の『農業センサス』、総理府発行の『国勢調査報告書』、通産省発行の『商業統計表』『工業統計表』をはじめとする既刊資料を利用し、主として産業・職業構造についての基礎的調査を行なった。

また既存資料の収集につとめた。

## 3 社会構造と語彙およびその用法の構造との関連について

親族語彙はかつての社会構造、とりわけ親族組織ときわめて密接な関係にある。どのような親族語彙があり、またそれらがどのように用いられているかということは、その社会にどのような親族組織があり、それが生活の中にどのように機能していたか、あるいは機能しているかということと深い関係を持っていると考えられる。

そこで前年度親族語彙の体系を調査したのに引き続き、その用法を調査し、一方、親族組織とその社会生活における機能とを調査して、両者の関係をみようと試みた。さらにこの調査を深めるために秋田県大館市郊外(8月末から9月上旬にかけて約10日間)、岩手県岩手郡葛巻町(12月上旬約10日間)、山形県西村山郡河北町(3月上旬約一週間)についても参照調査を行なった。

## E 今後の予定

来年度以降は引き続き、社会構造とその変動について調査を進め、また言語使用の実態を把握しつつ、両者の関係を追究しようとしている。

(飯 豊)



# 現代語の表記法に関する調査研究

## A 調査の目的・意義

国語の正書法を確立するうえで役立つ基礎資料を得るために、国語の文字・表記法に関する諸問題を調査・研究する。

## B 担当者

調査研究の担当者は、斎賀秀夫・土屋信一の両名であり、菅野裕子が作業を助けた。

## C これまでの作業経過

昭和37年度以降、「現代雑誌九十種の用語用字調査」で得られた資料に基づいて、漢字ならびに表記法に関する調査研究を行ってきた。37年度は、「使用率順漢字表」および「用法別漢字表」を作成し、若干の分析結果を加えて、国研報告22『現代雑誌九十種の用語用字』（第二分冊 漢字表）を刊行した。38年度は、漢字の音訓使用の実態を調査し、その結果の一部を『年報15』に報告した。39・40両年度は、主として、送りがなと、漢字・かなの書き分けの問題を採りあげ、その実態を調査し、分析した。このうち、「送りがなのゆれている語例」の一覧表を『年報16』に掲げた。

以上は、書かれた文字資料に基づいて表記を分析したものであるが、国語表記についての問題点を明らかにするためには、そのほかに、実際に文字活動をいとなむ読み手および書き手を対象として、その表記の実態や、文字・表記に対する意識・態度についても知る必要がある。この見地から、40年度に、新たに「文字使用の実態調査」を採り上げ、送りがなの問題を中心にごく小規模の準備的調査を実施した。

## D 本年度の作業

### 1 文字使用の実態調査

本年度は、文字活動をいとむ機会の多い一般成人千名内外を対象として本調査を実施する予定であった。しかし、前年度末に行なった準備調査（千葉県下各市町村の広報担当者 59 人。『年報 17』参照）の結果を検討したところ、調査票の構成や質問形式および分析方法等にまだ問題点が多く残ったので、当初の計画を変更し、本調査にはいる前に、もっと広範囲の被調査者について、前調査を行なうことにした。なお、本調査のさいの大量集計作業に電子計算機を利用したいと考え、前調査の実施期間中にその具体的方法を研究することにした。

#### (1) 前 調 査

前調査は次の対象について、すべて集合調査で行なった。

(調査対象)	(調査実施日)	(人数)
東京教育大学学生(文学部 41・教育学部 24・農学部 1・研究生 5)	41. 7. 4	71 人
東京都北多摩郡町村議会速記者	41. 7. 11	19 人
東京都職員(広報関係)	41. 7. 14	34 人
神奈川県職員(一般中級職)	41. 9. 22	58 人

計 182 人

前調査の調査票は、前年度の準備調査に使ったものを修正・増補した。調査語は準備調査では 30 語であったが、この前調査では 62 語とした。質問形式も、準備調査では、選択枝法と、補填法を併用したが、今回は、そのほかに、最初にかな書きの文を与えて漢字まじり文に書き改めさせるという方法をも加えた。これら質問方法の差によって、結果にどの程度の違いが見られるかを検証しようとしたためである。

この前調査の結果、送りがなについて、次のような問題点が明らかになった。

- (i) 社会的要因との関係——年齢・学歴・職業などの社会的要因のうち、どの要因が個人の送りがなのつけ方を決定づけるのかは、この前調査の被験者の範囲では十分にはとらえられなかった。年齢別に見ると、高年齢層は若年齢層に比べて送りがなを少なく送るという傾向が一往認められるが、若年齢層の被験者が少なかったため、十分に立証できなかった。(このため、本調査では、中学生・高校生の被験者を加えることにした。これは、学校教育との関係を見ようとするねらいもある。)また、日常文字に接する度合いの多い人ほど、また、文字に関係した仕事の経験年数が多い人ほど、送り方に法則性があるという傾向が認められたが、この点についても、本調査で、被験者の範囲を広げることによって、確かめることにした。
- (ii) 個人の中に見られる法則性——前調査の結果を個人について見ると、同じ種類の語を、いつも同じ法則で送っているとはかぎらないという傾向が認められた。つまり、送りがなのゆれは、社会全体の中でのゆれのほかに、個人の中に存するゆれも認められるわけである。したがって、個人の内部で送りがながどの程度に法則性をもつものであるか、または、まったく法則性のないものなのか、という角度からの分析も必要であることが確認された。
- (iii) 読むときと書くときとの関係——読む立場では多く送る方式を容認する人でも、実際に書く立場では送り方が少なくなるという傾向が一般に認められるものと予想されたが、前調査の結果では、若年齢層の中に、それと逆の傾向も見られた。この点についても、若年齢層の被験者をふやすことによって確かめなければならない。
- (iv) 送りがなに対する関心・態度——前調査の範囲では、ふだん文章を書くとき、送りがなのつけ方について「迷う」と答えた被験者の方が「迷わない」と答えた人より圧倒的に多かった。また、内閣告示の「送りがなのつけ方」に対しては、「知っている」と答えた人が「知らない」と答えた人より多かった。ただし、「知っている」と答えた人でも、実際にその方針

どおりに送りがなをつける人は非常に少なかった。本調査では、個人の送りがなに対する関心・態度と、実際の送りがな表記との関連について、さらに深く分析する必要がある。

## (2) 本 調 査

前調査の結果、本調査の規模は、若年齢層を加え、全体として三千人程度の被験者を対象にすることにした。後述のように、機械力を利用した集計方法に一往の見通しがつけられたことも、規模を大きくした理由の一つである。被験者の内訳は、大体中学生、高校生、大学生をそれぞれ700～800人、社会人（主として、ふだん文字に接する機会の多い人）を1,000人程度予定している。

集計方法は、検討の結果、U. L. P 磁気穿孔装置を使用し、電子計算機 HITAC 3010 によることに決定した。

調査票は、前調査のものを一部修正し、調査語も46語にしぼり、質問形式も選択技法一本とした。これらの変更は、前調査の結果の検討と集計用カードの制約とから出たものである。

本年度じゅうに、まず中学生について調査することとし、次の三校で調査を実施した。

(調査実施校)	(調査期日)	(1年)	2年	3年)	(合計)
東京都北区立稲村中学校	42. 3. 9	95人	85人	78人	258人
東京都江東区立砂町中学校	42. 3. 12	89人	86人	74人	249人
東京教育大学附属中学校	42. 3. 9～13日	81人	78人	80人	239人
				計	746人

高等学校生徒・大学生・社会人を対象とする調査は、次年度に行なり予定である。

### 2 戦後の表記法の変遷に関する準備的調査

近い将来に、漢字および表記の経年的調査を実施するさいの準備作業として、次の作業ならびに小調査を実施した。

#### (1) 電子計算機による大量用字調査の方法の検討

漢字および表記の経年調査のためには、大量のデータを必要とするので、それを電子計算機によって処理させる方法について、研究を開始した。

(2) 言いかえ・書きかえ集のカード作成

戦後、文部省その他の官庁、新聞社、新聞協会等で個々に作成された、表外漢字を使った語の言いかえ・書きかえの資料を集め、それを語別にカードにとり、五十音順に排列した。現在までに作成したカードは、約四千枚であるが、今後も、順次、増補していく予定である。

(3) 新聞・雑誌の新表記への移行時期の調査

戦後のおもな新聞・雑誌について、新表記への移行時期を調べ、記録した。ここで新表記としたのは、とりあえず形式的に判別できるものとして、現代かなづかい、漢字の新字体、拗促音の小活字使用の3項目である。

(4) 作家の用字法の変遷に関する小調査

調査項目、調査時点のとり方を検討するさいの資料の一つとして、小規模の経年調査を実施した。調査対象として、『文芸春秋』が毎年発表している芥川賞の、選考委員によって書かれた「選考経過」の文章を選んだ。この文章は、昭和24年9月号から昭和42年3月号までの18年間に、春秋各1回ずつ、延べ36回掲載され、その間に執筆した選考委員は、延べ17人にのぼる。そのうち、滝井孝作、舟橋聖一、石川達三、川端康成、丹羽文雄の5氏は、18年間引き続いて執筆しているので、戦後の用字法の変遷をみるには好適な材料と考えられる。これら作家の用字法が、新聞・教科書等で実施されている用字法とどういふ点で異なっているか、また、社会の新しい用字法の影響を受けて時代によって変化しているかどうかについて、概観的にとらえてみようというのが、この小調査のねらいである。

調査項目は、17人全体については、

- (i) 新表記(現代かなづかい、新字体、拗促音の小書き)への移行時期
- (ii) 漢字・かな・ローマ字などの比率
- (iii) 表外漢字・表外音訓の使用率

の3項目について調べ、さらに、上記の5氏については、

(iv) 表外漢字・表外音訓の字種と用法

(v) 語または語の種類による漢字・かなの使い分け

の2項目について、細かく調べた。以上の調査結果のうちから、二三の点について述べる。

【旧かな(歴史的仮名遣)から新かな(現代かなづかい)への移行】

雑誌『文芸春秋』は、昭和32年8月号の巻末「編集だより」で、この号から新かな・新字体を採用するという声明を出した。もっとも、それには「ただし、はっきりした意見をもって旧かな、旧字体をする筆者の意志はなるべく尊重するつもりである」という注釈がついている。<sup>(注)</sup>この芥川賞「選考経過」の文章におけるかなづかいを見ると、上記の声明が出される以前に、すでに新かなに移行した作家が3人ある。坂口安吾(25年9月号から)、舟橋聖一(29年3月号から)、井上靖(32年3月号から)の3氏である。他の作家のかなづかいは、32年9月号掲載のものまでは、すべて旧かなであるが、33年3月号以降は、次の5回を除き、すべて新かなに移行している。例外的に旧かなになっているのは、宇野浩二2回(35年3月号と同年9月号)、石川淳1回(39年3月号)、舟橋聖一1回(41年9月号)、滝井孝作1回(42年3月号)の計5回だけである。したがって、これらの作家の他の号、および他の作家については、最初から原稿が新かなで書かれていたか、あるいは旧かなの原稿を編集部で新かなに改めたかのどちらかである。18年間のす

---

(注) この注釈は、原則として文芸作品にかぎって適用されている。たとい作家の文章であっても、この「選考経過」のようなものは文芸作品とは認められないので、編集部で表記を改める可能性があるわけだ。しかし、実際にはかなづかいと漢字の字体を改める程度で、表外漢字をかなにしたり、別の漢字におきかえたりすることはないようである。(文芸春秋社調査部長薄井恭一氏、総務局付大倉雄二氏の御教示による。)このことは、42年3月号掲載のものについて、原稿と逐一対照した結果でも確かめられた。

すべての文章について、原稿のかなづかいが新旧のどちらであったかを調べることは、今日では不可能であるが、ただ、42年3月号掲載の11作家の文章については、幸い、文芸春秋社の厚意で、原稿を一見することができた。原稿と活字になったものとを逐一对照した結果は、次のとおりであった。

原稿が旧かなで活字面が旧かな……滝井孝作(1人)

〆 旧かな      〆 新かな……三島由紀夫, 石川淳, 川端康成, 中村光夫(4人)

原稿が新かなで活字面が新かな……井上靖, 石川達三(註), 丹羽文雄(註), 永井竜男, 大岡昇平, 舟橋聖一(6人)

滝井氏の文章が旧かなで活字になったのはこの号だけであるが、担当者の話によれば、筆者の希望があったからだという。それにしても、現在では、最初から新かなで原稿を書く作家が何人かあるという事実は、注目していいだろう。

#### 【漢字を使う割合と、表外漢字・表外音訓を使う割合】

18年間に前後して掲載された17作家の全文章について集計した結果を表1に示す。掲載回数(総字数)に大きい差はあるが、一往、漢字を使う割合の多い順に排列した。

○\*印は、18年間継続している作家を示す。

○表外字・表外音訓の項では、全体の比率(漢字総数に対する百分比)のほかに、人名・地名・題名に使われたものを除いた場合の比率を( )の中に示した。「選考経過」の文章の性格上、芥川賞候補の作品名・作

---

(注) 石川、丹羽両氏の原稿は、全般的には新かなで書かれているが、部分的に旧かながまじっている。石川氏は、「～テイル」(補助動詞)の場合にかぎって「ゐる」と書いているし、丹羽氏は「書きなほす」という1例があった。もちろん、いずれも活字では新かなに改められている。

表 1 漢字・かなの割合と、表外漢字・表外音訓の比率(表外字・表外訓の比率は漢字総数に対する百分比)

作家	回数	掲載の期間	総字数	漢字	ひらがな	カタカナ	ローマ字	洋数字	表の比率	表外訓の比率
大岡昇平	2	41.9~42.3	1,307 100.0	539 41.2	751 57.5	17 1.3	—	—	4.2 (1.8)	3.1 (1.4)
* 滝井孝作	36	24.9~42.3	31,644 100.0	12,513 39.6	18,106 57.3	1,017 3.2	8 0.03	—	5.8 (3.3)	5.6 (3.2)
永井竜男	18	33.9~42.3	7,552 100.0	2,980 39.5	4,443 58.9	124 1.7	—	—	5.2 (2.9)	3.2 (2.1)
井上靖	24	30.3~42.3	13,978 100.0	5,348 38.2	8,376 60.0	254 1.8	—	—	5.3 (2.4)	5.2 (2.4)
佐藤春夫	25	24.9~37.3	19,508 100.0	7,419 38.0	11,789 60.4	299 1.5	1 0.01	—	6.2 (4.0)	4.1 (2.5)
* 川端康成	32	24.9~42.3	20,284 100.0	7,672 37.8	2,403 61.2	209 1.0	—	—	4.5 (1.0)	3.7 (1.1)
高見順	7	37.9~40.9	5,213 100.0	1,970 37.8	3,103 59.5	140 2.7	—	—	3.5 (1.3)	3.8 (0.9)
* 舟橋聖一	36	24.9~42.3	30,144 100.0	11,345 37.7	18,047 59.7	746 2.5	—	6 0.02	5.7 (3.4)	5.8 (3.2)
井伏鱒二	9	33.9~37.9	3,113 100.0	1,133 36.4	1,954 62.8	26 0.8	—	—	6.2 (3.9)	2.3 (1.1)
中村光夫	23	31.3~42.3	15,818 100.0	5,643 35.6	10,012 63.4	163 1.1	—	—	5.0 (3.0)	3.6 (1.5)



*石川達三	35	24.9~42.3	25,664 100.0	9,079 35.3	16,317 63.6	268 1.0	—	—	3.7 (2.3)	2.6 (1.8)
岸田国士	8	24.9~29.3	5,006 100.0	1,754 35.0	3,201 63.9	51 1.0	—	—	4.8 (2.5)	5.4 (3.0)
坂口安吾	10	24.9~29.3	5,366 100.0	1,822 34.0	3,341 62.3	203 3.8	—	—	4.0 (1.8)	3.8 (2.3)
三島由紀夫	2	41.9~42.3	1,387 100.0	472 34.0	859 62.0	56 4.0	—	—	3.4 (3.0)	3.7 (2.0)
*丹羽文雄	36	24.9~42.3	24,002 100.0	8,150 33.9	15,490 64.6	361 1.5	—	1	0.004	5.4 (2.1)
宇野浩二	25	24.9~36.9	37,310 100.0	11,970 32.1	24,578 65.8	762 2.1	—	—	6.6 (3.5)	4.9 (2.6)
石川淳	10	37.9~42.3	5,521 100.0	1,362 24.7	4,059 73.5	100 1.8	—	—	4.3 (2.7)	2.0 (0.9)
合 計			252,817 100.0	91,171 36.1	156,834 62.0	4,796 1.9	9	0.004	7	0.003
									5.3 (2.8)	4.4 (2.3)

家名が数多く文中に現われるので、個人差を見るには、それらを除いた比率を検討する必要があると考えたからである。

表1の結果を見ると、作家の漢字を使う割合には、かなりの個人差のあることがわかる。また、漢字の使用量は、かならずしも表外漢字・表外音訓の使用量を反映するとはかぎらないようである。たとえば、滝井、佐藤、舟橋の三氏などは、漢字も多く使い、かつ表外漢字も比較的多く現われるが、大岡、川端、高見の三氏などは、漢字を多く使うわりには、表外漢字・表外音訓の使用が少ないようである。その反対に、三島、丹羽、宇野の三氏などは、漢字の少ないわりに表外漢字・表外音訓の使用が比較的多めである。これは、漢字の使用量だけでなく、個々の漢字の使い方も、個人差が大きいことを示すものであろう。

\*印をつけた5人の作家については、18年間を通じて、どんな表外漢字・表外音訓を何回使っているかという集計をしたが(注)、その結果の一部を表2に掲げる。これは、5人の表外漢字の結果を合算した場合の上位12字について書き出したものであるが、5人の内訳を比較すれば、そこにも、やはり個人差の著しいことが認められるだろう。

(注) 5人の作家が18年間に使用した表外漢字、表外音訓の字数は次のとおりである。

作家	内 訳		表 外 漢 字		表 外 音 訓	
	異なり字数	延べ字数	異なり字数	延べ字数		
滝井 孝作	274	723	146	655		
川端 康成	129	345	43	272		
舟橋 聖一	269	645	132	620		
石川 達三	123	339	75	225		
丹羽 文雄	176	439	80	370		
(合計)	(516)	(2,491)	(263)	(2,142)		

表 2 5人の作家のよく使う表外漢字 (12字)

漢字	度数	滝井	川端	舟橋	石川	丹羽
篇	157	57	9	18	30	43
云	148	64	—	57	25	2
銓	38	6	3	7	22	—
僕	32	14	—	17	—	1
尚	36	25	1	6	—	4
或	36	7	5	8	9	7
誰	29	3	2	10	10	4
頃	13	2	—	7	3	1
慾	12	1	—	3	7	1
倆	12	5	—	—	6	1
廻	12	2	—	7	3	—
惹	12	4	2	6	—	—

<備考>

篇……「短篇・五篇」などと使う。代用字として「編」を使う例はない。

云……丹羽氏の2例は「云々」。動詞<いう>の表記に、川端・丹羽両氏は「云」を使わず、反対に舟橋・滝井両氏は「言」を使わない。石川氏は「言」「云」両方を使うが、38年9月号以降は、「言」だけである。

銓……「銓衡」と使う。ただし、川端氏は、27年、舟橋氏は30年までの用例しかなく、それ以後は、「選考」と書いている。石川氏は、ほかに「詮衡」と書いたのが3例(27年、40年、42年)ある。

尚……川端1、丹羽4の例は、いずれも人名。副詞<なお>に使うのは、滝井・舟橋両氏のみ。

慾……「愛慾・意慾」など。ただし、石川・滝井両氏には、「愛欲」という表記例もある。

【5作家についての時代による変化】

18年間継続して現われる5人の作家について、その時代による変化があるかどうかを検討してみた。まず、全文字数の中に占める漢字の比率と、漢字総数に対する表外漢字・表外音訓の比率(ここでは、人名・地名・題名に使われたものは除いた数字)を、9年間ずつ、前期・後期の2期に分けて集計してみると、表3のようになる。

表3 漢字・表外漢字・表外音訓の比率の推移

	滝井孝作			川端康成			舟橋聖一		
	漢字	表外字	表外訓	漢字	表外字	表外訓	漢字	表外字	表外訓
前期 (24.9~33.3)	38.4	3.7	2.9	38.5	0.9	1.1	37.6	3.1	2.8
後期 (33.9~42.3)	40.6	3.0	3.3	36.8	1.1	1.0	37.7	3.6	3.4

	石川達三			丹羽文雄		
	漢字	表外字	表外訓	漢字	表外字	表外訓
前期 (24.9~33.3)	35.4	2.3	1.7	34.6	2.2	2.0
後期 (33.9~42.3)	35.4	2.4	1.8	33.0	1.8	1.9

表3を見ればわかるように、川端・丹羽両氏に、わずかに漢字の比率の減少が認められる程度であって、全体的には、時代による変動がほとんど認められない。(18年間を6年間ずつ3期に区切って集計しても、結果は同じである。)新聞についての従来の調査結果などを見ると、たとえば、昭和24年の朝日新聞の調査(活字使用度数調査)から、昭和28年の毎日新聞の調査(本社使用活字使用度数調査表)までのわずか4、5年の間に、漢字の使われる割合が10パーセント近くも減少している事実があるが、個人の作家に関するかぎり、そういう時代的影響は、ほとんどないと考えていいだろう。

しかし、以上のことは、漢字の分量に関してであって、個々の作家の、一々の語の表記について細かく検討すると、そこに時代による推移の跡が認められる例も、いくつかある。その一端は、表2の備考に示した点にもうかがえるが、そうしたデータを5人の作家のあらゆる語について確実につかむためには、厳密には語彙調査の方法をとらなければならない。しかし、今年度の作業としては、それだけの余裕がないので、あらかじめ、個人差のありそうな項目、また、個人の中で推移の見られそうな項目をマー

くして、事例的に追跡し記録するにとどまった。

マークしたおもな項目は、

○漢語のかな書き、漢語のまぜ書き、漢語のおきかえ漢字

○かたかな書きの範囲

○形式名詞 補助動詞 接尾語 接尾的動詞 助詞 助動詞 副詞 連  
体詞 接続詞等における漢字・かなの書き分け

等であるが、ここでは、その一つの例として、滝井孝作氏の「いう」という動詞の表記の跡を示すことにする。

滝井氏は、18年間の文章の中で、実質動詞としての「いう」を43回、補助動詞としての「(と)いう」を133回使っているが、その表記の推移の跡を見ると、表4のようになる。(25年～41年までは、春秋2回掲載されたものを、便宜上1回にまとめて表示する。また、かなづかいの差は無視した。)

表4 滝井孝作氏の「いう」の表記

表 記		年																			計
		24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	
実質 動詞	云	う	1	6	3	2	1	4	3	5	2	3	1	1	2	1	2	2	-	1	42
	い	う	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
補助 動詞	(と)云	う	4	1	4	2	1	6	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	21	
	(と)い	う	12	2	8	3	7	7	5	15	5	5	4	6	3	4	3	5	7	5	6

表4を見ると、滝井氏は、かつては実質動詞にも補助動詞にも「云」を使っていたが、昭和30年を境にして、実質動詞は「云う」、補助動詞は「いう」と書き分けるようになったことが知られる。

以上は、ほんの一例を示したにすぎないが、5人の作家について上記の項目を調査した結果を総合すると、大体、次のことが言えそうである。

- ① 漢字の用法その他、語の表記法には個人差が大きく認められる。
- ② 個人の中における時代的な変化は、それほど顕著には認められない。
- ③ ただし、形式名詞・補助動詞・副詞・接続詞などのある語については、滝井氏の「いう」の表記のように、かつて漢字表記だったものでか

な書きに変化した例が、いくつか認められる。

以上が、今回の小調査の概要であるが、これらの結果から、将来、雑誌を資料として表記の経年調査を企画するさいの、いくつかの基本的資料が得られたと思っている。

## E 今後の予定

- (1) 文字使用の実態調査…… 42年度の上半期じゅうに、高校生・大学生・社会人を対象とする調査を実施し、下半期にそれを集計・整理して分析し、その結果を中心に報告書の原稿を年度末までにまとめる予定である。
- (2) 新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究……第一資料研究室と言語計量調査室が実施している新聞語彙調査のうち、漢字および表記の調査研究を、わが研究室が担当することになり、42年度から3年計画の予定で着手する。したがって、戦後の表記法の変遷に関する準備的調査は一時中断の形になるが、次期の大量用字調査に備えて、必要な資料の収集は続けていく予定である。

(斎 賀)

## 国語関係文献の調査

国語に関する学問の一般を知り、あわせて学界の動向や世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、本年度も、昭和41年1月から12月までの刊行の図書・雑誌・新聞についての文献調査を行なった。これらの文献目録はその他の資料・情報とともに、当研究所編『国語年鑑』(昭和42年版)に掲載されている。

以下、その各々について分類し、冊数および点数により、大まかな傾向を示すことにする。( )内に前年の数を示し、今年のものと比較できるようにした。

### A 刊行書の調査

国語関係の刊行書について、書名・著(編)者名・発行所・発行年月・型・ページ数、ならびに内容を調べ、カード化し、総数407冊の分類目録を作成した。

国語(学)		方言・民俗	26 (27)
国語一般	14 (18)	コミュニケーション	
国語史	19 (15)	コミュニケーション一般	5 (6)
音声・音韻	8 (8)	言語技術(話し方・書き方)	20 (88)
文字・表記	10 (12)	情報処理	2 (3)
語彙・用語		マス・コミュニケーション	11 (15)
語彙・用語	9 (5)	国語国字問題	7 (3)
人名・地名	6 (9)	国語教育	
文法	8 (13)	国語教育一般	13 (11)
文章・文体	10 (9)	学習指導一般	14 (16)
		語彙・文字教育	8 (2)

文法教育	1 (2)	特殊辞典	2 (5)	
聞く・話す	1 (1)	索引	6 (4)	
読む・読書指導	11 (9)	資 料		
書く・作文指導	5 (12)	資料	39 (5)	
文学教育	6 (4)	史料	41 (18)	
幼児教育	7 (6)	解題・目録	19 (20)	
特殊教育	1 (2)	年鑑	12 (14)	
学力調査	15 (1)		計 407(410)冊	
その他	8 (6)	追 補		
言語学その他		17 (23)	国語学その他	17 (27)
日本語の研究と教育		4 (2)	方言	6 (7)
辞典・用語集			国語教育	4 (16)
辞典・用語集一般	1 (0)	言語学その他	17 (15)	
国語辞典	9 (12)	辞典・用語集・資料	11 (20)	
用語辞典・用語集	12 (21)		総計 462(495)冊	

## B 雑誌論文の調査

主として当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの刊行物から，関係論文・記事を調査し，題目・筆者名・誌名・発行年月・巻号数およびページ数などを記載したカードを作り，分類別カード目録を作成した。採録した論文・記事の総数は1,801点に達した（連載物などは，前年と同じく各回ごとに1点と数えることはせず，その題目について1点と数えた）。

### 1 一般刊行雑誌，および大学・研究所等の紀要・報告書類の種別数

#### a 一般刊行雑誌(学会誌も含む)……244(276)種

国語・国文・言語ほか	90 (81)	総合誌	1 (0)
方言・民俗	11 (12)	文芸・詩歌・芸能	4 (4)
国語問題	3 (5)	その他(教育・社会学・心理学ほか)	57 (59)
国語教育	24 (23)	本年度臨時にはいった雑誌	34 (69)
マス・コミ関係	10 (15)		
外国語	10 (8)		

#### b 大学・研究所等の紀要・報告類……171(153)種

### 2 論文・記事の分類とその点数



国語(学)	94	87
国語史		
国語史一般	16	(28)
訓点資料関係	24	(44)
音声・音韻		
音声・音韻一般	24	(34)
史的研究	15	(5)
アクセント・イントネーション	15	(12)
文字・表記		
文字・字体	15	(11)
用字	11	(9)
表記	34	(15)
語彙・用語		
語彙・用語一般	50	(20)
古語	53	(15)
現代語	18	(19)
新語・流行語	5	(7)
外来語	7	(3)
名づけ	9	(6)
辞書・索引	8	(18)
文法		
文法上の諸問題(現代語法)	46	(63)
文法の史的研究	43	87
敬語法	33	(18)
文章・文体		
文章・表現一般	45	(74)
史的研究	79	(63)
古典の注釈		
古典注釈一般	0	(4)
上古	8	(3)
中古	16	(15)
中世	7	(7)
近世以降	13	(7)

方言・民俗		
方言一般	30	(18)
各地の方言		
東部	21	(18)
西部	38	(24)
九州・沖縄	20	(9)
民俗	4	(2)
コミュニケーション		
コミュニケーション一般	12	(23)
言語生活	19	(17)
言語活動		
言語活動一般	5	(4)
書く・読む	9	(17)
話す・聞く	18	(8)
情報処理	21	(16)
マス・コミュニケーション		
一般の問題	0	(5)
新聞	12	(9)
放送	21	(35)
広告・宣伝	5	(7)
国語問題		
国語問題一般	37	(26)
表記法		
表記一般	4	(3)
当用漢字など	8	(2)
かなづかい	2	(3)
送りがな	0	(1)
わかち書き	1	(5)
横書き・縦書き	0	(6)
かな書き・ローマ字書き	4	(10)
国語教育		
国語教育一般	35	(34)
言語能力の発達	10	(21)
国語教育史	13	(10)
学習指導一般	37	(32)

ことばの教育一般	16	(21)	各国の言語問題	12	(16)
文字・表記教育	27	(19)	日本語の研究と教育	11	(20)
語彙教育	7	(13)	資料		
文法教育	17	(30)	資料一般	13	(3)
ローマ字教育	3	(8)	国語資料	13	(27)
聞く・話す			目録	3	(16)
聞く・話す一般	16	(22)	時評・随筆	44	(120)
話しことば指導	3	(5)	書評・紹介		
読む・書く			国語(学)その他	36	(54)
読む・書く一般	15	(23)	辞書・索引	16	(6)
読解指導	56	(61)	方言	7	(13)
読書指導	9	(14)	国語教育	7	(28)
作文教育	81	(82)	言語学その他	10	(10)
文学教育	19	(33)	計 1,737(1,910)点		
古典教育	5	(13)	追補		
漢文教育	8	(9)	国語(学)その他	11	(30)
特殊教育	10	(10)	語彙・文法	25	(18)
学力評価	8	(21)	文体	9	(8)
国語教科書・教材研究	33	(57)	方言	12	(26)
言語学			国語教育	2	(14)
言語一般	76	(32)	言語学その他	5	(15)
意味	3	(8)	総計 1,801(2,021)点		
比較研究	12	(9)			
翻訳の問題	7	(15)			
外国語研究	44	(33)			
外国語教育(学習)	16	(18)			

## C 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜き、それを整理し各月ごとに製本し、資料として保存し、閲覧に供するとともに、分類別のカード目録を作った。カードの記載形式は、見出し語(欄名だけで、見出し語のないものは、その内容によって、適宜題名をつけた。)・紙名・筆者名・年月日・欄名・行数・内容の順序によった。切り抜き総数1,117点である。調査した紙名、切り抜き点数および月別の切り抜き点数は次のとおりである。

### 1 新聞の種類と切り抜き点数

<b>日・夕刊紙</b>		西日本	33	56
朝日	198 (293)	北海道	119	(122)
(大阪*・名古屋)	6 (9)	<b>週刊・その他</b>		
毎日	118 (199)	日本読書	35	83
(大阪)	8 (12)	読書人	38	83
読売	129 (178)	図書	23	(59)
(大阪)	18 (66)	新聞協会報	24	(29)
東京	101 (353)	教育日本	12	(18)
産経	108 (133)	教育学術	18	(8)
(大阪)	3 (5)	その他	33	(31)
日本経済	51 (63)			
中部日本	42 (49)			
			<u>計 1,117(1,749)点</u>	

\*かっこの中は地方出版のもの。これは、大阪の山田房一氏、名古屋の平岡伴一氏などの地方在住のかたがたから、関係記事のあるごとに恵送されたもの。

### 2 月別の切り抜き点数

1月	112(158)	2月	87(140)	3月	113(178)
4月	100(196)	5月	112(126)	6月	104(136)
7月	104(195)	8月	83(148)	9月	68(126)
10月	89(110)	11月	79(110)	12月	66(126)

### 3 新聞記事の分類とその点数

<b>国語(学)一般</b>	110 (138)	辞書	24	(22)
<b>音声・音韻</b>	19 (41)	問題語・命名	28	(68)
<b>文字</b>		地名・人名	30	(62)
文字・表記	11 (9)	<b>文法</b>	3	(16)
活字	6 (3)	<b>文体</b>		
<b>語彙</b>		文体・表現	12	(26)
語彙一般	42 (159)	<b>方言</b>		
各種用語	29 (91)	方言一般	22	(27)
新語・流行語・隠語	37 (47)	方言と標準語	5	(8)
外国語・外来語	33 (17)	各地の方言	6	(77)

<b>言語生活</b>		学習指導一般	5 (6)
言語生活一般	16 (60)	話す(聞く)	2 (5)
ことばの問題	7 (30)	読む(読書指導)	10 (12)
ことばづかいの問題	25 (32)	書く(作文指導)	21 (12)
敬語の問題	19 (9)	文学・古典教育	1 (2)
<b>言語活動</b>		特殊教育	18 (17)
言語活動一般	1 (7)	視聴覚教育	— (2)
話すこと(聞くこと)	14 (41)	ローマ字教育	— (1)
書くこと(読むこと)	4 (22)	学力テスト	2 (11)
読書	9 (14)	幼児語教育	12 (19)
<b>ことばと機械</b>		30	30
<b>国語問題</b>		<b>言語学</b>	
国語問題一般	88 (58)	言語一般	27 (37)
表記の問題		外国語一般	26 (4)
表記一般	12 (25)	比較研究	3 (4)
当用漢字など	30 (22)	翻訳の問題	36 (22)
かなづかい	3 (11)	外国語教育	21 (9)
送りがな	1 (1)	外国語に関する紹介 他	6 (2)
かな書き	3 (8)	日本語の研究と教育	30 (22)
横書き・縦書き	3 (7)	<b>マス・コミュニケーション</b>	
地名・人名の表記	12 (23)	マス・コミ一般	12 (11)
外来語表記	4 (6)	新聞	8 (7)
ローマ字	5 (9)	放送	21 (25)
<b>国語教育</b>		宣伝・広告	2 (7)
国語教育一般	20 (29)	出版	11 (28)
学習指導の問題		書評・紹介 他	120 (197)
		計 1,117(1,749)点	

昨年に比し、切り抜き点数が全体で600点あまり少なかった。これは例年、ことばに関する連載記事が何件かあるのに、今年はそれが少なかった(朝日新聞の「ことばのしおり」が前年に引きつづいて9月まで連載されたのみ。)ことが影響していると思われる。

部門ごとの点数で特に注目されることは、国語問題に関する記事が昨年よりも多いことである。これは6月に第8期国語審議会が発足し、それに関する報道、および意見などが各紙に掲載されたためである。

なお、これら国語関係文献目録の詳細は、他の資料とともに、『国語年鑑』(昭和42年版)に掲載した。

## D 担 当 者

この調査および国語年鑑編集の作業は主として次のものが担当した。

田原圭子 塚田菊子 中曾根仁

(田原, 中曾根)

## 所外からの質問について

昭和41年度に電話で受けた質問件数を月別に示すと次のとおりである。

計	月	41年	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	42年	2月	3月
	4月	4月									1月		
688	47	64	66	51	54	70	46	56	48	70	48	68	

質問の内容は、いろいろの方面にわたっているが、昨年度と同様、用字用語についての質問が最も多く、137件あった。それに次いで書籍その他のことについての照会が103件もあり、今年度のか変わった現象であった。語の意味に関するもの52件、かなづかいに関するもの50件、字の読みに関するもの48件など例年どおり、質問の多いものであった。

はがき・封書による質問は33通あった。

電話での質問に対する応答は、主として露峰裕子が当たった。

(山田)

## 図書の収集と整理

前年度にひきつづき、研究所の研究活動に必要な研究文献および言語資料を収集、整理、管理した。また、例年のとおり、各方面からの寄贈が少なくなかった。寄贈者各位の御好意に対して感謝する。

昭和41年度に新しく受け入れた図書資料の数は次のとおりである。

### 受け入れ総数

	和書	外国書	計
単行本*	1,289	218	1,507冊
紀要・年報	149	8	157種
雑誌	266	39	305種
新聞	10	1	11種

\* 抜き刷りを含む

### 内訳

#### I 購入図書資料

	和書	外国書	計
単行本	938	193	1,131冊
紀要・年報	1	0	1種
雑誌	42	18	60種
新聞	7	1	8種

#### II 寄贈図書資料

単行本	351	25	376冊
紀要・年報	148	8	156種
雑誌	224	21	245種
新聞	3	0	3種

(見 坊)

# 庶務報告

## A 庁舎および経費

1 庁 舎			
所 在	東京都北区稲付西山町		
敷 地			10,030.11 M <sup>2</sup>
建 物			
本 館	鉄筋コンクリート二階建	(延)	1,576.54 M <sup>2</sup>
付 属 建 物		(延)	1,738.64 M <sup>2</sup>
図 書 館	鉄筋コンクリート平家建書庫積層(3)	(延)	213.81 M <sup>2</sup>
電子計算機室	新営 鉄筋コンクリート平家建		118.94 M <sup>2</sup>
2 経 費			
昭和41年度予算総額			124,076,000 円
人 件 費			64,672,000 円
事 業 費			59,404,000 円
昭和41年度文部省科学研究費	総合研究		1,320,000 円
	各個研究		180,000 円
昭和41年度各所修繕費			1,605,000 円

## B 評 議 員 会

会 長	久 松 潜 一	副会長	有 光 次 郎
阿 部 吉 雄	石 井 良 助	尾 高 邦 雄	
高 津 春 繁	佐 伯 梅 友	佐 々 木 八 郎	
沢 田 慶 輔	永 井 健 三	中 島 文 雄	
中 村 光 夫	西 尾 実	西 脇 順 三 郎	

前田 義徳  
山本 有三

松方 三郎  
横田 実

武藤 俊之助  
渡辺 茂

## C 組織と職員

### 1 定員

教官 35 事務官 15 その他 25 計 75

### 2 組織及び職員

	職名	氏名	備考
国立国語研究所	所長	岩淵悦太郎	
第1研究部	部長	大石初太郎	41. 4. 1 第1研究部長に配置 換え
話しことば研究室	室長	宮地 裕 鈴木 重幸 衛藤 蓉子	
書きことば研究室	室長	西尾 寅弥	41. 4. 1 書きことば研究室長 に昇任
地方言語研究室	室長	宮島 達夫 田原 圭子 高木 翠 上村 幸雄 野元 菊雄 徳川 宗賢 加藤 正信 高田 誠 白沢 宏枝	旧姓 橋本 41. 9. 19 復職(英国より帰国) 41. 5. 1 主任研究官 41. 4. 1 採用
第2研究部	非常勤 部長	W. A. グ ロータス	
国語教育研究室	室長	興水 実 芦沢 節 村石 昭三 根本今朝男 天野 清 川又瑠璃子 福田 昭子	
言語効果研究室	室長	高橋 太郎 大久保 愛 屋久 茂子	



	職名	氏名	備考
第3研究部	部長	山田 巖	42. 3.31 辞職
近代語研究室	室長	永野 賢	41. 4. 1 東京学芸大学に配置 換え
		見坊 豪紀	41. 4. 1 近代語研究室長に配 置換え
		飛田 良文	41. 4. 1 転任
		中曾根 仁	
		牧野 正子	
第4研究部	部長	林 大	41. 4. 1 第4研究部長に配置 換え
第1資料研究室	室長	林 四郎	
		石綿 敏雄	
		南 不二男	
		田中 章夫	
		松本 昭	
		柴崎 香苗	42. 3.15 辞職
		露峰 裕子	42. 3.31 辞職
		沢田さち子	旧姓 小林
		谷内レイ子	旧姓 本多 41.11. 1 辞職
		小幡 利子	41.11. 1 採用
		益子 芳江	42. 3.16 採用
第2資料研究室	室長	飯豊 毅一	
		渡辺 友左	
		高田 正治	
		塚田 菊子	
		河東はるみ	
		芥川 豊子	
第3資料研究室	室長	斎賀 秀夫	
		土屋 信一	
		菅野 裕子	
言語計量調査室	室長 (併)	林 四郎	
		斎藤 秀紀	
		木村 繁	41. 5. 1 採用
		中野三千子	
		神山 典子	41. 4. 1 採用
		篠田美代子	41. 4. 1 採用
庶務部	部長	宮沢 武司	

	職名	氏名	備考		
庶務課	課長	鹿島 巖	41. 9. 16 体育局学校給食課課長補佐に配置換え		
		鈴木 元彦	41. 9. 16 庶務課長に昇任		
	課長補佐	伊藤 仲二	41. 4. 1 庶務課課長補佐に配置換え		
		鈴木 篁二	41. 4. 1 調査局調査課に転任		
		西山 博	41. 4. 1 庶務課人事係長に昇任		
		根岸佐代子			
		齋藤 恭子			
		田島 正幸	41. 4. 1 採用		
		出牛清次郎			
		三浦 清伍	41. 4. 1 会計課課長補佐に昇任		
会計課	課長補佐	渋谷 正則			
		鈴木 亨	41. 4. 1 会計課用度係長心得		
		筒井 士郎	42. 1. 1 会計課用度係長に昇任		
		岡本 まち			
		金田 とよ			
		加藤 雅子			
		中村 佐仲			
		安藤信太郎			
		船倉 正章			
		木村 権治	41. 6. 1 採用		
		図書館	館長(併)	見坊 豪紀	
				芳賀清一郎	42. 3. 31 辞職
				大塚 通子	

#### D 研究発表会の開催

昭和40年度電子計算機を導入して以来、電子計算機による言語調査を進めてきたが、それに関する研究発表会を、下記要領により行なった。

日時 昭和42年3月14日(火) 午後1時30分～4時30分

場所 国立教育会館 6階 大会議室

1 あ い さ つ 国立国語研究所長 岩淵悦太郎

## 2 新聞の語彙調査について

第1資料研究室長 林 四 郎

## 3 語彙調査における語彙表作成上の問題

所員 田 中 章 夫

## 4 言語情報処理における意味の取扱い

所員 石 綿 敏 夫

言語情報処理の専門研究者のほか、新旧評議員、文部省ほか関係官庁、関係各大学研究室、新聞報道機関等約150人が来会された。

## E 内地留学生等の受け入れ

各都道府県教育委員会および大学から内地留学生を、またアメリカからフルブライト委員会の奨学金による外国人留学生を受け入れ、研究の便をはかった。

次にその氏名および研究題目などを掲げる。

(内地留学生)

氏 名	勤 務・職 名	研 究 題 目	研 究 期 間
佐 藤 茂	福井大学教育学部教授	近世語の語彙論的研究	昭和41. 9. 1から シ 42. 2. 28まで
田 島 均	富山県礪波市太田小学校教諭	国語学習の構造化	昭和41. 9. 1から シ 41. 11. 30まで
太 田 光 男	長崎市立土井首小学校教諭	読解における「ことば」の位置づけ	昭和41. 7. 23から シ 7. 31まで
佐々野新太郎	長崎県福江市立崎山中学校教諭	国語科における思考力を高めるための基礎的読解指導過程の研究	シ
稲 富 一 郎	長崎県上県郡峰村立吉田小学校教諭	国語科のカリキュラムと読解	シ
阿比留 初見	長崎県上県郡豊玉村立塩浜小学校教諭	作文力を育てる指導をどのようにして進めたらよいか	シ
中 村 慶 一	富山県黒部市立三日市小学校教諭	教材及び教材研究の近代化	昭和41. 11. 5から シ 12. 5まで

(外国人留学生)

氏名	勤務・職名	研究題目	研究期間
George, D・Bedell	アメリカ、マサチュー セツ工科大学大学院 学生	日本の文法学説史 の研究	昭和41.10から 42.7まで フルブライト奨学 金による研究

## F 日 記 抄

1966. 4. 22 アメリカ合衆国スタンフォード大学日本研究センター講師  
水谷修氏他3名研究所見学
5. 10 第61回国立国語研究所評議員会  
議 事
1. 会長の選出について
  2. 昭和41年度の研究計画について
  3. その他
5. 12~13 第36回関東甲信越地区国立大学庶務部課長会議(大島で)
5. 23~24 文部省主催国立学校所轄機関等庶務部課長会議(一橋講堂で)
5. 26 東京教育大学教授河野六郎氏ほか助手・学生11名研究所見学
6. 1 アメリカ合衆国カリフォルニア大学教授王士元氏(台湾大学客員教授)研究所見学
6. 9~10 第17回文部省所轄機関事務協議会(日光で)
6. 9~10 文部省主催第25回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議  
(日本学術会議で)
6. 10 文部省所轄研究所長会議(東京で)
6. 17 東京教育大学大学院学生中松竹雄氏研究所見学
7. 7~8 著作権法改正にともなり会議(鬼怒川で)
7. 10 文部省主催国立大学および所轄機関等庶務部課長会議(西洋美術館  
で)
8. 17 アメリカ合衆国南カリフォルニア大学助教授稲本昇氏研究所見学
9. 3 文部省国語課員および国語研究所員による研究連絡会開催(国語研

- 研究所で)
9. 21～22 文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議第3部会事務協議会  
(別府で)
10. 6 チェコスロバキア東洋研究所員ネウストップニー氏研究所見学
10. 7 名古屋市立菊里高等学校教諭近藤政義氏ほか1名研究所見学
10. 11 ポーランド、ワルシャワ大学助教授ヴェエスワフ・コタンスキー氏  
研究所見学
10. 18 昭和40年度科学研究費補助金経理状況調査  
調査官 研究助成課 安田課長補佐, 堀井事務官
10. 19～20 第37回関東甲信越地区国立大学庶務部課長会議(山梨大学で)
10. 20～21 文部省所管研究所事務協議会(名古屋大学で)
10. 27～28 文部省所轄研究所長会議(国立遺伝学研究所で)
10. 27～28 福利業務担当官会議(新潟大学で)
11. 17～18 文部省所轄機関ならびに国立大学附置研究所長会議(奈良国立文化  
財研究所で)
11. 21 各省所轄研究所長連絡協議会(気象庁で)
12. 2 東京外国語大学助教授 吉沢典男氏ほか15名 研究所見学
12. 13 第62回国立国語研究所評議員会  
議 事  
1. 研究事業の中間報告について  
2. 昭和42年度概算要求について  
3. その他
12. 14 東京都立大学教授 西尾光雄氏ほか2名 研究所見学
12. 20 創立記念日 記念講演会を開く。講師 中村光夫評議員(研  
究所大会議室で)
1967. 2. 1 昭和42年度科学研究費補助金についての協議のため、文部省村上  
研究助成課長来所
2. 10 各省直轄研究所長連絡協議会世話人所长会議(電波研究所で)
2. 22 玉川大学教授 沖本季氏ほか7名 研究所見学

- 3.14 国立国語研究所研究発表会(前記D)
- 3.15 電子計算機室環境調査のため、労働衛生サービスセンター今泉氏来所
- 3.23 第63回国立国語研究所評議員会  
議 事
1. 副会長の選出について
  2. 昭和41年度の研究について
  3. 昭和42年度の予算の内示について
  4. その他

昭和42年11月

国立国語研究所

東京都北区稻付西山町  
電話東京(900)3111(代表)

UDC 413 = 956  
NDC 814.5

30

本書の市販品発行所  
東京都新宿区市ヶ谷左内町39 (260)5281  
株式会社 秀英出版

国立国語研究所刊行書

国立国語研究所年報

\*1～17 (昭和24年度～昭和40年度)

国立国語研究所報告

- 1 八 丈 島 の 言 語 調 査
- 2 言 語 生 活 の 実 態 (秀英出版刊 ¥300)  
—白河市および付近の農村における—
- 3 現 代 語 の 助 詞 ・ 助 動 詞  
—用法と実例—
- 4 婦 人 雑 誌 の 用 語  
—現代語の語彙調査—
- 5 地 域 社 会 の 言 語 生 活 (秀英出版刊 ¥600)  
—鶴岡における実態調査—
- 6 少 年 と 新 聞  
—小学生・中学生の新聞への接近と理解—
- 7 入 門 期 の 言 語 能 力
- 8 談 話 語 の 実 態
- 9 読 みの 実 験 的 研 究  
—音読にあらわれた読みあやまりの分析—
- 10 低 学 年 の 読 み 書 き 能 力
- 11 敬 語 と 敬 語 意 識
- 12 総 合 雑 誌 の 用 語 (前 編)  
—現代語の語彙調査—
- 13 総 合 雑 誌 の 用 語 (後 編)  
—現代語の語彙調査—
- 14 中 学 年 の 読 み 書 き 能 力
- 15 明 治 初 期 の 新 聞 の 用 語
- 16 日 本 方 言 の 記 述 的 研 究 (明治書院刊 ¥900)
- 17 高 学 年 の 読 み 書 き 能 力
- 18 話 し こ と ば の 文 型 (1)  
—対話資料による研究—
- 19 総 合 雑 誌 の 用 字
- 20 同 音 語 の 研 究
- 21 現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字  
—総記および語彙表—
- 22 現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字  
—漢字表—
- 23 話 し こ と ば の 文 型 (2)
- 24 横 組 みの 字 形 に 関 す る 研 究
- 25 現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字  
—分析—
- 26 小 学 生 の 言 語 能 力 の 発 達 (明治図書刊 ¥2,100)
- 27 共 通 語 化 の 過 程
- 28 類 義 語 の 研 究
- 29 戦 後 の 国 民 各 層 の 文 字 生 活
- 30 日 本 言 語 地 図 (1)
- 日 本 言 語 地 図 (2)



国立国語研究所資料集

- 1 国語関係刊行書目(昭和17~24年)
- 2 語彙調査<sup>\*</sup>  
—現代新聞用語の一例—
- 3 送り仮名法資料集
- 4 明治以降国語関係刊行書目 (秀英出版刊  
¥300)
- 5 沖縄語辞典 (大蔵省印刷局刊  
¥2,500)
- 6 分類語彙表 (秀英出版刊  
¥900)

国立国語研究所論集

- 1 ことばの研究
- 2 ことばの研究第2集
- 3 ことばの研究第3集

国語年鑑

- (昭和29年版) (秀英出版刊  
¥450)
- (昭和30年版) (秀英出版刊  
¥600)
- (昭和31年版) (秀英出版刊  
¥450)
- (昭和32年版) (秀英出版刊  
¥480)
- (昭和33年版) (秀英出版刊  
¥480)
- (昭和34年版) (秀英出版刊  
¥500)
- (昭和35年版) (秀英出版刊  
¥550)
- (昭和36年版) (秀英出版刊  
¥600)
- (昭和37年版) (秀英出版刊  
¥500)
- (昭和38年版) (秀英出版刊  
¥950)
- (昭和39年版) (秀英出版刊  
¥980)
- (昭和40年版) (秀英出版刊  
¥1,100)
- (昭和41年版) (秀英出版刊  
¥1,100)
- (昭和42年版) (秀英出版刊  
¥1,100)

- 
- 高校生と新聞 国立国語研究所 共著 (秀英出版刊  
¥280)  
日本新聞協会
- 青年とマスコミュニケーション 日本新聞協会 共著 (金沢書店刊  
¥280)  
国立国語研究所

1966 — 1967

ANNUAL REPORT OF NATIONAL  
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE  
CONTENTS

Foreword

Outline of Researches from April 1966 to March 1967

Study of Modern Japanese Grammar

Research on Meaning and Use of Verbs and Adjectives

Compiling and Publishing the Linguistic Atlas of Japan

Contrastive Study of the Dialect Grammars

Study on Junior High School Pupil's Mastering of Chinese  
Character

Preparatory Study on Language Development of Pre-School  
Children

Study on Expressional Function and Communication Effect of  
Japanese Language

Study on Language of Meiji Period

The Statistic Investigation of Newspaper Vocabulary

Analytic Study of Spoken Language Data by Computer

Basic Study on the Relation between Language and Social  
Construction

Study on Writing System of Modern Japanese

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE  
INATUKE-NISIYAMA, KITA, TOKYO